

# 演劇会議

## 戯曲特集

別冊3 戯曲集の意味するもの	萩 坂 桃 彦	1
『車椅子の王女とその騎士』	中村おがわ 大橋 喜一	2
『餅しぐれの中で』	須 間 一	26
『夜木童子考』	かたおかしろう	36
『河童陀匠文』	栗 原 省	51
『脱退勧誘』	浅 野 良 二	65
『DISCOVER→KOKUTETU』	島 源 三	72
『潮風が吹きあげて』	小 倉 利 四 郎	85

- 演劇制作スタッフ派遣 ● 舞台用器材貸出・販売
- 舞台照明操作・プラン作製・一式引受



組合や会社の文化祭・サータルの発表会とき  
どんなご相談でも気軽にお申しください。

特にサータルのしごとは、サータルの身になって  
いろいろな経験を生かし、経費の点もご便宜をは  
かります。……………ぜひどうぞ!!

株 式 会 社 **第一ステージサービス**

代 表 ・ 川 崎 ひ ろ し

東京都渋谷区代々木2-12・西原ビル TEL.03-370-0487(代表)

別冊  
3

1973年2月

¥300

### 別冊3 戯曲集の意味するもの

萩 坂 桃 彦

別冊(2)で、「とにかくこれがわれわれの現実なのだから、ここからスタートするしかない」と、覚悟はしたのだったが、あれから一年、いま、別冊(3)を編み立ててみて、編集者の心は、必ずしも晴やかとはいえない。

この一年の、われわれの創作劇における収穫は不毛だったと云ったらいさぎであらうか。

だが、このことは外部からも云われているのである。一九七二年の新劇界の回顧の中で、菅井幸雄氏が、東西リアリズム演劇会議の活動は手堅くはあるが、そこに創作戯曲の生れぬことが、もう一步、運動を先にすすめることにはなっておらぬ、という意味のことを、赤旗紙上で指摘しているのである。

残念ながら、この指摘には、今の所、反論できない。今はどんな時か。昨年の総選挙でみられた革新票の増大、とくに共産党38名の当選という、政治状況の、新しい変革を伴った現象が、もう一つ、われわれに、新しくそして緊急な課題を与えている時期である。

しかし、だからといって、そこで、政治と文化の関係は、「追いつき追いこせ」の焦燥感だけでとらえるとしたら、これは慎まなければならない。たしかにその焦燥感を抜きにしては、われわれの運動の成り立たぬことも事実だが、単純で、皮相な、政治と芸術の吻合は、百害あって一利ないのである。

ゴリキイの「小市民」や「エゴールブルーイチョフ」が社会主義が達成された時点で、ソビエトの民衆に迎えられるという歴史の事実は、ここで、教訓的ではないだろうか。

演劇が成り立つ三つの要素。戯曲、舞台、観客、そのどの一つもが、いま、われわれの場合極めて憂慮すべき深刻な局面にある、とは、こぼやしひろし東リ演事務局長の言葉だが、その警告は決して誇大ではないように思える。少くとも、その活路の一つが、この戯曲集によってひらかねばならないという現状の認識に立つと、思いは格別である。

そこには、この戯曲集によせられた作者たちへの感謝だけではすまされない問題がある。

むしろ、直ちに、活発に、この作品どもへの検討、活用にとりくみ、そのことで、作者たちを振り立たせ、あるいは、ふるえ上らせるようにして、具体的行動に入ることが、のぞましい。

このさい、別冊(2)の作品群との微妙なちがいがいなども、ひとつの示唆になるだろうとおもう。

焦燥感はいわれわれ自身の内部深くにこそむけられるべきである。

### 現実を鋭くつかみ そこから現代の 展望をきりひろくため

#### 一幕劇を書く作業

#### 一幕劇を上演する仕事にとりかかろう!

劇団は「戯曲がない」と嘆き、書き手は「書けない」と頭をかかえています。テレビや映画で満たされない観客は、「おもしろい芝居を」と云っています。殊に若い人々は生き甲斐ある生活を、ぼくらの舞台と結んで求めています。政治の分野では、草の根が地核をゆるがす時代に入りました。新しい「父帰る」が、「海へゆく騎者」が、「白い晴着」が生まれるべき時代です。混沌の霧をはらって、人間の価値と可能性をうたうべき時代です。芝居のおもしろさ、俳優芸術の魅力で、ぼくらのルネッサンスをよぶために一幕劇を書くこと、上演することは、書き手と劇団の恰好の跳躍台です。目と魂を鋭く凝らし、充分なトレーニングをかさね、力のすべてをだしきるとき、10年を迎えたぼくらの泉は、清冽な湧水を保証するでしょう。

「待つ」季節は過ぎました。手をかけずに動くものはこの世界にひとつもありません。劇団と書き手の、朝のように新しい対話をおこしてください。展望について、障害について、トコトン話合う中から解纜のスクリューを回転させてください。

一幕劇を書くこと、上演することを、ぼくらの運動としてすすめましょう。

1973年1月

東日本リアリズム演劇会議  
西日本リアリズム演劇会議

## 別冊3 戯曲集の意味するもの

萩 坂 桃 彦

今ほどどんな時か。昨年の総選挙でみられた革新票の増大、とくに共産党38名の当選という、政治状況の、新しい変革を伴った現象が、もう一つ、われわれに、新しくそして緊急な課題を与えている時期である。

しかし、だからといって、そこで、政治と文化の関係を、「追いつき追いこせ」の焦燥感だけでとらえるとしたら、これは慎まなければならぬ。たしかにその焦燥感を抜きにしては、われわれの運動の成り立たぬことも事実だが、単純で、皮相な、政治と芸術の吻合は、百害あって一利ないのである。

今ほどどんな時か。昨年の総選挙でみられた革新票の増大、とくに共産党38名の当選という、政治状況の、新しい変革を伴った現象が、もう一つ、われわれに、新しくそして緊急な課題を与えている時期である。

しかし、だからといって、そこで、政治と文化の関係を、「追いつき追いこせ」の焦燥感だけでとらえるとしたら、これは慎まなければならぬ。たしかにその焦燥感を抜きにしては、われわれの運動の成り立たぬことも事実だが、単純で、皮相な、政治と芸術の吻合は、百害あって一利ないのである。

## 現実を鋭くつかみ そこから現代の 展望をきりひろくため

### 一幕劇を書く作業

### 一幕劇を上演する仕事にとりかかろう!

劇団は「戯曲がない」と嘆き、書き手は「書けない」と頭をかかえています。テレビや映画で満たされない観客は、「おもしろい芝居を」と云っています。殊に若い人々は生き甲斐ある生活を、ぼくらの舞台と結んで求めています。政治の分野では、草の根が地核をゆるがす時代に入りました。

新しい「父帰る」が、「海へゆく騎者」が、「白い晴着」が生まれるべき時代です。混迷の霧をはらって、人間の価値と可能性をうたうべき時代です。

芝居のおもしろさ、俳優芸術の魅力で、ぼくらのルネッサンスをよぶために一幕劇を書くこと、上演することは、書き手と劇団の恰好の跳躍台です。

目と魂を鋭く凝らし、十分なトレーニングをかさね、力のすべてをださきるとき、10年を迎えたぼくらの泉は、清冽な湧水を保証するでしょう。

「待つ」季節は過ぎました。手をかけずに動くものはこの世界にひとつもありません。劇団と書き手の、朝のように新しい対話をおこしてください。

展望について、障害について、トコトン話合中から解纜のスクリューを回転させてください。

一幕劇を書くこと、上演することを、ぼくらの運動としてすすめましょう。

1973年1月

東日本リアリズム演劇会議

西日本リアリズム演劇会議

別冊(2)で、「とにかくこれがわれわれの現実なのだから、ここからスタートするしかない」と、覚悟はしたのだったが、あれから一年、いま、別冊(3)を編み了えてみて、編集者の心は、必ずしも晴やかとはいえない。

この一年の、われわれの創作劇における収穫は不毛だったと云ったらいいすぎであらうか。

だが、このことは外部からも云われているのである。一九七二年の新劇界の回顧の中で、菅井幸雄氏が、東西リアリズム演劇会議の活動は手堅くはあるが、そこに創作戯曲の生れぬことが、もう一步、運動を先にすすめることにはなっておらぬ、という意味のことを、赤旗紙上で指摘しているのである。

残念ながら、この指摘には、今の所、反論できない。

ゴリキイの「小市民」や「エゴールブルイチェフ」が社会主義が達成された時点で、ソビエトの民衆に迎えられるという歴史の事実は、ここで、教訓的ではないだろうか。

演劇が成り立つ三つの要素。戯曲、舞台、観客、そのどの一つもが、いま、われわれの場合極めて憂慮すべき深刻な局面にある、とは、こばやしひろし東リ演事務局長の言葉だが、その警告は決して誇大ではないように思える。少くとも、その活路の一つが、この戯曲集によってひらかれねばならないという現状の認識に立つと、思いは格別である。

そこには、この戯曲集によせられた作者たちへの感謝だけではすまされない問題がある。

むしろ、直ちに、活発に、この作品どもへの検討、活用にとりくみ、そのことで、作者たちを振り立たせ、あるいは、ふるえ上らせるようにして、具体的行動に入ることが、のぞましい。

このさい、別冊(2)の作品群との微妙なちがいがいなども、ひとつの示唆になるだろうとおもう。

焦燥感はわれわれ自身の内部深くにこそむけられるべきである。

# 車椅子の王女とその騎士

——七場とエピソード——

## 中村おがわ 大橋喜一

場面の大部分は、郊外住宅地の、川内家の戸外とその二つの部屋である。

### 人物

川内真沙子	二四才
川内恒彦	その義兄
安子	恒彦の妻
弘子	恒彦の娘
谷村誠一	新聞配達
ひるじ	その仲間
のぼる	二〇才

1

しての朝帰り。軽蔑するでしょうね、あなたの方。

誠一 羨しいと思います、ほんとに。

弘子 案外お上手ね。

誠一 へえ……、そうすると、あの音楽を

かけている人は、だれですか？

弘子 まあ、こんなに早くから、レコード

きちがいだわ。

誠一 よく聞かえてますよ、朝も夕方も、

弘子 (じつと誠一の顔をみる)

知りたいんですか？レコードの主を。

誠一 いえ、そのつまり、バラが咲いていて

朝のしじまに音楽が流れていて……われわ

れとは違った、こういう生活もあるんだな

あ、と時々……

弘子 われわれ？って、あなたの立場が労働

者だからおっしゃるの？

誠一 いえ……そんな、むずかしい意味じゃ

ないんです。単なるあこがれなんです。

安子が出てきて門を開ける。

誠一 お早ようございます。

安子 ごくろうさま。

誠一 バラをいつも、(おじぎ)ありがとう

ポストに新聞を入れる。箱の上にバラの花、小さなリボンがついている。

誠一 (バラをとり、リボンの字をよむ) 毎日ごくろうさま……これで三度目ノ、ぼくのために……きつとこの奥さんにちがいない。(においをかぎ、そつと花にキス)

外から帰ってきた弘子、それを見てい

る。  
(a) 川内家の戸外。朝。

(a) 川内家の戸外。朝。

バラの咲く庭のある洋風の家。

赤い新聞受けポストのある門。つづいて垣根。垣根を越してレースのカーテンがかかった窓。カーテンは閉っている。早朝……微かに音楽が流れている。

それは窓のなから。

新聞配達の誠一が小走りに登場。窓の前で立止る——

誠一 朝の音楽か、(耳をすまます)……ペー

トーベンだ。このあたりは、どこの花の庭にもバラが咲いている。(深呼吸する)

まったく、優雅な生活だ。

弘子 ごめんなさい。この通り……(大げさに平身低頭)

安子 眠らなかつたんですよ。どこへ泊ったの？

弘子 大井信也さんのところ。私一人じゃな

いわよ。誕生パーティに招かれた、みんなして……気がついたら、電車もなくなつて

いたし。

安子 タクシーだつてあるでしょうに。

弘子 あの辺じゃ、つかまりっこないわよ。

安子 なにはともあれ感心しませんね、ポーフ

イフランドのところへ泊るなんて。

弘子 あのね、お母さん……信也さんのご

両親にもお会いしましたの。妹さんにもよ。

安子 ……そりゃ、お宅へうかがつたんです

からね。……まあ、あなたも子供じゃない

んだから、分別はついていてしょうけれど……。

弘子 あのね……(母の親を見ている)

安子 なんですか？

弘子 いっちまおう、やつぱり。

安子 なにを？

弘子 プロポーズされちゃつたのよ、ぜひ、

結婚して下さいって。

安子 だれに？

(b) 川内家の居間。

洋風の居間。となりの真沙子の部屋からレコードが流れてくる。

二人は門の中に入る。

問。——音楽が流れている。

窓のカーテンがゆれ、そつと、その隙間から——髪の長い白い美しい顔が、

じつと外をみている。

やがて、カーテンがもと通りになる。

(b) 川内家の居間。

洋風の居間。となりの真沙子の部屋からレコードが流れてくる。

二人は門の中に入る。

問。——音楽が流れている。

窓のカーテンがゆれ、そつと、その隙間から——髪の長い白い美しい顔が、

じつと外をみている。

やがて、カーテンがもと通りになる。

(b) 川内家の居間。

洋風の居間。となりの真沙子の部屋からレコードが流れてくる。

二人は門の中に入る。

問。——音楽が流れている。

窓のカーテンがゆれ、そつと、その隙間から——髪の長い白い美しい顔が、

恒彦 いずれにしても、工場の建設は相当先に延ばした方が得策となるかも知れん。

(弘子と真沙子の笑い声がする。)

恒彦 なんだ……真沙子と弘子が笑って話しているぞ！

安子 ほんとに……

恒彦 どうしたんだ、弘子の奴？……真沙子の部屋で、二人で笑っているなんて。こんなこと、って、今までにもちよいちよいあったのか？

安子 人間で、いいことがあれば、心も自然とひろくなるもんですわ。

恒彦 いいことがあった？ 弘子に。それがあいつの外泊に関係があるのか？ ……え、いったい、なんのことだい。

(6) 真沙子の部屋

ベッド、とステレオ。窓が開かれている。車椅子にのった真沙子。

そばに弘子。

ステレオから「田園」が流れている。

弘子 なんなの、真沙ちゃん。なにがおかしいの？

真沙子 不思議だわ。どうしたんでしょ、今日は。

弘子 そんなに変？ あたし。

真沙子 ……いい事があったのね？……怒らないで、弘ちゃん。

弘子 おっしやいよ。

真沙子 まず、牛乳を運んでくれて……

弘子 珍らしい事じゃないでしょう。いままですら……

真沙子 でも、テーブルの上に置いたら、すぐ出ていってしまうでしょう。私が一言もいわないうちに。

弘子 そうだったかしら？

真沙子 そうだわ、いつも。……なにか言ってくれないかなと、私いつも待ってたの、ほんとは。

弘子 私って、そんな？……いやねえ……

真沙子 でも今日は、もう十五分もいてくれるわ。窓をあけてくれて、香水をまいてくれて、薬くさいんですもの、私の部屋。お花の匂いがとてもほしかったの。

弘子 それくらいなら、これからいつもしてあげるわよ。

真沙子 でも、ベッドから、車椅子にうつすのたいへんだったでしょう。これでも重い

から、私、お母さんとお父さんは、毎日やっていることじゃないの。

真沙子 義兄さんには力があるからいいけれど、義姉さんにはいつも申し訳けないと思

っているの……私、もっと目方が重くならないように、気をつけるわ。

弘子 真沙ちゃん。……あなた、そんなに……

真沙子 ……そんなに気を使っていたの……

真沙子 やさしいのね、弘ちゃん。

弘子 ……ほんとはね、私ね、……今朝は夢みごちな……すばらしい気持ち。だから、やさしいのかしら。

真沙子 私も味わってみたいわ、すばらしいって気持ち。一度でもいいわ。……私にもあるわね、きつと。きつとあるわ。私いつもいつもそれを待ってるのね……私の頭の上に夜空があるというその目を。

弘子 夜空が？ 頭の上に？

真沙子 私の頭の上には、いつも屋根があるでしょう。

弘子 じゃ、表へ出ればいいのよ。

真沙子 そうね、表へ出ればいいのね。(淋しい微笑)

間。

弘子 でも、真沙ちゃんは、ここのお庭よりほかに出たことがなかったわね。

真沙子 ええ、でも、想像だけはするわ。とても、とても、深い、吸い込まれてゆくような青空……ね、弘ちゃん、教えて……あなた、とてもいいこと……夢みごちのすばらしいこと……聞かせて……あなたにいいことは、きつと、私にもいいことにちがいないわ。

弘子 ……いえないわ。

真沙子 なぜ？

弘子 なぜかしら？……私にいいことが、真沙ちゃんにもいいことは、限らないでしょう。

真沙子 わかってるわ。

弘子 え？

真沙子 ……しのぶれど色にでにけり、って弘子 あり。

真沙子 百人一首にあるでしょう。

弘子 カンがいいのね。

真沙子 それから……野守は見ずや君が袖ふる。

弘子 真沙ちゃん……頼田王の歌ね。それ。

真沙子 私の大好きな歌。……あかねさす。

弘子 紫野ゆき、漂野ゆき……

真沙子 野守は見ずや、

弘子 君が袖ふる。

真沙子 昔の恋の歌……ごめんさい。私のでしゃばり。

弘子 感心してるの。ほとんど学校へもいかないの、真沙ちゃん。

真沙子 そのかわり、本をよむ時間はあったわ。私に人よりたくさんあるもの、それは時間なのよ。

弘子 ……白状するわね。私、ある人から昨夜、プロポーズされたの……愛してる、って言われたの。

真沙子 (あこがれをもって) いいことねえ……愛されるということ。

弘子 喜んでくれる？

真沙子 ええ、……でも、ほんとは、私のことじ

ゃないんだわ。少しおっちょこちょい、私。

弘子 どうして、そう一自分を感じてるの。私よりなんでもよく知っているのに。

真沙子 年だけは、二十四になったんですもの。ほんとに信じられない、私が二十四。

弘子 いじわるだったわね、私……

真沙子 ほんとにいいことだわ。愛されるっ

て。……私もだれかに愛されたら、きつと素直になれたでしょうにね。それで、あん

たも愛してるんでしょ、その方。

弘子 もちろん。

真沙子 私もだれかを好きになれたら……カナリヤだっていいわ。

弘子 カナリヤ、好き？

真沙子 人間なんて、高のぞみよ、私には。

弘子 真沙ちゃん！

真沙子 ……前に義兄さんがいってくれたの。カナリヤの籠を下げようか、って。

弘子 いいわねえ、カナリヤは。

窓の向うに誠一がきて立止っている。バラをまだもっている。

弘子、窓によって

弘子 配達、終わったんですか！

誠一 ええ、足が止っちゃったんです。「田園」が流れてくるから。

弘子 音楽に気をとられて、間違えられないようにね。空巣狙いが多いでしょう。この頃。

誠一 そりです。盗むとしたらなにを狙おうかな。

弘子 ああら、あんた冗談がいろいろの！

誠一、真沙子をじっとみて、一礼して去る。

弘子 あの子、真沙ちゃんに、おじぎしていったわ。

真沙子 ……バラをもっていたわ、あの人がったのね。……

弘子 どうかしたの、真沙ちゃん。

真沙子 レコードをかけてるとき、時々、窓の向うに立ってる人がいたの……音楽好きなんだなあ、と……ヴォリュームをあげてみたり。

弘子 すみにおけないわ。真沙ちゃんも……

……こんな言い方いいわね。真沙ちゃんはお私のおばさんですもの。

真沙子 いや、弘ちゃんから、おばさんだなんてよばれたら、死にたくなるわ。

弘子 あの子ね、うちのバラにね、お母さんが置いておいたバラにね、キスしていたのよ、今朝。

真沙子 見たの？ あんた。

弘子 そう、冷かしたら、真赤になったわ。

真沙子 悪い人、朝帰りしたくせに。

二人笑う。

真沙子 こんなに笑ったこと始めてね。よかったわ、生きていて。

弘子 ……なによ、生きていて、なんて。間。……

二人、また笑う。

舞台の、まったく離れた一隅に、誠一が立っている。手にはバラ。遠くをみつめるように、ぼんやりと立っている。

ひろしとのぼるがあらわれる。誠一は気がつかない。

二人はうしろから誠一の背中をどやす誠一はおどろいて二人を見るが、なにも言わない。二人はバラを見、首をかしげ、ニヤニヤ笑う。

誠一は、バラをそっと口もとにもって行く。目は遠くを見つめて。

2

川内家の居間。夜。

恒彦、安子。

恒彦 そういうことがあったんなら、そのように早くいえないのに、弘子の奴もそうだ、自分の父親をそんな……

安子 でも、あなたが……

恒彦 出来ることなら、おれの事業の後継者になれる男を、と考えるのは当り前じゃないか。だからといって、娘に好きな男がいるというのに、気のすすまない結婚を強いる程、おれが分らず屋だと思っていたのか。今どきの、まして、大学へまでいかせてある娘だからな。

見合い写真らしきものを、手荒く片付ける。

安子 まだ弘子の口からばかりで、相手の人物もよくわかっていなかったから……

恒彦 よべばいいじゃないか、家へ。

安子 よんでいいんですか？

恒彦 いいだろう。

安子 ……

恒彦 なんだ？……真沙子のことか？

安子 ええ。

恒彦 真沙子の存在と、弘子の結婚は関係がない。

安子 でも、弘子はこの一人娘です。真沙ちゃんの将来のことは当然……

恒彦 そんなことで、こわれるような、そんな浅はかな愛情なら、こわれた方がむしろいいじゃないか。

安子 あなた、それは無責任なおっしゃり方です。真沙ちゃんは現実にごにおります。しかも、弘子とは二つしか違わないんですからね。この先、私たちだって、いつまでも若いというわけじゃないし。

恒彦 わかった！……始末をつければいいんだらう。

安子 ひどいわ、そんな……始末をつけろなんてだれが言いました。

恒彦 お前は嫉妬しているんだ。真沙子が母親にそっくりだということから。

安子 (さへ切って) 真沙ちゃんは、あなたの妹なんですよ。

恒彦 たしかに、おれとは兄妹だが、あれの母親は、おれの許婚だった。……戦争と、親爺の淫蕩な血が……。

安子 あなたのお父さんの罪を、いまさら言っても仕方ないじゃありませんか。

恒彦 だが、そのことでお前はずーっと、下らん妄想をもちつつけているじゃないか。

安子 なにが、下らない妄想なんですか。

恒彦 おれが真沙子をかあいがるのは、あれの母親が忘れられないからだ。あれのなかにその面影があるからだ……

安子 そうじゃございませぬの？

恒彦 みな遠い昔のことさ。……お前の考えてることがまるでの外れだとはいわん。だが、考えてもごらん。事業家であるおれがそんな、文学青年じみた感傷で行動したと想うかい。

安子 では、あなたがお父さんと和解なさったのは、財産が目当てだったとおっしゃるの。

恒彦 あの当時、私たちは裸同然だったね。

安子 あの子の面倒をみることで、その財産を管理するというのが条件だったものね。

恒彦 そうだよ。お前はあの時、真沙子を拜みたいくらいな気持でいたじゃないか。それがあつたればこそ、何回かの事業の危機も切り抜けて、今日の川内電気を築くことができたわけだ。戦争であくどいもうけを

した親爺だが、一つだけいいことをやって死んだ。真沙子に財産の大部分を残したとだ。

安子 そのかわりに、一人娘の弘子が、身体障害者の姉を背負いつづけるのと同じ、そんな不安で、生きていかなければなりませんのね。

恒彦 弘子には負担をかけないよ。

安子 そうはいきません。同じ屋根の下で暮してきたんですから……

恒彦 仕方があるまい。

間。

弘子、カナリヤの籠をもって出てくる

弘子 小鳥屋のお店って、探すとなかなかないものね。

恒彦 カナリヤか……お前、世話ができるのか。毎日きちんと餌をやらなきゃならんよ。

弘子 私じゃないわ、世話をするのは。

恒彦 はじめから、お母さんに押しつけるつもりか、やれやれ。それでなくても真沙子の世話で手一ぱいなものを。

弘子 その真沙ちゃんが世話をするの。

恒彦 真沙子だって？ カナリヤ。

弘子 ええ、飼って、世話をしてみたいって自分から言いだしたのよ。

恒彦 真沙子が……自分から……

弘子 真沙ちゃんだって、自分からやりたいことがあっていいじゃない。

恒彦 ふむ。それでお前が……こりゃ、大出米だ。

弘子 この鳥籠、高かったのよ。あとでカンパ頼むわね。さて、どこへ下げてあげようかな。

弘子、去る。

恒彦 どういうことなんだろう？真沙子がカナリヤを飼うなんて。

安子 人の世話になっている身体で、生きものを世話したいんですね……

恒彦 つまらんことを、まさかお前、真沙子の前で、

安子 だれが言うもんですか、ここだけの話です。

恒彦 お前がこれまで、どんなにたいへんだったかよくわかるよ。身体が不自由なれば

こそ、どんなわがまま、ひがみ……がまんをしてやらなきゃならない。

安子 それに近ごろは重くなりましたわ。

恒彦 はじめの頃は、小犬を抱くように軽くて柔らかかった。……いまでは漬物石のように重く、その上、コンニャクのように骨がない……お前の子供でもないものを、よくやってくれたと、感謝は忘れてはいないよ。

安子 私も、この頃のように肩が痛みませんでしたらね。

恒彦 おれだって、高血圧と、初老期の神経障害とやらを医者にいわれた時は、しみじみと年命を思い知らされたわけだ。なんとか、専門に世話をしてくれる人を探さなきゃならぬが……

安子 なかなかいませんよ。掃除のおばさんを頼むのはちがいますからね。

恒彦 せめて、トイレの用だけでも、一人で足せたらと思うよ。

安子 ……いやがりますでしたか、あなた

恒彦 ……お前の肩が痛むことを言ってきたせたら、観念しようだが、おれだとやっぱりつらいらしい。

安子 かあいそうに……なんとか、いままで

通り私がやってあげるべきですわね。

恒彦 だって、お前、いまでも手がうしろへ廻らんのだらう。

安子 (腕を廻してみる) いたいノだめだわ……こんなに痛いとは、五十肩って……

問。

安子 ……弘子の話、どうします？

恒彦 どうするって？

安子 結婚させて、外に出すか……

恒彦 うむ。

安子 この家にむこうなどという話は、あの子絶対に受けつけませんよ。相手の人を家へよぶことさえ、きっぱり断っているくらいですから。

恒彦 うむ。

安子 するすべつたりしておく……婚期を逸しますからね……私たちが万……

恒彦 弘子に真沙子をおしつけるようなことは絶対にしないよ。

安子 このままでは、いつか、おしつけるのと同じことになりまますよ。

恒彦 (怒ったように) わかった！……始末をつければいいんだらう。

安子 ……どうして、そういらいらなさるんです？

弘子が部屋へ入ってきて、おどろいたようにみている。

3

(a) 川内家の戸外。昼。

舞台前面に誠一。ぶらぶら歩きの散歩姿。

誠一 秋だなあ……病葉が、まだ強い日ざしにさらされているのは、痛ましい感じがする。……小学校はとうに新学期がはじまって、夏の間賑やかだった児童公園も、いまはひっそり。ぼくたちに残されたわずかにのどかな時間……角を曲るとあの家が見えます。もうだいたい前から窓にカナリヤの籠がおかれました。……今日は音楽はきこえてこない。

川内家の窓が開いていて、カナリヤの

籠がおかれています。

車椅子の真沙子、じっと鳥籠を見つめている。——何を思ったか、手をのばし、鳥籠を窓の外に突き落とす。

誠一 あれ？……なんだ、鳥籠が……(あきれてしばらく見つめている。)

真沙子、うつ向いて黙ったまま。

誠一、垣根に近より、窓の方をしばらくみている。

誠一 ……こんにちは。

真沙子 ……(目を上げるが、すぐに伏せ、

誠一 ……どうしたんですか？カナリヤの籠

真沙子 ……

誠一 なにかしたんですか、カナリヤ。

真沙子 ……

誠一 誠一は垣根をこえ、窓下の鳥籠を拾いあげ、窓辺による。

誠一 かわいいじゃありませんか。

真沙子 いません／＼あげます。

通りがやってくるべきですわね。

恒彦 だって、お前、いまでも手がうしろへ廻らんのだらう。

安子 (腕を廻してみる) いたいノだめだわ……こんなに痛いとは、五十肩って……

問。

安子 ……弘子の話、どうします？

恒彦 どうするって？

安子 結婚させて、外に出すか……

恒彦 うむ。

安子 この家にむこうなどという話は、あの子絶対に受けつけませんよ。相手の人を家へよぶことさえ、きっぱり断っているくらいですから。

恒彦 うむ。

安子 するすべつたりしておく……婚期を逸しますからね……私たちが万……

恒彦 弘子に真沙子をおしつけるようなことは絶対にしないよ。

安子 このままでは、いつか、おしつけるのと同じことになりまますよ。

恒彦 (怒ったように) わかった！……始末をつければいいんだらう。

誠一 ……

はじめて二人の視線があう。すぐ目をそらす。

誠一は鳥籠をもったまま途方にくれる。

誠一 ……カナリヤ飼うなんて、そんな余裕

ぼくにはありません。何しろ新聞屋に住込みの身ですからね……学校もすぐにはじまるし。

真沙子 ……

誠一 かあいそうだな、捨てられたカナリヤなんて……(籠を窓辺にのせる)

真沙子 いらぬわ。

誠一 でも……カナリヤにも、生きる権利があります。

真沙子 生きる権利？……

誠一 ええ。……生きものですからね。

真沙子 ……あなた、なぜ、立っていらしたの？ あそこには？

誠一 ……だって……鳥籠が……

真沙子 私が珍らしかったの？

誠一 (ドギマギ) いいえ。

真沙子 ……窓を開けておくと、珍らしそう

にのぞき込む人がいるわ。珍獣でもみるよ  
うに……だから、大きいそでで閉めるんす  
けど……

誠一 ぼくはそんな……鳥籠が落ちていて……

……大事なカナリヤなんでしょう。

真沙子 わがままなんです。

誠一 カナリヤが？

真沙子 餌をやつて、水をのませて、馴らす  
うとしたんです。でも、自分の好きな時だ  
け。自分のいい時だけ、……馴れたふりを  
するの……気に入らないと、指を入れても  
振り向きもしないわ。

誠一 小鳥ですからね、高等な知性は、とて  
もじゃ。

真沙子 人に飼われているくせに、気紛れで  
す。自分のしたいようにして……

誠一 動物ですもの、そんな認識は……

真沙子 でも、素質が大切ですね。飼われ  
てるんですもの、ナーシーサスは。

誠一 ナーシーサス？

真沙子 カナリヤの名前、私がつけたの、ナ  
ーシーサス。またはナルシルス。

誠一 そうか、ギリシャ神話の、自分の姿に  
恋こがれて、泉にとび込んだ少年の名だっ  
た。

真沙子 いい名前でしょう。

誠一 そのナルシルスを窓から捨てるなんて

……思ったよりエクセントリックなんだな  
あ、あなたって。

真沙子 ごめんさい。私ときどきこうなる  
の……ひどくメランコリックに。

誠一 あなたは、ほんとは優しい人、いや、  
さびしい人といった方がいいな……ぼく、  
力になれたらなってあげたいけれど、だめ  
です。

真沙子 どうしてですか？……時々、お話に  
いらして下さるだけでいいんです。

誠一 そんな、ぼくなんか……

真沙子 窓の外から声をかけて下さるだけ  
もいいわ。

誠一 なんて？

真沙子 ……こんにちは。それでいいの。

誠一 ……こんにちは。ぼくの名は誠一です  
谷村誠一。

真沙子 こんにちは、誠一さん、私は真沙子  
です。……まあ、私たち、おとぎ話して  
みたい。

誠一 すると、あなたが王女で、ぼくがナイ  
トってわけかな。

真沙子 ええ……そして……(真剣な調子

で)私をこの城から自由にして下さい。

誠一 ……ぼくに、できるかしら？

真沙子 おとぎ話ですわ。

誠一 ……そう、……待つて下さい。私がき  
つと救い出してみせます。

二人は楽しそうに笑う。

誠一去る。

離れたところから恒彦がそっと見てい  
た。

(b) 川内家の居間。夜。

真沙子の部屋でレコードが鳴ってい  
る。「歓喜の合唱」

恒彦と安子。恒彦の前にウイスキー。

安子 いやですわ、そんな推察するなんて。

恒彦 その方面のことは、男の外形だけでは

判断できないよ。

安子 ただ、話をしていただけなんでしょ  
う？……

恒彦 うん、でも、真沙子はきれいだからね  
え、身体の発達だって、外形的には常人と  
かわらない。……そして、男がその気にな

安子 新聞ですって、あなた。  
恒彦 おい、あの裁判、無罪になったよ。出  
ているぞ。

安子 (新聞をのぞく)……父親に無罪、恩  
情の判決……

恒彦 よく似てるじゃないか。……ねたきり  
の二五才の息子。看病に疲れ果てた父親。

……発作的にわが子の首をしめた……自分  
も自殺をはかったが、それは失敗した。……  
……発作的にだ。

安子 発作的ですか……

恒彦 二年かかったね、裁判。

安子 二年になるんですね、もう。自殺に失  
敗して……どんな思いだったかしら、この  
二年間。

恒彦 とにかく、無罪になってよかった。

安子 無罪の理由はなんですか？

恒彦 (記事をよんで)この場合、安楽死に  
相当するように考えるのは誤解である。こ  
れまで、安楽死だとして無罪になった例は  
ない……

安子 安楽死は認められないのね。

恒彦 ……むづかしいんだね、安楽死を認め  
る条件は……不治の難病で、死期が目前に

つたら、まったく無防備だ。抵抗すること  
ができまい、一たまりもないよ。それは、  
誘惑の一つの条件にさえなるんだよ。(ウ  
イスキーをのむ)

安子 こわいわ。恋態的な男は、四つか五つ  
の子供にまで、手を出すといえますから、

……でも、あの配達の子は、とてもそんな  
人には見えないの、ロマンチックな……

恒彦 ……ことによると、真沙子の方から声  
でもかけたのかな？ 彼に。

安子 そんなはしたくないこと、真沙ちゃん  
が。

恒彦 お前は見なかったからだ、あんな真沙  
子の表情はいままで一度だって……実に生  
き生きしていたな。

安子 弘子に青春があるんですもの……真沙  
ちゃんにだって当然だわね……そうなの  
よ、

恒彦 青春か……なにかも人並みに……な  
ら一思いに奇蹟もおきてくれないか。

安子 どんな奇蹟ですか？

恒彦 明日の朝、真沙子がベッドから立ち上  
る。一人でおきる。歩きだすんだ……そ  
れが出来たら、おれの生命を半分くれてや  
ってほしい。……それができたら、相手は

新聞配達の青年だろうとかまわん……おれ  
は祝福して、くれてやる。(またウイスキ  
イをのむ)

安子 夢ですよ。

恒彦 おれは時々考えるんだ。真沙子のや  
つ、実は立てる。歩けるんだ。だれも見  
ていないところでは、こっそりと歩き廻  
っているんだ、小さな悪魔のように。それが  
おれたちが見ていると、あおして動けなく  
なり、おれたちに復讐している……だれの復  
讐なのか、なんのための復讐か、それはわ  
からないが……

安子 まあ……あなたも、ですか？

恒彦 お前も考えるのか？ そんなこと。

安子 ええ、疲れている時なぞ、時には。  
恒彦 人間、だれでも同じようなことを、考  
えるもんだなあ。(息を吐く、少し酔って  
る。)

安子 ブザーが鳴る。

真沙子 真沙ちゃんがよんでる。どれ……

真沙子の部屋へゆく。  
恒彦は新聞をひろげる——よむ。

ある記事にいく入るように入る。  
安子戻ってくる。恒彦は気付かない。



迫っていて……肉体的苦痛が黙視できないようなもので、しかも手段が倫理的であり妥当なものでなければならぬ。

安子 きびしいのね。

恒彦 本件の場合には、発作的行為だということ、心身喪失で責任能力がない——それが無罪の理由さ。

安子 へんな理由だわ、責任能力がないなんて……

恒彦 理由なんて、無罪にするためにこじつけるものさ。でも、無罪でよかった。もともと個人だけの責任で処理できるもんじゃない。今日の公害の状況からも考えてごらん。……高度成長社会——未確認の社会的責任に帰するものだって、どれ程あることか。日本という国がいかなのだ、もっと社会福祉に力を入れて、対策を立てんという法がない！税金だけはふんだくって……

また、ブザー。

二人は沈黙。

安子 真沙ちゃん、端から端まで丹念によみますからね。

恒彦 ……さあ、新聞だ。(新聞を出す)

真沙子 ……(返事をしない)

恒彦 ……なにが気に入らないんだ……ふてくされか……抵抗してるんだな……(間)

……沈黙の抵抗か。

真沙子 義兄さん。

恒彦 ……なんだ？

真沙子 私、もっと、もっと……

恒彦 ……もっと、なんだ？

真沙子 早く死んでいけば……

真沙子 こんなにも、二十四にもなるまで、

生きてるなんて、思わなかったんでしょ

ね。

恒彦 バカヤロー。

間。

真沙子 私……すまないと思ってるの、いつ

も……義姉さんにも、弘ちゃんにも……

恒彦 そんな立き言は、おれたちの苦勞を。

苦勞を……(言葉が出てこない)

真沙子 生きてるんなら……私、いつまで

も、せめてごどものように小さかったらな

アと思うの……でも、皮肉だわ。私の消化

恒彦 何のために、あれは新聞をよむんだろ

う。よんで何の役に立つ。真沙子の世の中

のあれこれを知ったところで、どうなる

というんだ。……しかし、この記事は見せた

くはないな。

安子 仕方ありませんよ。へんなごまかしは

できません。とてもカンが鋭いんですから

ブザー、鳴る。

恒彦 うるさいな！

恒彦は新聞をつかんで出ていく。

(c) 真沙子の部屋

ベッドの中の真沙子

恒彦が入ってくる。

真沙子は恒彦の様子をじっと見ている。

恒彦 ……なんだい

真沙子 ……まだあかないの？新聞。

恒彦 (意地悪く) 読み終ってないんだよ。

真沙子 ……そう。もう九時過ぎだから……

器って健康なのね、体重も重くなってしま

ったし、あれこれいろいろなこと、考え

るようになるし。

恒彦 もう、よせ！

真沙子 ベトナムでは、たくさんの方が殺さ

れているのよね、毎日。犬か猫のように殺

されている、そんな世の中なのに私……

恒彦 ベトナムのこと、お前がベッドで考え

てたって、どうなるものでもないんだ。……

……世界には、のべつにいろいろなおこ

ってるよ。人殺しもあれば、結婚式もある。

赤ん坊も生れば、一家心中もある。

戦争、汚職、破産、交通事故、ありとあら

ゆるそれらを、一々意識していたら、とて

も生きていけやしない。

真沙子 考えちゃいけないんですか？

恒彦 考えてもどうにもならんことは、考え

たつてしょうがないんだ。おれは、おれの

意志で動かせる事業のことしか考えない。

それでいいと割切っているんだ。

真沙子 じゃ、私は、何を考えたいのか

しら？ 私、自分の身体が、自分の意志で

どうにもならない私。

恒彦 ……神様でも信仰しろ。レコードをあ

きるまで聞け……本でも読め、でなきや、

恒彦 お前は、よくあきもせず丹念に新聞を

よむんだね。

真沙子 ……

恒彦 気分はどうなんだ？

真沙子 ……別に……普通だわ。

恒彦 いまは、どこも痛まないのか。

真沙子 ……ええ。

恒彦 ……そりゃよかった。

真沙子 都合が悪いこと？

恒彦 なにがだ？

真沙子 私がよんではいけない記事でもある

の？

恒彦 ……いや、なんで訊くんだ、そんなこ

と？

真沙子 いいわよ、その部分は読まないか

ら。

恒彦 そんなこと出来るわけないじゃない

か！

真沙子 ……

恒彦 また、新しいレコード買ってきてやろ

うか。今度は何がいい？ 広告にあったな

オイストラップのヴァイオリン、セルのク

リーヴランドが協演で、ブラームスの協奏

曲なんか……

真沙子 ……考えとくわ……

……(黙ってしまう)

しばらく、間。

恒彦 (突然、新聞をつきつけて) ここんと

こだよ。お前に読ませたくない、と思っ

いたのは。

真沙子 (新聞をみる)

恒彦 お前はカンがいい……寝ていて、もの

ばかり考えて……人の顔色を観察して……

カンばかり妙に発達してる……お前に隠し

ごとをしても、すぐに感じとる能力がある

……読んでみる……殺しても、有罪にはな

らなかつたんだ！……発作的にやってみ

えば無罪なんだ。(いらいらと歩く) ほん

とだ、ベトナムではやたらと人殺しだ。人

を殺して勲章をもらう、その人殺し作業の

おこぼれに、日本の経済はくらいついて栄

える。そんなもんだ、世界は。

真沙子 ……二十五年も生きていたの。つら

かったでしょうね。

恒彦 無罪なんだぞ、発作的にやれば。

真沙子 (恒彦をじっとみる) 私、死んでも

いいわ。……

恒彦 立て！……立つんだ！

真沙子 義兄さん。  
恒彦 立って、逃げろ……お前は立てる、その気になれば立てるんだぞ！

真沙子 ダメよ、動けないのよ。

恒彦 なまけ者、芋虫ノ……この芋虫め、動いてみるノ逃げろノ！

真沙子 死んでもいいわよ……でも、兄さんは人殺しを……(涙をいっばい)

恒彦 (突然真沙子をだく) 真沙子……(声をあげて泣く)

真沙子 義兄さんノ……(涙を浮べているが冷静。遠くをみる眼ざし)

扉がそっと開き、安子がのぞく。

恒彦 立上る。——黙って部屋を出る。

(d) 居間

恒彦と安子。

二人とも、しばらく黙ったまま。

安子 あなた、まさか、あんな記事をよんだからといって……

恒彦 わからんぞ……発作的に……

安子 お仕事もなにも、万一にもそんなことが……

恒彦 なにかも、わからなくなるからこそ、発作的なんだ。

安子 おそろしい……

恒彦 あれに、ひどい言葉をいったようだが、……できるだけのことはつくしてきたもんな、おれたちは。医者にだって、どれだけの数……

安子 もっと子供のうちに、養護施設に入ることができたらと思うわ。どこも断られてしまいましたからね、重すぎるからって。

恒彦 いったったか、大蔵省の役人がいったこと……社会に還元する能力を持たぬ者のために、多額の費用を使うことは、税金を納めている大多数の国民が納得しないってな。社会に還元する能力を持たぬ者か。

安子 なまじお金ができたがため……ね、あなた、真沙子ちゃんが幸せになって、私も平和に暮せることができたら……もう、財産なんかもいらなと思うわ。

恒彦 おれだって同じ気持さ……(何か考える)……うむ。

安子 なんですの？

恒彦 第二工場を建てる予定だった土地のことさ、あの田舎の……当面、工場の建設はやらないし……

弘子が帰ってくる。

弘子 ただいま。おそくなっちゃまって……なに深刻な顔してるの、二人して。

安子 あなたは、楽しそうでいいわね。

弘子 私、信也さんに話しちゃったの。

恒彦 ……真沙子のことをか。

弘子 ええ、みんな。

恒彦 お前の結婚とは無関係だ。

安子 なんてお話したの？

弘子 でも、私はこの一人娘よ……お父さんの希望通り、結婚して川内の姓を名のとしたり、当然、重大問題なんですもの。

安子 それであちらでは？

弘子 深刻な問題だね、って……でも、そのことで結婚の意志は少しもかわらないし……施設に入れるように、運動してみらうって。彼の叔父さんがね、厚生省のね、少し偉いところにいるらしいのよ。

恒彦 そうか……うむ。

弘子 真沙子ちゃんには気の毒だけど……

安子 うまくいきませすかしら。

弘子 それから、私……叱られちゃうかしら……

恒彦 なんだ。

弘子 昨日、偶然あったの。駅前で。あの、新聞配達の青年、谷村誠一君に……でおねがいがいしちゃったの……真沙子ちゃんのお友だちになってあげて、って。

安子 まあ……

恒彦 軽はずみもひどい……真沙子は、真沙子は回復の見込みのない身体障害なんだぞ。

弘子 だって……だって……真沙子ちゃんだって、ボーイフレンドの一人ぐらい……人間でしよう、人間のよ。

恒彦 わからん、お前などのやることは、弘子 なんだか、私ひとり、ひとりだけ幸せになつて……

安子 お交際したって、どうにもなりはしないし、失礼よ、相手の人に。

弘子 失礼って？ なにが、お母さん。

真沙子の部屋からレコードが聞える。

「断頭台への行進」

光の輪の中の真沙子。

光の輪が、ベッドのなかの真沙子を浮べている。それはどこだかわからない。真沙子の部屋のようにもあり、病院のようにもある。

恒彦と安子が、その後から弘子が、静かに入ってきて、ベッドのそばに立つ。

やがて——恒彦がおもむろに口をひらく。

恒彦 さあ、真沙子。お前がホームに入つて、安心して暮してゆけるための、必要やむをえない手続きなんだ。お前もそれを納得して賛成してくれたね……いまは手術も進歩しているから、心配はなにひとつないんだよ。

真沙子 ……はい、私もう決心したことですから、平気よ。

安子 真沙子ちゃん、ごめんなさい！ほんとにいじらしい。判つてますよ、かわつてあげたいわ、ほんとに。……私なんかもう若くないんだから、代つてあげたい……(すすり泣く)

恒彦 やめなさい。今さら、どうしようもな

いじやないか。

安子 そうはいつでも……女の、女のしるしですものね。女の、女の実感なのよ。それを……

恒彦 いい加減にしないか。……それともお前は、ホームへのべつ真沙子の世話をしにいくというのか。それくらいなら、なぜうち……

真沙子 泣かないで、お義姉さん、お義兄さんも、もうけんかをしなないで。……私決心したことですから、平気よもう。これから

はさばさばして、面倒くさくなくて、恥しさが一つ消えるんですものね。

安子 恥しさ？ そんなに恥しかったの、真沙子ちゃん……

真沙子 ええ……ですもの、いいのよ。……(突然、弘子が悲鳴のような声で泣く)

恒彦 (こらえ切れなくなる) 真沙子、許してくれ！

安子 許してね、真沙子ちゃん。

真沙子 ありがとう。弘ちゃん、お義姉さんお義兄さん。私、一度でもいいの、みんなの役に立つことができたら……だから、平気。もう泣かないで、ね、弘ちゃん、お義姉さん。

光が強く真沙子にあたる。  
上半身をおこした真沙子は、その長い髪にいとそうに頬をよせる。  
光がだんだんうすくなり——消える。

5

新聞店の一室と戸外。

誠一とのぼるとひろし。  
のぼるは新聞を読み、ひろしはギター。  
誠一はぼんやりしている。

のぼる おい、誠一。お前がいう社長の家って、たしか川内電機だったなあ。記事にのってらあ。

誠一 ああ、寄附をしたことだろう。  
のぼる 身体障害福祉施設へ、土地及び私財を三千万円出す。……慈善家だねえ。

ひろし 町の噂、聞いてねえのかい。自分の家にな、年ごろの娘が二人いて、その一人が身体障害者なんだ。それを施設に引きとってもらうかわりにだ、多額の寄附をした

ってわけだよ。なあ、誠一、そうだろう。

誠一 そんなことまでは知らないよ！

ひろし お前、なんで、そんなとんがった返事をするんだあ。

のぼる そうか、年ごろなのか。その娘って。どうりで、(記事をよむ)……身体障害者福祉大会にて、成人障害者が安心して暮らせるようにと、その将来を案ずる保護者家族により、施設や医療センターの設置の必要性が強く述べられた。施設の不足から種々の悲劇が生れていること、一日も早く施設の増設をするよう、国や県への働きかけを決議した。この会に出席していた川内電機社長の川内恒彦氏は……

ひろし 誠一、お前が噂していた、カナリヤ飼ってる娘って、身体障害者なのか？

誠一 ……ああ。

ひろし 物好きだなあ、お前って。

誠一 (カッとなる)物好き、とはなんだ！

ひろし うっかり言ったんだよ、怒るなよ。

誠一 ……うっかりだった。

ひろし だって、お前の話きいてるとよ、二人の間には、どうも……恋の芽生えがある……そう思ったからさ。いくらなんでもよ

選りに選って……

誠一 (真面目に)身体障害者は、恋愛する資格がないっていうの？

ひろし ……お前、真剣なのか。

誠一 真剣だったらどうなんだ。もっと笑うつもりか。

のぼる むきになるな、誠一。……お前が美人だ、美人だって、いうからな。

誠一 うそじゃないぜ、その人は、髪が長くて美人なんだ。

ひろし へえ……

のぼる どこがわるいんだ？

誠一 車椅子にのってるんだよ。

のぼる でも、いいなあ。莫大な寄附ができる身分でさ。われわれ庶民だったら、一家心中するしかないよな。

ひろし お前、その人にあわれみをかけているのか？

誠一 一人にあわれみをかけるほど、ぼくはえらくないよ。

ひろし じゃ、どうして車椅子の人になんか、

誠一 君のその考え方、差別だ、差別に通じてるんだ。なんのためにデモにいくんだ。

ひろし へえ、デモとどういう関係なんだ？

誠一 身体障害者を差別しときながら、君はデモにいつてるんだ。

ひろし よくわかんね。お前のいつてること。

のぼる おれな、誠一。お前がカナリヤ飼ってる娘の話した時、内心じゃ、ブルジョア生活にあこがれている、仕方ない奴だと思ってたよ。でも、その人が身体障害者だときいたら、えらいと思うな。

誠一 なぜ？ なぜそうなら、ぼくがえらいんだ？

のぼる えらいと思うから、えらいというんだ。

誠一 なぜ、そう思うんだよ。

のぼる ……困ったな、……口じゃいえねえや。

誠一 ……ぼくは、何度も、何度も考えたんだ……あの車椅子の人が、なぜ気にかかるのか……もし、好奇心やあわれみや同情だったら……それはあの人を侮辱してことになるんだ……わかんない……ただ、あの人は言った、おとき話だといいいながら、「私をこの域から自由にして下さい！」って……ぼくも言った、「私がかきと救い出してみせます」って。あれはほんた。

誠一 ……あの人は自由になりたがっているんだ、青空の下に、……自由に？……ぼくたちのなんでもない日常の行動力、それがあの人を求める自由なんだ。……どうしたらそれができるんだらう？……あの人の身体は、とても正常にはなるまい……じゃ、どうしたら自由になれるというんだ……ぼくが神さまの力をもっていたら、あの人を治してやるんだが……どうしたらいいと思う？

ひろし どうにもなんねえよ、な。

のぼる ……おれが、お前をえらいというの

は、そのことなんだよ。……そう言ってるお前は真剣に苦しんでる。その人の苦しみを自分の苦しみとして苦しんでる。だからえらいというのさ。

誠一 苦しんでたって、なにもできやしない。

のぼる できなくても、お前、一しよに苦しんでるだらう……それは、人間として尊いことだと思うな。

誠一 そうかな？……

ひろし その人は、いずれ施設ができたら入るんだらう。……つまり、施設に入ること

じゃないのか、自由になるとは。

誠一 施設ができることを何より望んでいる

のぼる ……お前、いずれ施設ができたら入るんだらう。……つまり、施設に入ること

じゃないのか、自由になるとは。

誠一 施設ができることを何より望んでいる

のぼる ……お前、いずれ施設ができたら入るんだらう。……つまり、施設に入ること

じゃないのか、自由になるとは。

誠一 施設ができることを何より望んでいる

のぼる ……お前、いずれ施設ができたら入るんだらう。……つまり、施設に入ること

じゃないのか、自由になるとは。

誠一 施設ができることを何より望んでいる

のぼる ……お前、いずれ施設ができたら入るんだらう。……つまり、施設に入ること

じゃないのか、自由になるとは。

誠一 施設ができることを何より望んでいる

のぼる ……お前、いずれ施設ができたら入るんだらう。……つまり、施設に入ること

じゃないのか、自由になるとは。

誠一 施設ができることを何より望んでいる

のぼる ……お前、いずれ施設ができたら入るんだらう。……つまり、施設に入ること

じゃないのか、自由になるとは。

誠一 施設ができることを何より望んでいる

のぼる ……お前、いずれ施設ができたら入るんだらう。……つまり、施設に入ること

じゃないのか、自由になるとは。

誠一 施設ができることを何より望んでいる

のぼる ……お前、いずれ施設ができたら入るんだらう。……つまり、施設に入ること

じゃないのか、自由になるとは。

誠一 施設ができることを何より望んでいる

のぼる ……お前、いずれ施設ができたら入るんだらう。……つまり、施設に入ること

じゃないのか、自由になるとは。

誠一 施設ができることを何より望んでいる

のぼる ……お前、いずれ施設ができたら入るんだらう。……つまり、施設に入ること

じゃないのか、自由になるとは。

弘子 あなたの手にとどけていただきたいの、真沙ちゃんに。

誠一 ……

弘子 もうじき、あの人は居なくなりますわ……お別れにきてあげて。このカナリヤをもつて。

誠一 ……

弘子 必要なんですわ、それがあの人は。

誠一 どうして、ぼくが？

弘子 ……わかっていたいただきたいの。あの人は、必要なんです。

誠一 ……わかるような気がします。

弘子 明日は、一日中留守になります。私の結婚の仕度で……家には、あの人のひとりきりなの。おねがい……

誠一 ……(鳥籠を受けとり、カナリヤをみる)

真沙子の部屋。鳥籠にはカナリヤ。車椅子で忙しく動く真沙子。元気である。時おり、カナリヤに話しかける。

6

真沙子 ねえ、ナーンーサス、私にだって一人で留守番ぐらいできますよ。……おひるのサンドイッチはサイドテーブルに、好物のピクルスもついています。イチゴのジュースものっています。……そうなの、今日はこの家に私ひとり、それとナーンーサス、あなただけ……なんだか変にみえる？ 髪を切ったんですもの、私。……義兄のかけりつけの床屋さんが、もつたない、もつたないといいながら、ザクザクザク……お世辞をいったわ、美少年のようだって。……いまはもう、だれにも気がねしません……(笑う)バカみたい、私って。……私だって、よく笑える娘だったのよ、ナーンーサス。……いまはもう悲しいことはないわ。悲しさとか口惜しさとかは、私の身体からは抜けていってしまいました。

車椅子の上で目を閉じ……静かに、なかのメロディをハミングする。

窓の向うに誠一があらわれる。

誠一 こんにちは！

真沙子 あら。

誠一 一しよにしておいてくれませんか。

(鳥籠を高くあげる)

真沙子 カナリヤ……

誠一 一羽より二羽の方が淋しいと思っで、これ、鳴かないんです、メスですから、きれいでしょう。

真沙子 ……お気持、うれしいけれど、でも残酷よ。

誠一 え？……

真沙子 ……お入り下さいな。この窓からでもよくつてよ。

誠一 窓から？ 泥釋じゃあるまいし！

真沙子 玄関は鍵がかかっていますの。

誠一 お留守なんですわ。

真沙子 ええ、弘ちゃんの縁談のことで。……義兄も、三時頃までは帰りませんわ。

誠一 あの人、結婚するんですね。

真沙子 そり、ロマンスが実を結びましたの。

誠一 へえ……

真沙子 その生垣、通り越せるでしょう。

誠一 でも……

真沙子 自分、帰ってきませんわ、だれも。……平気よ、私。

誠一 平気って……バカにしないで下さい。

真沙子 バカにするはずないでしょう、私

が。

誠一 いじわるだな。ぼくはもう子供じゃないんですよ。あなたより年下だけれど。

真沙子 怒らないでね……私、どうしたらいいのかしら……

誠一 男の、男のはしくれですからね、ぼくだって。

真沙子 ごめんなさい、自分のことはかり考えていたわ。……じゃ、そのカナリヤを、ここまで持つてきて下さらない。……それなら入れるでしょう。

誠一 ……ええ、それならば。

誠一、鳥籠をもつて窓から入る。

真沙子 おかけなさいな、……どうぞ……すわっていたきたいの、私。

誠一 (しげしげと真沙子をみて)髪を切ったんですわ。

真沙子 おかしく見えますか？

誠一 いえ、新鮮です。とても、いきいきと

真沙子 みんながそういうわ。弘ちゃんなんかため息まじり……まるで美少年のようですって？……わかりますか。少年になっ

たのよ、私。

誠一 ……髪を切ったからですか？

真沙子 ……(微笑してるだけ)

誠一 ……(意味が分らない)

真沙子 あなたが、いつかおっしゃったことおぼえていますわ……私をここから救い出してきてくれる、って。

誠一 ああ、それが、カナリヤの籠なんか下げて。……幻滅だな、こんなナイト。

真沙子 いいえ、きつと救い出しにきてくれたんだ、って……そう思っていますの。

誠一 ……あなたはおとぎ話が好きですね。レヌスのカーテンと、鳥籠と、最新式ステレオのお城に住む王女さまを、救い出したきたのはだれでしょう、新聞屋に下宿している、自分の部屋さえもつけないナイトなんです。

真沙子 ……王女は車椅子にのつてますのよ。ナイトは貧しくとも、たくましい足をもつています。街から街へと、どこへでも歩いてゆける丈夫な足。

誠一 その足で、ナイトは新聞を配ります。

たのよ、私。

誠一 ……髪を切ったからですか？

真沙子 ……(微笑してるだけ)

誠一 ……(意味が分らない)

間。

真沙子 あなたが、いつかおっしゃったことおぼえていますわ……私をここから救い出してきてくれる、って。

誠一 ああ、それが、カナリヤの籠なんか下げて。……幻滅だな、こんなナイト。

真沙子 いいえ、きつと救い出しにきてくれたんだ、って……そう思っていますの。

誠一 ……あなたはおとぎ話が好きですね。レヌスのカーテンと、鳥籠と、最新式ステレオのお城に住む王女さまを、救い出したきたのはだれでしょう、新聞屋に下宿している、自分の部屋さえもつけないナイトなんです。

真沙子 ……王女は車椅子にのつてますのよ。ナイトは貧しくとも、たくましい足をもつています。街から街へと、どこへでも歩いてゆける丈夫な足。

誠一 その足で、ナイトは新聞を配ります。

真沙子 ……王女は車椅子にのつてますのよ。ナイトは貧しくとも、たくましい足をもつています。街から街へと、どこへでも歩いてゆける丈夫な足。

誠一 その足で、ナイトは新聞を配ります。

真沙子 ……王女は車椅子にのつてますのよ。ナイトは貧しくとも、たくましい足をもつています。街から街へと、どこへでも歩いてゆける丈夫な足。

誠一 その足で、ナイトは新聞を配ります。

真沙子 ……王女は車椅子にのつてますのよ。ナイトは貧しくとも、たくましい足をもつています。街から街へと、どこへでも歩いてゆける丈夫な足。

誠一 その足で、ナイトは新聞を配ります。

真沙子 ……王女は車椅子にのつてますのよ。ナイトは貧しくとも、たくましい足をもつています。街から街へと、どこへでも歩いてゆける丈夫な足。

誠一 その足で、ナイトは新聞を配ります。

真沙子 ……王女は車椅子にのつてますのよ。ナイトは貧しくとも、たくましい足をもつています。街から街へと、どこへでも歩いてゆける丈夫な足。

誠一 その足で、ナイトは新聞を配ります。

真沙子 ……王女は車椅子にのつてますのよ。ナイトは貧しくとも、たくましい足をもつています。街から街へと、どこへでも歩いてゆける丈夫な足。

誠一 その足で、ナイトは新聞を配ります。

真沙子 ……王女は車椅子にのつてますのよ。ナイトは貧しくとも、たくましい足をもつています。街から街へと、どこへでも歩いてゆける丈夫な足。

誠一 その足で、ナイトは新聞を配ります。

真沙子 ……王女は車椅子にのつてますのよ。ナイトは貧しくとも、たくましい足をもつています。街から街へと、どこへでも歩いてゆける丈夫な足。

誠一 その足で、ナイトは新聞を配ります。

真沙子 それに、これからの王女には、もうナリーサスはいらなくなりませすの。これから行くところでは、王女はもう孤独ではありませんもの。

誠一 そんなに、孤独だったんですか？この城のなかでは。

真沙子 大事にされればされるほど、孤独になることだってありますよ。

誠一 ……ほくが、おたずねしている、いまこのような時でもですか？

真沙子 ……ええ。

誠一 恥かしいな、……ほくはどうも、少し思い上っていました。

真沙子 あなたのせいではありませんのよ。私の、私の心のせいなんです。私がこの世界で自分を孤独に感じるのには、車椅子にのっているのが、私だけだからですわ。

誠一 ……わかりました。悲しいことですがほくは少し救われました。

真沙子 ……（何もいわずに目に涙）

誠一 ……どうしたんですか？

真沙子 ……私を好きですか？……あわれみでも同情でもなく、好きだといっていただけます？

誠一 好きです、あなたを！

真沙子 ありがとう！……ああ、私でも……私でも……男の人から好きだと……ああ、私……

誠一 でも、ほくは、あなたのために、なにがしてあげられるんだらう？

真沙子 その言葉を大切に、私は行きます。……自信をもって、新しい世界に。そこには、同じような車椅子にのっている私のま

だ見ない仲間がくるのです。……その土地は、上野から急行で二時間、そして駅から

だいぶある不便な土地だそうですが、海が見えるそうです。海が見えるところで暮

るんですわ！……兄は工場建設の予定をかえて、ホームに寄贈しました。それで地元

と若干ごたごたがあったそうなの……でも私はそこで、専門の看護役の人に世話を

されて、何の心配もなく暮せるんです！……つまり、天国へ行くんですわ。

誠一 天国ですか？……

真沙子 だから、カナリヤの思い出はもっていきません。

誠一 うそだ！ 天国だなんて。あなたはあきらめていて、あきらめからそう思っているんです！

真沙子 ……あきらめ。そうね……あきらめ

ね。そのあきらめがあったから、私今日まで生きてきたんです。あきらめがなかったら、……死んでいたわ。

誠一 ほくから見ると、あなたは従順すぎる……と場にひかれる羊みたいに。……いや

ほくは田舎でひかれていく羊をみた、が鳴いていた、悲鳴をあげていた。……あなたは本当はいきたくないんだ！……なぜ、い

やだといわないんです、拒否しないんです！……人間だったらいやなことはいやだとい

うべきです。斗うべきです！

間

真沙子 もっと、おっしやって。そのムチの

ような言葉が必要なのよ、私に。

誠一 ほくは自分にいっててなんです。ほくだって、倒れてしまいうに苦しいことがあ

っても、じっと耐えてしまわんです。……友だちのようにデモにゆくこともなくて。

真沙子 ほんとなのよ、あなたのおっしやること……私、髪の毛を切りました。切り落

した髪を見て、胸がしめつけられましたわ。……なぜ、こうしなければ……それから……私の体のなかのもの、取ってしま

いました！……（ハッと口をつぐむ）

誠一 ああ……なにかも、ぶちこわしてしまいたい！……なにかが間違っているんだ

！けれど、どうにもならない。

真沙子 私を可哀想だなんて、思わないで下さいね。私は、今までは、生きていても、

生きていく意味がわからないで苦しみましたわ。苦しみがらも、結局はなまけてい

ましたわ。なまけ者だったんです、私ってだから、これからは、そのなまけていた罰

をうけにいくなですわ。

窓の外に、恒彦が帰ってくる。

誠一、車椅子の前に立つ。

誠一 立ってないんですか？ ほんとうに。

真沙子 ……奇蹟でもなければ。

誠一 手を貸します。ほくの手につかまって立つんです。

真沙子（手につかまり、必死に立上ろうと努力する）……だめだわ！ 奇蹟なんておきないわね。ああ、あなたを上げなければよかったです。（泣く）

窓の外から恒彦が叫ぶ。

真沙子 いけません！ この人が窓から入ったのは、私には玄関を開けることができなかったからです。義兄さん、この方は、私にカナリヤをとどけて下ったお客様なんです。義兄さんは私のお客様を泥棒猫だとのしりましたね、家宅侵入だから、警察へ電話して逮捕させると、新聞店をクビにしてやると脅しましたね。私のお客様を！

失礼です！ 義兄さん。

恒彦 君、ちょっと、帰らんでくれ給え。玄関を開けてくるから。

恒彦 かけ去る。

誠一 ああ……あなたは王女だ！いまこそ、この城の主です。

真沙子 誠一さん、私のナイト。……私を救い出してくれましたわ。私と場にひかれる羊のようにではなくて、そうだわ！……あの、リヤ王の怒にふれて城を出されるコー

デリヤのように、王女らしく胸をはって、ここから出ていかれるように。

誠一 この城を出て、王女はどこへ行くのです？

真沙子 王女ではなくなるのですわ。私の同

窓の外から恒彦が叫ぶ。

誠一 いえ、この窓から出ます。侵入者は侵入したところから出るのがふさわしいはず

ですからね。

真沙子 王女ではなくなるのですわ。私の同

じ仲間のなかに、仲間との新しい生活ノ  
誠一 王女がいなくなったら、ナイトはなに  
をするんだ？……ナイトはアルバイトの新  
聞配達にもどる。だが……

真沙子 お別れですわ。(手を差し出す)おと  
ぎ話のおしまいを。  
誠一 では、王女さま。

芝居で見おぼえたような、手への接吻  
をする。  
恒彦が入ってくる。

恒彦 なるほど、君はなかなかお芝居が達者  
ですね。私は真沙子の義兄であり、保護者  
である川内恒彦です。ところで、君は真沙  
子のなんですか？

誠一 (面くらう) ぼくは……ぼくは……  
真沙子 ナイトです、私の。

恒彦 ナイト？ ほう、ナイトという  
つまり恋人といつてもいいのですか？

誠一 そうです。  
真沙子 誠一さんノ

誠一 恋人です。ぼくは真沙子さんの。  
恒彦 それは、どうも、たいへん失礼いたし  
ました。君が恋人ならお訊ねしたいのです

が……どうですか？ 真沙子と結婚してい  
ただけますか？

誠一 ……  
恒彦 (大真面目に)もとより、真沙子には多  
少なりとも持参金はつけます。といつても  
当家では施設への大口寄附をしたし、当面  
一人娘の結婚もあることで、充分とは申し  
ませんが……それから、君の就職の方は、  
これは保証いたしますよ。

誠一 ……(あっけにとられる)  
恒彦 どうして、返事をして下さらないん  
ですか？……それとも、恋人だとおっしゃ  
たのは、この場の逃げ口上でしたかな？お  
芝居だったのですか？

真沙子 誠一さん、答える必要ありませんノ  
義兄さんは卑怯よ……私の肉体が結婚でき  
ないものであることを知っているから、私  
をかかえた生活の負担が、個人の経済生活  
を破壊するものであることを知っているか  
ら……それを承知で言っているんだわノ  
あなたが、貧しい生活をしていることを知  
っているから、あわれみの態度をむきだし  
に、侮辱しているんだわノ 誠一さんを、  
それから、私を、侮辱しているんです。

恒彦 お前は、私を……

真沙子 私はだれとも結婚いたしません。私  
は施設に入ります。それが私の意志です  
わ。

恒彦 わかったよ、真沙子。  
真沙子 誠一さん。私たちはいくらがんば  
っても、一しよには暮せないんです。お別  
れしましょう。お帰り下さい。

誠一 ごきげんよう……ぼくはアルバイトを  
……労働をつづけたい。あなたのことは忘  
れません。  
真沙子 さようなら……あ、それから、この  
カナリヤ、二羽とも連れていきます。

誠一 おいとまします。……最後に、おねが  
いがあります。窓から出てゆく失礼を、お  
許し下さい。  
真沙子 どうぞ。

誠一、窓から出る。  
ふり返りもせずに去る。

恒彦 真沙子……お前はおれのことを、そん  
なにひどい人間だと……  
真沙子 (威厳をもって) 兄さんは世の中の  
ためになることをなさったんです。施設へ  
の寄附を……多くの人々がのぞんでいても

まだまだ足りないんですものね。施設はも  
っともっと要りますわ。……親が子供を殺  
さないでもすむように……子供だつて殺さ  
れるのはいやです。……私など、まだめぐ  
まれています、経済的にも、そして、施設  
に入れる、というだけでも……そうです  
わね、義兄さん。

恒彦 わかつてくれるか、真沙子。  
真沙子 私はためらいません。ホームへ入り  
ます、私の意志で。

7

川内家の居間。(数日後)  
恒彦と安子。夜。

安子 静かですね、今夜は……レコードも聞  
こえてこない……

恒彦 うん。……  
安子 ほんとに胸が痛みましたよ。……ホー  
ムにおいて帰ってくる時は……連れ戻し  
たい気持ちをおさえるのに苦しみました。

恒彦 ……うん。  
安子 うん、はっきり。

恒彦 うん。

安子 ……真沙子ちゃんは憎んでいたかしら、  
私たちを。

恒彦 うん。……いや、憎むはずあるまい。  
安子 もっと悲しそうな顔をすると思つてま  
したの。案外でしたわ。ケロリとしている  
んですもの。でも、もし、あれが弘子だつ  
たら、私たちホームへ入れたでしょうか？

恒彦 つまらんことまで、気を病むな。  
安子 レコードをきいてるかしら？今ごろ……  
……きけるんでしょうね。ホームにピアノと  
ステレオがあつたけれど……

恒彦 ぜいたくすぎるって、役人連中はいつ  
てたな、福祉法人なんだから、って。……  
ぜいたく過ぎるか？……真沙子だけ特別扱  
いというわけにもいきまい。

安子 (涙をふく) ひどいこと……  
恒彦 やるだけはやってきたんだノ くよく  
よするな。それでも真沙子は、申込者八百  
人中、選ばれた百五十人の一人なんだ。幸  
運なんだよ、あれだつて。

問。

安子 ……弘子はおせいこと。  
恒彦 ……日取を考えなきゃ。  
安子 そうですね……(間)……不思議です

ね、……とても、とても、真沙子ちゃんにあ  
いたくて……

恒彦 もう……やめろ。……  
長い間がつづづく。  
エピローグ

川内家の戸外。朝。  
早起きの安子、庭の掃除。  
のぼるがかけてくる。新聞を入れる。

安子 あら、配達の人、かわったんですか？  
のぼる やめられちゃったんです、あいつに  
安子 まあ、どうして？  
のぼる さあね……どうやら、恋の傷手とい  
うやつらしいんです。それも、ひでえ失恋  
ですかね。

安子 失恋？……  
のぼる お宅のバラを、よく机にかざってま  
したよ、あいつ。そうだノ そうですよ、  
バラの花に失恋したんだな、あいつ。純真  
なやつだったからなあ。

のぼる 去る。  
安子ひとり。

# 蟬しぐれの中で

(ある山村のある風景)

## 須間 一

きやすと

作次郎

しか (作次郎の妻)

尚子 (作次郎の孫)

友次 (尚子の友たち)

客席暗くなると、蟬の鳴き声が聞こえ出し、幕があく。人影のない舞台に蟬の鳴き声だけが大きく響く。舞台には、もう人が住まなくなつて五年程になる農家がある。壁は破れ、外の光が入りこんでいる。下手より入口があるが、釘づけされている。土間には鎌などが置かれている。そこから上手よりに、板の間と座敷がある。座敷には仏壇やその他の家具が置かれたままになっている。外は夏の太陽がかんかん照りであ

やあつて老夫婦が下手よりあらわれる。二人はわが家の変わりように驚愕している。下手前にある木の切り株に座る。

しか (やれやれといった感じで) 今、何時頃よ、おじいちゃん。

作次郎 二時すぎやな。

しか やつぱり三時間かかったんやの。自動車に乗せてもらはんも、疲れるもんやの。

作次郎 うん……。 (小さな間) お茶ないか?

しか (持ち物の中を見るが) あーあ、先刻飲んでしもたんで、ないわよ。

作次郎 ……。

しか 裏の谷水、もうあかんやろかの。

しか ま、一べん見てくらよ。  
しかは見に行く。作次郎は表戸の釘づけしてあるのをはずす。  
しか (家の裏から) 出るで。  
作次郎 そうか。  
しか 汲んで来らよ。  
しか、水を汲んで戻る。  
しか おじいちゃん。(飲む) あー生き返ったよ。おじいちゃん、やつぱり谷水はうまいのう、冷やかて。  
作次郎 うん、水道の水は、なんや薬くさいし、生ぬるいよつてな。(煙草をふかす)  
しか 谷水はええわ、ほんまにえーわ。(しかは立つて、周辺を見る) ここいらに、人が住んでたと思えん程の変わりようやの、おじいちゃん。五年も経ったらこんなえなるもんかの。  
作次郎 留さんとこはどうなら?  
しか さーよ、……おじいちゃん、あそこの家には柿の木があつとの。  
作次郎 うん、あつた。(といいつつ、見に

行く。)

しか 大きな柿の木やったのに、あれやつたら、こけてしもたんやろかの。

作次郎 朽ちてもたんやろな、留さんとこはわがらとこより、二年程前に出て行つたよつてな。

しか 留さんとこは、町へ出ていってから、もう七年にもなるんやの……。 (小さな間) あれ、栄三さんとこの小屋はこけてもてあらよ。

作次郎 (うなづく)

しか 家半分隠れるぐらい草生えちやいるの

作次郎 何ぞ忘れて来たみたいやな。

しか あの人ら、今どないしてんのやろの。おじいちゃんと栄三さんは一級違いやつたんやろ。

作次郎 そうや。

しか 栄三さんや……。あの上の家の……。

作次郎 勘次か?

しか そうそう、勘次さんとおじいちゃんと三人でよう山仕事、いっしょに行つたんやつとの……。

作次郎 うん。

しか 四圍の方までも行つたんやつとの……何んや、町で生活してたら、そんなこと、

いっこも思い出さんけど、わがとこへ戻つて来たら、戦争前のも思い出されてくらよ。

作次郎 そうやな。

しか そらそうと、留さんは町へ出てから、死んだて云うたんと違うかえ。

作次郎 お!、二年前の冬やつたなあ。

しか おじいちゃんは、よう覚えちやいるの……。(間) 入つてみまひよか。

作次郎 うん、そうするか。

二人は家の中に入る。しかは持って来たほうきで掃除を始める。

しか (奥の間を見ながら) たつた五年でこんななるもんかの。静かやの……。町の自動車の音や、スモッグたら云うもんが、いっばいあるとこに比べたら、なんや知らんけど、ウソみたいやの……。 (間) それにしても、尚子ら遅いの。

作次郎 うん。

しか (仏壇に位牌を入れ、掃除をしながら) 尚子らの行った家ぐらいやろ、今ここに残つてんの。あの人らも、もうすぐ出て行くかいの……。そしたら、この部落も、誰

れもないよになつてしまふの。  
作次郎 そうやな、……尚子が大きくなつてきた云うことは、わしらがあの世へ近づいたいうことやな。わしらもやつぱり、あの奥の山の墓へ入れられて、こんなとこへ放つておかれるんやろかの……。  
しか すぐに返つて来られよかいつて云うて出たんやけどの……。お墓は放つたからかしてしてるし、親からもろうた田んぼは草まみれやし……。おじいちゃん。わがら仏様に親不孝もんやて思われてよかいのう。(この間に、作次郎は掃作りの道具などを敷居の下から引き出す。) ほいでも、あつたらもんやのう。  
作次郎 今さら、そんなこと言うてもしようないやないか! 米作つてもあかん。いろんなことやつてもあかん。食ていけんよになつたんやもん、しようあるか。  
しか こんな山奥やもんのう。バスのないよになつたし、今の時世にあわん土地やもんのう……。三反ぐらいの田んぼで四十枚もあるとこやつてのう。(作次郎は、道具の錆び具合など見ている。) 来しなに見たけどあんなえ、ぎょうさんな田んぼ草生えてしもて……。 (小さな間) ああ地蔵さんの

傍の田んぼ、おじいちゃんとして初めて開墾した田やつの……。今見たら田やなんやわからんよに、なっちゃーるし……。

作次郎 ……  
しか あれ、田んぼにすんのに、長いことかかったのにのう。これもしやーないんやの。

作次郎 そんな愚痴はつかし言うてもしょうないやないか！

しか、黙って仏壇の掃除をする。引き出しから一枚の紙を見つげ出す。

しか おじいちゃん！ これ！ こう！（作次郎は見に行く）この表彰状！ こんなところに入れてあったかして……。作次郎、見るが、黙ってしかの手に戻し元の、位置に座る。……あのときや、そうや、上の春夫が兵隊に行く前にやりかけてあったシイタケ作りを、おじいちゃんが一生懸命引き継いで、こげな表彰状でもろうてよ。ほんまに夜もろくろく寝やんと作ったんやつの……。肝心のシイタケ作り始めた春男は、戦争で死んでしまったのに、おじいちゃんたら、これ止めたら春男に申し訳な

て木を削っている。ややあって、しか戻って来る。

しか（仏壇へ花を置きながら）もう止めとぎよしよ。肩でも凝ったら難儀やで。それに、今更桶ら作って何になるんよ。それ、十年前のことなら桶作っても売れたけど……。

作次郎は持っていた木を土間にたたきつける。

問。

しか 悪いこと言うたよ。こらえてよ。  
若い男女の声が聞こえて来る。作次郎は黙って木を拾う。また、削り始める。尚子と友次が入って来る。

尚子 あー暑かった。

しか 御苦労さん、遅かったの。友次さん、ま、入ってよ。

友次 ありがと。

尚子 運転手さん。遠慮せんと。

しか 友次さんが車で連れて来てくれたんで

いちゆうて、もう意地みたいに……。戦争に負けてからのう。あの頃はそら、下の秋夫がシベリアから二年も帰らんし、おじいちゃんは、それ山仕事や、それ田んぼやそれシイタケや、その上に桶作りや、もうほんまに休む間もなしに稼いだけど……。なんや知らんけど、あの頃は張り合いがあったの……。

作次郎 うむ、張り合いがあった。

しか 秋夫が帰ってきて、乳牛を飼いだした。その乳で尚子も大きくなったんやがのう。わたえも生きもん好きやったよって、可愛いかった。

作次郎 フ、フ、フ、おまえは、牛のことになるとキチガイみたいに、よう世話してやったもんやったが……。フツと言葉を切る。

しか その乳牛もあかんよになって、秋夫は尚子ら連れて町へ働きに行ってしまうし……。

作次郎（うなづく）

しか わが町へ出るって言う時よ、そのおじいちゃんの座ってるあたりに、馬喰が座って、おじいちゃんは、今わたえの座ってるあたり、その傍へ私が座って、乳牛の値つ

ほんまに助かったよ。（尚子に）そいでどやったら？

尚子 とおる君とこは、誰れも居らんなんだわ。

作次郎 誰れも？

尚子 うん、誰れも居てへん。釘づけや。町へ出たんやろ。

友次 もう、大分たってるようでしたよ。

作次郎としか顔を見合わす。尚子は魔法瓶を見つけ、水を飲み、友次に渡す。

しか ほんなら、この村にはもう誰れも居らんやの。

作次郎 となりの山下とこはどうやったら？

尚子 家の形だけが残ってるだけやで……。しか 山下はんは、ちよいちよいうちへ来てくれて、家に帰る間もないって言ってたけど、もう帰って来てもしやーないんやの。まだ、うちの方がましやの。

友次 隣の家は、壁が落ちてるし、中がまる見えでした。

老夫婦はうなづく。

けてもらうた時は、もう……。今でも、眼の前にあるみたいだに覚えてるよ。（問）それが、今はどうかて言うたら、工場の住み込みの守衛にちゆうて、二人で雇われて……。のう。

しかは氣をとり直して、掃除を始める。

問。

しか 尚子と友次さん、トオルとか言う子とこへ行って、ゆっくりさしてもうてるかし、まだ来んの。あの人ら、ここに一軒だけ住んでんねやよって、寂しかろのう。（花瓶を持って水を入れに行く。）

作次郎 下の方へ家建ててるって、言うてたがな。

しか（作次郎の桶作りを見て）あれ、おじいちゃん、何してんのよ。

作次郎 ……。

しか 木削って何するんよ。今頃桶ら作って何になるんよ。

作次郎 ……。

しか あほらしよ、今頃！

しかは、水を入れに行く。作次郎は黙っ

尚子（上がって来て）おばあちゃん、私ら先にお墓へ行って来たで。

しか もう参って来たんか。そいで、どうやったら？

友次は作次郎の手つきに見入っている。

尚子 草まみれでね、気持ち悪かったわ！

しか そうか。尚子、そこいらに水入れるもんないか？お墓へもって行くんやが。

尚子、外に出る。問。

友次 何を作るんですか？

作次郎 桶や。

友次 おじいさんは、桶を作ってたんですか？

作次郎 おう、百姓やらん時はな。

友次 フーン。

感心したように、作次郎の手つきを見ている。しかは、仏像を拜んでいる。尚子は手に桶を持って入って来るが、しばし佇む。

尚子（友次に）おじいちゃんは木、桶作り



の名人やったんやで……。

友次 フーン、それやったら今はなんで……

あー、もう売れやんねやな。

若い二人は作次郎の手を見る。

しか (拝み終って) 尚子、あったか?

尚子 うん、これでええ?

しか おじいちゃん、ほならお墓へ参ってこ  
うか?

作次郎 行こか。

しか なんや行きとないみたいやの。

作次郎 いや、そんなことない!

しか 墓参りしようかちゆうて、こんなとお

いとこまで来たんやさけ……。(尚子に)

おじいちゃんは昔から、あーして仕事しだ

したら何いうても聞いてくれやなんだ人や

けど……。(つぶやくように) その仕事も

出来んよになつたんやもんのう。

作次郎 ほな行こか!

しか 尚子、友次さん、そなたえら、ちょ

っと参って来らよ。留守番してよ。

尚子 おばあちゃん、何よ、留守番って。近

所に誰も住んでないんやで……。

四人、それぞれに笑う。

つこも氣いつこてくれへんだん?

友次 シーツ傷めへんかと思つて氣いつこた

で。大きな尻やさかい。

尚子 うち。そんなえお尻大きい?

友次 大きいで……。それにしても、尚ち

ゃんのおじいちゃんの手つき、うまいもんや

なあ。

尚子 あー、桶作り? 私ら小さい時の事し

か知らんけど……。おじいちゃんは田んぼ

の仕事をない時はネ、朝早よから晩遅まで

あの板の間に座つてネ、一日中桶作つてた

わ。すしおけやら、漬物桶やら、いろんな

の。

友次 桶か。今はもう、桶らて見えんよにな

つてもたなあ。

尚子 ごつごつして不細工やもんね。プラス

チックの方が便利に出来てるし、安いんや

ろ。

間。

友次 静かやなア……。ほいでも妙な氣する

な。昔は人が住んでたのに、今は住む人も

ない山里で、僕らがこうして話しているこ

と?

尚子 別に、昔は昔やもん、時代につい

てゆけんかったら仕様ないやろ? そや

ろ、桶作つても売れんよになる。シイタケ

もあかん。うちシイタケもやつたらしい

んよ。乳牛もあかん。米作るちゆうても、

この辺の土地、米あんまり出来へんけど、

その米もあかん。山から出るより仕様ない

やろ!

友次 いや、僕の言いたいのは……、今の時

代についてゆけんと言ふけど……。

尚子 やっぱり、町の生活の方が便利やも

ん、みんな移つてゆくんやわ。

友次 いや、そうやない。僕の言いたいの

は、よく簡単に過疎っていうけど、昔から

のここで生活してた人たちが、その生活の

場を捨てて出て行つて……。あとに残され

てるもんは、人が住まなくなった家と、耕

やさなくなった田んぼと、使わなくなった

道具と、そんなもんは、昔のまんまこうし

て目の前にあるのに、……妙ななあ?

尚子 何が妙なん? ははア、友ちゃんの

「深刻」が始まつたナ、悪い癖やなあ!

私は、そんなんいやや。(問) それでも

ねえ、友ちゃん、便利なとこへ住むのが、

人間として当りまえと違ふん?

友次 町はたしかに便利や。その代り、事故

や公害がある。あのね尚ちゃん、故郷って

どうゆうもんやと思ふ?

尚子 そら、故郷ってええわ。故郷は遠きに

ありて思ふもの、そして悲しくうたうもの

……緑の山、小川のせせらぎ、蟬の声……

友次 うむ……。

尚子 友ちゃんの故郷はどこ?

友次 紀南、海のそばや。

尚子 海の子と山の子か、フーン。

友次 僕ら小さい時、まあ小学校まではネ、

近くの川や、浅瀬で泳ぎを習うんや。それ

から中学生になつたらね、海へ出てもええ

ってゆう風な決まりみたいなものがあつて

ね。家の手依いの合間を見れば、泳ぎに

行つたもんや。(小さな間) 今は、あの海

も泳げんよになつたもんや。

尚子 フーン、友ちゃん泳げるん。

友次 尚ちゃんカナツチか? その体やつた

ら、そのまま浮くと思ふけどな。

尚子 何よ、体のことと言わんといて。これ

でも瘦せよともて必死やで……。

友次 (問) そんな故郷っていうか、自然っ

ていうか、そんなものがどっかへ行つてし

もてるんやないやろか。尚ちゃんの故郷は

ここやろ。家はあるけど住まんよになつて

るし。

尚子 でも仕方ないわ。この辺の人も、せい

いっばいここにしようと思つて、ガンバッ

たんやろけど出て行かな仕方なかつたんや

ろ。

友次 なあ、尚ちゃん、先刻尚ちゃんが故郷

はええって言うたけど、そんなにええとこ

がこんなになつていても、それでも故郷は

ええとこか?

尚子 ……。

友次 僕とこの親父は漁師やつた。そやけど

今はもう岡に上つた河童や。土方に行つて

るわ。今僕の勤めてるクリーニング屋のお

ばあちゃんらは、もともと町に住んで

る人やけど、やっぱり故郷みたいなもんは

なくなつてもるって言うちャーるもん

ね。

尚子 あの大きな製鉄所のある近くやろ。

友次 うん、あそこで生れて、七十年。そ

ら、そこばっかで暮して来た人やけど、

昔のあの近辺はネ、足でこないにクイタイ

つてしたら蛤がいっぱい取れるよなとこや

つたつて、クリーニング屋のおばあちゃん

らは言うんや。夏になつたら、西瓜にトマ

トにキユウリ、秋になったらサツマイモ、冬は大根っていうように、海の傍からきれいな畑やったらしいんや。それが戦争を境に、銃剣つきで憲兵に威されて、その工場に土地を取られてしまったらしいんや。結局あのおばあちゃんも若い時にあった故郷がなくなってると思ふんや。そやないやろか？

尚子 町の人もなくしてると言うんやね、故郷を。

友次 うん、町の人も、漁師やった僕の親父もな。

尚子 ……。

友次 それから、先刻行った尚ちゃんの友達とこ何んで言うたかなあ？

尚子 トオル君とこ？

友次 あの家も、ぎょうさん田んぼ持ってたんやろ。

尚子 トオル君は何があつても百姓やるんやうて言うてたのになあ。知らん間にどつかへ行ってしまったなあ。

友次 ……。

尚子 友ちゃんは、百姓でなんで食べていけんよになったかを考えてるんやろ？

友次 まあ、そやや。

老夫婦あらわれる。

尚子 お墓草まみれやったやろ。

作次郎 うん。

しか あーあ、これで気がすんだ。五年も尚子のおじさんの墓放つたらかしにしてあつたん、あんばえ掃除も出来たし。のう、おじいちゃん。

作次郎 うん。おい尚子、そこいらにスコッ

プあつたはずやが、探して来てくれんか。

尚子 何するんよ。

作次郎 うん？ これを植えるんや。

尚子 どこへ？

作次郎 その辺や。

尚子 フーン。(意味のつかめないまま、友次とさがしに行く。)

汗をふく老夫婦。ふき終るとしかは道具を片づけ始める。作次郎は煙草をふかす。

しか おじいちゃん、これどないすらえ？

作次郎 それか……、おいとく。

しか 道具持って行つたら閑潰しになるんちがうかえ。

尚子 そやけど、そんな事考えて何になるん

？ 私は通信制高校へいま行ってるけど、

早いこと卒業して正看めざすんや。なんや

かや言うても正看にならなあかん。一人前

に扱ってもらえやんもん。そやから、今の

病院でなんとかがガンバって高校だけは卒業

して、その上で正看になるんや。

友次 勉強して資格をとる。それは、それな

りに値打ちのあることや。

尚子 それこそが大切なんちがうん？ そ

れはそれなりって。

友次 むろん資格もとらなあかん。僕の言う

のは、人間それだけが生きがいやろかと言

うことや。尚ちゃんかて、故郷がええ、都

会のゴミゴミした生活やなしに、もつとき

れいな空気、緑のある生活に、やっぱりあ

こがれるんやないやろか？

尚子 (少しつつけんどんに) そやかて、そ

んなとこへ住んでたら生きてゆけんやない

の。勉強も出来んし、不便やし、それで皆

町の方へ行くんやわ。友ちゃんかて、そや

よって出て行つたんやろ！

友次 うむ、そやや。

尚子 そんなら、それ以外に仕様があつたん

？

友次 (小さな間) うん、なかった。そんな

かつたんや。僕にとつて故郷は、僕が出て

来た時、なくなつてしまつたんや。故郷っ

ていうのは、いつかは帰る懐かしいとこや

つしよな。ほいでも僕らには、いや尚ちゃ

んやうて、おじいちゃんやうて故郷っての

は、なくなつてしまつたんや。消えてしも

うたんや。スモッグと騒音の中で帰るとこ

もなく、そこ以外に生きてゆくとこもない

ギリギリのとこへ溝鼠みたいに追いこまれ

てしまつたんや。(間)……妙やなあ、こ

のきれいな空気、この新鮮な緑、ここは尚

ちゃんにとつて何んや？ 故郷やろか？

そう感じるか？

尚子 友ちゃんの言うこと聞いていたら、う

ちまで妙になつて来たわ。(振り切るよう

に)とにかく、うちは過去のことは考えな

いことにしてるんや。うちにとつては今日

があるだけ、そして明日と！

友次 明日がある？

尚子 へ明日がある、明日がある……。ある

と思わにや！

友次 (苦笑する。小さな間) 帰つて来たよ

うやな、おじいちゃんら。

尚子 (見つけて) おじいちゃん！

作次郎 あんな守衛室の狭いところで何が出来

らよ。やっぱり、置いとく。かたづけとい

てくれ。

尚子 (入つて来て) おじいちゃん、あつた

で。

作次郎 よし。

尚子 おじいちゃん、そんなん植えて何にな

るんよ。

作次郎は答えず外に出る。それについて

友次も出る。二人で外で植え始める。

尚子 おばあちゃん！ あんな木植えて何す

るん。もう来ることもないんやろ。

しか 尚子。おじいちゃんとおばあちゃん

は、六十年以上もここに住んだんや。町の

家は狭いよつて、仏壇も持って行けんよな

とこへ住んでる。おじいちゃんはこの家で

生れ、ここで大きくなったんや。ほんまにな

あ、おばあちゃんらにとつては、ここで一

生送りたいんやで、ほんまやで、何があ

んなゴミゴミしたとこで住みたいことがある

もんか。

尚子 そんなもんかなあ。

しか なあ尚子。おじいちゃんとおばあちゃん

んは今何してる？ 工場の夜警や。ふくろ

うみたいなもんや。せーののない仕事やで……

……おじいちゃんはな、せめて自分がここ

に住んでたことを残しときたいんやろ。こ

の家は、いつかは潰れるしな。(小さな間

)戻つて来たいと思つてる。何を置いても

ここで暮したいんや。そやから、おじい

ちゃん……。

尚子は、うなづく。そして奥の部屋に入

る。しかは表を見に行く。

しか 友次さん、大丈夫かえ。町の子がスコ

ップ持ったりして。

友次 大丈夫です。これは何年ぐらいた

ら、大きなんですか？

作次郎 まあ、二十年ぐらいやなあ。

友次 (うなづく)

しか 水汲んで来まひよか？

作次郎 うん。

友次 僕が汲んで来ます。(去る)

しか すまんのう。(小さな間) 気のかえら

し子やの、友次さんて。

作次郎 ポーイ・フレンドとか言うたな、尚

子の。

しか ……あの子らが一人前になる頃に、この木が大きなんやの。あの子ぐらいの時、にうちの春夫は戦死したんやの……あつたらもんによ。(小さな間)……おじいちゃん、またこの木見に来まひよらえ。のう。

作次郎 うむ……。

友次、水を汲んで戻る。

しか 御苦労さん、友次さん。この辺へかけちゃってよ。……おおきによ。

尚子、木のはし切れを持って出て来る。

尚子 もう、植え終った？これ、立ててもええ。

友次 (読んで) 昭和四十六年夏、谷村作次郎、しか、これを植える。

しか 尚子、お前これ書いたんか？

尚子 うん、上手いやろ。

しか 墨らようあつたんやな。

尚子 ほこりまみれになってあつたけど使えたで……。

しか おおきによ。おじいちゃん、これどや

ええわな。

作次郎 うん、そやな。

しか 友次さん、すまんけどその傍へ立てちゃってよ。

友次 はい。

尚子 私がする。(三人見まもるうちに立て終る。)

作次郎 さ、行くか。

尚子 そうや、暗なったら難儀や、友ちゃん道慣れてないもん。

作次郎、しか家の中に入る。

友次 尚ちゃん、ようやったな！

尚子 フン！

しか さ、も一度仏さん拜も！(拜み終つて)のう、おじいちゃん、今度来る時は二日でも三日でも泊れるよにしまひよらえの。

作次郎 そうやな。(間)今度来る時はいつになるかの。

しかは表彰状を手持って、突然感極まつたように。

しか おじいちゃん！帰らんときまひよ！

わがらの家はここや！

作次郎 しか！

尚子、友次入って来る。

しか おかいさんすすつてもええ、あんなとこへはもう帰りとうないよ！春夫の墓があんなことになってるし、わたえがああ墓みぢやらな！

作次郎 ……。

尚子 おばあちゃん！何子供みたいなこと言うてんの、こんなとこへ住めるわけないわして！

友次 尚ちゃん！

尚子 ほいでもよう！

友次 おばあちゃんの気も汲んであげやなあかん。来てん！

尚子を外に連れ出す。

しか (熱心に)おじいちゃん！のう、こはわがらの家や。あんな守衛室はわがらとこと違う！この表彰状もろうた時みたに二人で汗流して働いたら、何んとでも

なるはずや。おじいちゃん、わがら残りまひよらえ。(泣く)

作次郎 ……。  
しか おじいちゃんは桶を作る、わたえは畑仕事でもなんでもする。二人食べるぐらいは……、出来るはずやよ。な、おじいちゃん！

作次郎 何をぬかしてんのや、しか！ここには死んだ時に骨埋める墓以外にもうわがらの住むとこはないんや。あほんだらめや！しか……。(やさしく)その話はどうこの家を出る時にしたはずやないか。わしが、病氣患うてから、そんな話は何度もして、町へ出たんやないか。(間、蟬が一段と強く鳴く。外に出た若い二人も戻って来て見ている前で)さあ、行こら。

尚子 おばあちゃん、な、帰ろ。

友次 おばあさん、いつでも言うて下さい。

休みの時やったら、いつでもこんなとこぐらいは乗せてくらよ。

尚子 そや、そうしてもらお。

しか、握りつぶした表彰状を丁寧にまき直し、立ち上がる。荷物を適当に持つ。作次郎、戸締りをする。友次はそれを手

伝うが、それが終ると、若い二人は老夫婦を置いて去る。

しか ほんまに、次に来る時には、米だけでも持って来まひよらえのう……おじいちゃん。

作次郎 (うなづくのみ)

作次郎は植えた木を見る。しかは仏壇の方を見、拜む。やああって二人は去る。また一段とはげしい蟬時雨のなかで。

—幕—

☆学習テキストとして好評です

### 大橋喜一 リアリズムに ついてのノート

—西リ演劇作学校講演要旨—

残部僅少

内容

- (一)「テーマの精練」ということ
- (二)作劇は観客の意識との闘いである
- (三)勉強は比重正しく
- (四)リアリズムについてのノート
- 久保菜とマルクス・エンゲルスの芸術論 唯物弁証法的創造方法から社会主義リアリズムへ アイデアリズムとリアリズム 社会主義リアリズムに就て テーマと形象「典型的な境遇における典型的性格」の問題 久保菜のリアリズムをどう高めてゆくか

発行 西リ演劇作学校 運営委員会

・頒価 二〇〇円(送料五五円)

・申込 前金で左記へ  
広島市八丁堀二一四三 広島地裁内

全司法労組書記局 沖 信子

歌舞劇

茨木童子考

かたおかしろう

登場人物

茨木童子  
その両親  
長者  
里人ら大勢  
長者の下人ら  
あの娘  
公卿・女官ら  
流浪の群  
検非違使ら  
山城の女  
影たち  
丹波の百姓たち  
猿・兎・小鳥ら

深い洞にひびくような、絃の音。  
木枯しの吹き通るような、管の音。  
岩がくだけ散るような、打の音。  
低く、野太い、男声の詠唱が語るように。

摂津の北は、竜の背か  
尾根のまなかに そびえ立つは  
竜王山  
鱗のすそにも ひろがる里  
茨木  
茨木

重い銅鑼の音がひびき、舞台溶明。  
まっ赤な炎のように、ざらつく色。  
構成舞台の上部に、棒をもつ下人らが  
シルネットで浮かび、舞台いっぱい  
地を這うように男女の農夫たち。

鞭の音、鋭く。  
苦しい労働の群舞がはじまる。  
合唱の間に、冷い男の声がエコーでひびく。

うちこむ歎の  
この重さ  
けんど やすみはできぬ  
わしら 地べた虫！

煮えたつ泥田の  
この熱さ  
けんど 腰はのばせぬ  
わしら 地べた虫！

西日に痛い  
このせなか  
けんど 仕事はつづく  
わしら 地べた虫！  
(声) 都へ 力を 力を！

道のちぐさにも

米がなる  
けんど 百姓は食えぬ  
わしら 地べた虫！

舞台の色が夜のように変化し、合唱の  
中を這うように、左右に農夫たちわか  
れる。中央奥の一空間に、中年の夫婦  
の農夫がうずくまって見える。

突然、きびしい鞭のひと打ちの音。  
構成舞台の中央上部に、豪華な衣をつ  
けた長者が浮かぶ。顔は冷い表情の  
面。その横に、長者に手をひかれた娘  
貧しい身なりだが、色白でかわいい。

農夫数人 見ろ！  
農夫数人 あの子は わしの……  
農夫数人 あの子は 百姓の娘！！  
上手農夫群 白い米の身がわりに！  
下手農夫群 白い肌が売られた！  
全員 長者さまに！！

長者が娘をひき寄せ、片腕で抱きかか

え、娘あらがうが、長者の鞭のひと打  
ちで抱きすくめられる。  
上手下手、中央、農夫たちは頭をかか  
えて視線をそらす。  
長者と娘の姿、溶暗。  
入れかわりに中央の夫婦に照明。

男 いっそ、この里を逃げ出して……  
女 (首をふり) 逃がられるものか！  
長者の鞭の音、いっそう鋭く。  
「ああっ！」二人はおびえて、身を寄  
せるが、やがておそろしさをかき消し  
たい思いで抱きあう。

男 いや、逃げはせぬ。  
女 え？  
男 ……ややが……ややがでできるのじゃ。  
女 ややが……  
男は女の肩を抱き寄せる。  
上手の農夫群が歌う。

ややを産むなよ！  
男を産めば

はいずりまわる 地べたの虫よ！  
下手の農夫群が歌う。  
ややを産むなよ！  
女子を産めば  
かわいけりやこそ なくさみものよ！

女 産みます。たとえ、この世が地獄であ  
ろうと、生命は……生命は、天の授かりも  
の。  
男 うむ。

上手、下手の農夫群が、天を仰ぐよう  
に、あるいは、うなづくように、歌  
う。

ああ……  
ああ……  
ああ……  
おう……

その合唱にだぶるように、夫婦は立ち  
あがり、肩を寄せあい歌う。

たえ この世が 地獄でも  
生まれる童しにゃ 罪はない

地べた虫でも 人の子よ  
生まれる童しにゃ 罪はない  
罪はない!

舞台溶暗。しばらくの間。

やがて一変、舞台明るく。  
力強い赤ん坊の泣き声がし、太鼓の連  
打と共に、男と女たちが、ころがるよ  
うに四散して腰をぬかす。

凛々しい面がまえの、巨大な赤ん坊が  
構成舞台の上にとび出し、太鼓の音と  
共に、四肢を踏むように踊る。人々は  
その度に跳びあがる。

でんでらでんと 生まれ出た  
でんでらでんかい 童しっ子

ソレ でんでらでん でんでらでん

でんでらでんと 四股を踏み

でんでらでんと 踊り出す

ソレ でんでらでん でんでらでん

舞台の上段で、ポーズがきまって溶暗  
するが、でんでらのリズムは続いでい  
る。

2

暗転の中をリズムが続く。

でんでらでんと とどめなく

でんでら 童しは 育ちゆく

ソレ でんでらでん でんでらでん

でんでらでんと 十日たち

でんでら 凛々しい 若者よ

ソレ でんでらでん でんでらでん

舞台に照明。

先の赤ん坊の位置に同じポーズの若者  
夜明けの太陽の光を浴びて、凛々しく  
美しい。

童子は朗々と歌う。

で——ん!

で——ら!

で——ん!

霧は晴れたぞ  
東を見やれ

今朝も

天光山からエー 日が昇る

歌は

竜王山にもエー とどかせる

童子の歌にひき寄せられるように、里  
に娘たちが集まってくる。ほれほれと  
うっとりとして聴きほれ、やがて一緒に歌  
う。

いつのまにか、先の長者にかこわれた  
娘(以下あの娘と呼ぶ)が登場し、し  
よんぼりと立つ。

娘たちは童子に耳うちして、あの娘の  
事情を教えるマイム。

童子が歌う。

童子 お前も、うたおう!

さあ、おいで! お前も百姓の娘!

あの娘 わたしでも うたえるの!

童子、やさしくあの娘をさそう。あの  
娘は嬉しさいっぱいで歌う。前出の

歌。

娘たち 童子、もっと、もっと、歌をきかせ  
ておくれ!

童子 ようし! 歌はこうして歌うものよ!

おーれ!

童子は鎌をふりあげる。それに見習っ  
て、娘たちも鎌をふりあげる。

「耕す」踊り。童子の動作は一段と見  
事。まるで鍛えた武術のようだ。娘た  
ちは、それに学びつつ踊る。

でんでらでん でんでん でらでら  
でんでらでん

でんでら 鎌をうちこもう

黒い荒土 ほりかえし

やわらかな土に 豊かな土

汗がしみこむ 百姓の土!

童子の歌にうなずきながら、娘たちの  
労働は喜びに満ちてゆく。

あの娘も、その楽しさにひきこまれて  
童子と並んで、鎌をふるい出す。

でんでら 俵につめこもう

この白い米や だれの米

都の米か 長者のか

育ての親は おいら百姓!

踊りおさめて、みんな俵をもちあげる  
みんなは米一俵なのに、童子の背には  
数俵のついている。

娘たちの驚嘆。童子は歌いながら、そ  
の米俵を娘たちに配る。喜ぶ娘たち。  
俵にもたれたり、座ったり、それぞれ  
のポーズで車座になる。

中央に童子とあの娘。娘の一人が、あ  
の娘に櫛の一枚をおくる。

娘の一人 いつもの年の二倍もとれたぞ!

娘の一人 今年は白い飯が食べられよう!

娘の一人 米の飯が!

あの娘 わし、なつかしい鎌をにぎれた。

娘の一人 (身ぶりをして) 苗も植えたぞ!

娘の一人 (身ぶりをして) 稲穂も刈った  
ぞ!

あの娘 童子のおかげで……

娘たちのはちぎれるような笑い。

突然、烈しい音楽が湧きおこり、上段に長者と下人が登場。  
長者の鞭がふりおろされ、長者と下人が歌う

この土は 長者の土！  
この水も 長者の水！  
汗を流し！  
米をつくり！  
米をおさめる！  
これが  
百姓の運め！

童子、すつくと立ち、歌う

土を借りた分は 長者どんにわたそうだが！  
ふきでる汗の分は おいらの米！  
(あの娘とデュエットで)  
ふきでる汗の分は おいらの米！  
(娘たちと合唱)  
ふきでる汗の分は 百姓の米！  
農夫たちが、上手下手に登場して歌

道のち草にも  
米がなる  
けんど 百姓は食えぬ  
わしら 地べた虫

長者の鞭が、再び打ちおろされる。  
下人ら襲いかかり、今まで童子の横にいた、あの娘が、ひきはなされる。  
必死に、ひきはなされまいとする娘。  
手をのばして、ひきもどそうとする童子。ついに、あの娘は消える。楓の一枝がのこる。  
抗議をしようとする童子に鞭がふりあげられ、長者は里人たちに米俵の運び出しを命じる。  
二俵ずつ積んであるうちの、一俵だけを運ぶ里人。もう一俵を抱きしめる娘たち。しかし、きびしい鞭の音は、それを許さず、ついに娘たちも俵をかつぐ。童子は、そうさせまいとするが、娘たちは悲しげに首を横にふり退場。楓の一枝をひろった童子だけが残る。  
やがて、長者も下人も消える。

童子は茫然とたたずむ。  
童子の心には、強い衝撃があった。  
木枯しの吹き通るような管の音。  
それを破るような快い笛の音。  
あの娘が、かけもどってきた！  
一瞬、強く見つめあう二人。やがて、かたく抱きあう。

あの娘 童子！ わしをはなさないで！  
童子 うむ!!

舞台中央に、長者の姿うかび、二人をじっと見おろす。  
童子と、あの娘はデュエットで、きびしく歌う。

(童子) はなすものか  
土と汗で結ばれた二人の心を  
(あの娘) 「童子！」  
(童子) おまえは わしの心！  
(あの娘) 「童子！」  
(童子) はなすものか！  
(二人) 土と汗で結ばれた 二人の心  
二人のきずなを！

長者が合図をすると、数人の下人が棒をもって登場。童子と娘に襲いかかる。立ちまわり。

やがて、あの娘は童子から、ひきさられ、長者の手に握られる。  
下人たちの棒が組みあわされ、牢のようになり、そこに童子は組みしかれる  
長者に抱えこまれ、悲痛にもがくあの娘の姿。  
溶暗。

上手の農夫群が歌う。

百姓は  
長者に手むかえできぬもの  
これが この世の掟！

童子の母 あの娘が、あの娘が!! (膝を屈して泣く)

童子 あの娘が!? あの娘がどうしたというのじゃ! 言うてくれ! 教えてくれ!!

下手の農夫群が歌う。

百姓が  
小さな愛をもやしても  
鞭でうたれて死ぬるだけ!

童子 なにっ!? なんだとう!!

農夫群、悲しそうに背をむける。

童子の父 (楓の一枝をもち、よろけ出て)

童子……あの娘は……池に……身を……  
(絶句して頭を抱える)

きびしい音。ホリゾンントに池の水の輪のような光。

童子 (楓の一枝をにぎりしめ) 池に!……  
あの娘が……し、死んだ……  
(大地をつかみ、うちふるえていたが)  
だれも、だれも、助けてはくれなかったのかあ!!

里人たち、背をむけて沈黙。

童子 みんな……なぜ黙っている……あんなに一緒に、楽しく働いたのに……みんな見殺しにしたのか!!

里人たちは、膝を屈する。  
一人の男がすすみ出る。

男 (童子の腕をつかみ) わざと見殺したのではない……わしらには、力がないのよ、力が。な……いつかは!!

童子 (腕をはらい) そんな……そんな!!  
……これが百姓か……これが人の世か……  
これが、人の、世かっ!!

童子 (身をのり出して) なにがあつたのじや!  
なにを見たのじや!

童子は必死に耐えているが、ついに舞台奥にかけのぼる。

里人ら 童子……忍べ！

百姓は、忍ぶものよ！

童子の父 童子！どこへ行く！！

忍んでくれい！！

童子 (怒りを爆発させて) いやだあ！！

やだあっ！！

童子の声がエコーで、ひびく中を、里人らをふりきるように、童子は去る。

里人ら、悲痛に見送る。

音楽。溶暗。

3

銅鑼の音。

舞台の一部に、群像の上半身が浮かびあがる。男は公卿、女は女官たち。みんな青白い面をつけ、不気味で、淫蕩な雰囲気がある。

電頭の舟が、ゆらゆらと揺れ、群像も男女いりみだれて揺れる。

男と女の詠唱が流れる。

舞台の別の部分に、ぼろをまとった流浪の群像が浮かぶ。苦しみにあえぎ、瀕死の表情。

この群像からも、言葉にならない、うめきの合唱が湧く。それが貴人たちの詠唱にだぶってゆく。

この世をば

この世をば

わが世とぞ思う 望月の

わが世とぞ思う 望月の

かけたることも なしと思えば

かけたることも なしと思えば

その雰囲気を超えるように、はじめはかすかに、やがて津波の押し寄せるような音。

貴人たちの群像に、うろたえがあらわれる。舞台奥の遠景に、点々と炎があらがる。

群像がそれらの炎におびえながらも、にらみつける。

炎のあたりに、竹槍や鎌をもった農夫の姿。

貴人の群の中心の一人が、手をふりあげて、何かを命じるふり。鞭の音。

舞台袖から、検非違使装束の教人あらわれ、剣を抜きはなち、ふりまわし、斬殺の舞踊。

津波の音。いっそう高まるうちに、異様な悲鳴が次々と起こり、農夫たちの姿がうち倒れ、流浪の群像もうち倒れてゆく。炎が消えてゆく。

津波の音。耳をつんざくように大きくなり、一瞬ぶつんと消える。

詠唱が冷たくひびく中で溶暗。

この世をば

わが世とぞ思う 望月の  
かけたることも なしと思えば

4

銅鑼の音。

舞台。急速に明るくなる。

深山。杉木立。舞台奥の高みのむこうは、崖淵の感じ。遠くに連山。

童子がいる。

しかし、姿はかわり果て、たくましさは増しているが、剛毛の髪、ひげ面が顔をおおう。

野鳥の声。遠くにカッコウの声。

風が強く吹きぬける音。

童子が歌うが、さびしげである。

風よ そよ吹けよーえ

ふる傷がいたむ

なぜに 捨てた里をえー

思い出す

童子は木の実をとり、噛みしめて、べつと種を吐き出す。やりきれない淋しさ。

小鳥のさえずり、野猿の声などして、杉木立の間から、小鳥や野兎や山猿等が顔をのぞかせる。

それらの声に、音楽が、かぶさり、鳥や獣たちの合唱になる。

茨木童子！

茨木童子！

いつまで

いつまで

昔を想う

昔を想う

わしと遊ば！

おいらと遊ば！

梢をわたる風に踊ろ！

木の間をもれる光に歌お！

心の傷の

かさぶたとって

深い緑に

とけて 歌お！

音楽とO・Lして、森の鳥たちの声が美しくひびく。浮世はなれた楽園の雰囲気。童子は、のびやかに見廻す。

童子 そうよなあ！ もうあれから二十年。人の世の空しさを知ったこのわしが、何を

今さらのう。そうよ！ わしは、里人でも百姓でもない！

童子は歌い、踊る。

でーん でん でん

でん でん 風が吹くではないか

杉も松も 梢をならす

恐んでなるか 情でなるか

心はなれて 風まかせ

でん でん 空が見えるでないか

そそぐ光は だれのもの

小鳥のものよ 獣のものよ

育つ生きもの みんなのもの

でん でん でん

突然に小鳥や獣たちが踊りや囃子を止める。何かの気配を感じた様子。

遠くから地を這うような、うめき声の群が近づく。時おり、人の悲鳴が混っている。

童子は腰にかけより、小手をかざして見る。

童子 おう！ あれは！！

童子はある情景を見たのだ。すぐにでも駆けおきてゆきたい衝動にかられるが、行つてはならぬと心の格闘。

童子 声をかけてはならぬ！ 人の世と縁切りしたはず！

ついに思いをためて、舞台片隅の杉の根方にもどり、座りこみ、心を静める。猿が寄り添う。

うめき声の群がいつそう近づく。一人の女がかけこんでくる。疲れはてた百姓婆だが見え。

女は童子の姿を見て、一瞬おびえて立ちすくむが、童子の様子に安心して、坐りこみ声をかける。

女 おたのみじゃ！ かくもうてくだされ！  
童子 …………… (一瞬の動揺)

女 かくしはせぬ！ われらは山城の百姓、一揆に敗れ、検非違使に追われている。情あらば、一夜のかくれ家を！

童子 …………… (顔をそむける)  
女 そのお人！ きこえてござるのか！

……おん身が、公卿、侍でなければ、わかってくれよう！ 飢えにせまられ、病におかされ、ぎりぎり、必死の一揆だったのじゃ！

童子 …………… (思いつめている)  
女 わかつて下され！ 助けて下され！

童子 一揆で……都に勝てると思つたか！  
女 ええ！

童子 おろかなことよ。百姓に、何が、できる……  
女 なんと！

童子 必死の、一揆というたな……  
女 そ、そうじゃとも！！

童子 (無理に冷たく) 必死の覚悟なら……死ねばよからう。  
女 ええっ！

童子 人は、ありのままに生き、ありのままに死ぬもの……お主の生き死には、わしには関わりのないこと……  
女 な、なんと!? ……それが……人の……

童子 わしは人の世を捨てた、ただのもの！ (悲痛な思いをかくせず) なんにも見はせぬ。なんにもききはせぬ！ (くるりと背中

をむけて、坐り静まる)  
女 えっ？

童子 たった一人の女の愛も、女の生命も、すくいられぬが、百姓の運命よ！ (悲痛になり、涙をこらえているのが、背中を見せながらも、わかる)

行つてくれい！ どこぞへ、早う、行つてくれい！！

女 (じつと童子を見つめていたが、よろよろと立ちあがり) 冷たい……冷たい……冷たいお人よ…… (後ずさりして) いや、人ではない…… (童子の背中を指さし) お、お…… (鬼といいかける)

童子 ……!! (たえる)

女が「鬼」と言いかけた時、検非違使の下人らしき男、抜刀して登場。

男 (女に気付き) うっ！  
女 あ！

二人、無言のまま対峙。やがて、追うもの、逃げるもの、無言のままの格闘。ついに、女の帯に男の手がのび、ひきちぎられる。思はず衣の身をかく

そうとする女の隙に、男の腕がのび、刃をつきつけたまま、木立の中へ、女をひきずりこむ。  
しばらくの間。  
犯される女の悲鳴！

童子、耳をおおつてうつぶせる。野鳥の声。  
しばらくの間の後、女がよろめく足どりで出てくる。

女 (崖淵まで放心したように歩み寄り、きつと童子をにらみすえ) お主……わしは……ありのままに、死ぬのではないぞ。  
お主に……お主に、殺されたのじゃ！ (崖に身を投げる)

童子 あっ！ (見つめる)

やがて、きこえていたうめき声の群にどよめきが起こる。  
斬られる叫び声。悲鳴。そして静まる。童子は、それに耐えきれずに立ちあがる。

童子 わしは知らぬ！ 知らぬぞ！！

童子はうすくまり、やがて大の字に寝る。鴉の声が崖のむこうです。死体にむらがる鴉の群のイメージ。その声のひろがりの中で暗転。

童子の夢をあらわす照明。紫のイメージ。  
童子のまわりを棒をもった鴉天狗のような影たちがとりまく。

鴉の声、すさまじく、鼓の連打。  
童子、たたき起こされ、棒をもってかまえる。

以下、影と童子の棒術の立ち合い。丁々発止と打ち合い、切り結び、対峙し組みしかれ、とびはなれ……  
その中で、問答が、かわされる。

影たち (かまえて) 童子、見参！  
影たち (うちかかり) 迷うているな、童子……  
影たち (うちかかり) 何に苦しむ、童子！  
童子 (うけとめながら) 迷いはせぬ！ 苦しんではおらぬ！

影の一人 (組みすえて) いうな！ さらば問わん。おのれ、自ら人里を捨て、深く山

に籠るにいたるは、そまなにゆえか、この義いかに！ (とびはなれる)

童子 (かまえて) されば…… (じりじりとかまえつつ) わが里にて、一つ成すこと、二つ成すこと、すべて人を思うてのあまりなるに、すべて裏切り、裏目！ これ、あさましき、百姓、人の世の、無力！

そ、わが身を人の世に遠ざけるが人の道と……  
影たち (いっせいに棒で大地をつき) 人の道!? 笑止千万！

影の一人 (はげしくうちかかり) 人の世を捨て、人の道を説くはいかに！  
影の一人 (はげしくうちかかり) 人の世に背をむけるは、これ、逃げの道！

影の一人 (はげしくうちかかり) 散乱の心を、人の世の無力にすりかえるは、卑怯！  
童子 (打ちほらいながら) 逃げてはおらぬ！ すりかえてはおらぬ！  
影の一人 (うちかかり、肩をうちおさえ) さらば、問わん！ おのれ、まことに人の世から遠くたったか！ いやさらに問わんおのれ一人山に籠りて、そまなに成したるや！ この義いかに！

童子 (はげしくうちかかり) 知らぬ！ 知



らぬ!……わしは、わしはただ、人に関わらず、なんの害もなまず、ただ立ちつくすのみ!

影たち 害もなまず!?

影たち 立ちつくす!?

童子 (虚勢をはって) おう、立ちつくす!

影たち よし! 立ちつくせよ!

影たちはいつせいに童子にうちかかる。童子は打たれながら耐える。ついに膝を屈するが、無抵抗で忍ぶ。影は童子のまわりを、とび舞いながら。

影の一人 おのれは耐えた!

影の一人 おのれは忍んだ!

影たち だが、おのれの我をはっただけよ!

童子 なにっ!?

影の一人 立ちつくすのみなら……

影の一人 おのれだけの痛みに耐えるのみなら……

影たち 痛みは、気高い誇りとなろうよ!

だが!

影の一人 人の不幸をよそに、おのれが立ちつくし……

影の一人 眼をふさぎ……

影の一人 耳をおおい……

影の一人 口を閉じて……

影たち それで人が死のうとも、誇りか、童子!

童子 なにいっ!

女の声 ……ありのまま死ぬのでないぞ……

お主に……お主に殺されたのじゃ……

地の底からきこえる悲鳴。

影たち、再び飛鳥のように舞いながら童子にせまる。

影の一人 童子、見たか!

影の一人 童子、聞いたか!

影たち 童子、おのれは!

影の一人 情けを乞うた女を殺した!

影の一人 一揆に立った百姓を見捨てた!

影の一人 百姓を無力とあなどるは……

影の一人 おのれ自身!

影たち 無力なるはおのれのこと!

影たちは棒を童子にさしむける。

童子 わしが無力!

影の一人 思いあがるな、童子!

影の一人 百姓はまこと弱いか!

影の一人 百姓はまこと愚かか!

影の一人 百姓は弱きを知り、愚かさを知る影たち 時きたらば……

影の一人 百の百姓!

影の一人 千の百姓!

影たち 万の百姓!

百姓のどよめきが、遠くから津波のようひろがる。童子はおびえて小さくなる。

影たち 思いあがるな童子

思いあがるな童子

鴉の声とO・Lして溶明。

鼓の音。情景はもとに戻る。童子はうなされてる。

影たちのいた位置に、まるで入れかわったように、蓑笠装いの百姓たちがいる。

童子が目さします。

童子 あ!

童子 ……!!(心打たれる)

急速に暗転。

5

1のオープニングと同じような音楽。溶明。

スモッグがただよう茨木の里。構成舞台の所々に鏡がぶらさがり、それが家々を象徴する。その家々の前に蓑をつけた里人たちが、きびしい表情で立っている。舞台奥の一段には、法螺をもった若者が遠くを見張っている。

中央下の鏡の前に童子の父親、母親がすっかり年老いている。父親は病気がしく、母親や里の娘などが介抱している。

上段の若者が何かを発見して、法螺をふく。

里人ら、いつせいに、それぞれの鏡の後に身をかくす。しんと静まりかえった里。やがて、しつかりした足取りのリズム

百姓の一人 目覚められたか。

童子 お、お主らは?

百姓の一人 わしらは丹波の百姓じゃ。山のお人、すまぬが道を教えてくれまいかの。

童子 道?

百姓の一人 うむ、都への道じゃ。

童子 都へ……? なら、お主ら!?

百姓ら一瞬警戒するが、うなずきあう。

百姓の一人 山城の衆は、なかなかの苦戦じやそうよなあ。

百姓の一人 わしら、丹波も、びくついとった腰をようようにあげた。

百姓たち やつとなあ。

百姓の一人 いずれ、摂津の衆も立とうよ。

がまんがまんを重ねた茨木も!?

童子 摂津が立つ?……わしの茨木も……

百姓の一人 ほう、お主は茨木のお人か。

童子 (茫然と立ち、ひとり言) 茨木が、立

百姓の一人 うむ? 茨木のお人、わしらはの、ありのままの世の中を変えにゆくのじや。百姓が苦しめられるこの、ありのままをな。

童子 お主ら、食いものはあるのか?

百姓の一人 (腰にまいた包みをたたいて) 仏壇の奥にかくしておいた米じゃ。

百姓の一人 (同じく) 昔からある、百姓の

ざりざりの浅知恵かのう。(笑う)

が遠くから近ずき、童子が大きな袋を肩に登場。里をじっと見渡して、やがてわが家の戸をたたく。

童子 お父う！ おっ母あ！ わしじゃ！  
二十年前に里を捨てた、童子じゃが！

おどろいた老夫婦、なつかしさのあまり声も出ないで、童子の胸にすがりつき泣く。

父親が胸をおさえしやがみこむ。老母が背をさする。

童子 お父う、具合が悪いのか。さ、薬草じや。これ煎じて、早う良うなっておくれ。  
(母親に袋の中の薬草の束をわたす)

里人たちが気づいて、筵から顔をのぞかす。だが、すぐには出てこない。

里人の一人 童子……童子ではないか！  
里人の一人 童子がかえってきた！

里人ら 童子！ 童子が！

童子は里人らにうなずき返す。里人らはようやく全身を見せるが、すぐには童子の周りには寄つてこない。糞はもう着けていない。

やっと一人の里人が声をかける。  
里人の一人 童子！ あれから、どこを、どうしてくらしておった！？

童子は大きくうなずきポーズをとる。

童子 でーん！ でーん！ でーん！  
里人の一人 ほう、なつかしい声じゃ！！  
里人の一人 思い出すのう！

童子は静かに舞いながら歌う。  
里人らは徐々に童子に近づく。

でんであら でんであら でんであら  
丹波の山に 身をかくし  
わが身さいなむ 二十年

丹波の栗は いが衣

暑さ寒さを 耐えの道  
岩を屏風に ねてくらす

まわりに集まってきた里人に気付き、舞いをとめて、袋の中から大粒の栗の実を取り出し、里人達に渡す。

童子 丹波の栗の実じゃ！ なんにもないが  
これがおみやげじゃ！

里人ら、うけとりながら、じっと童子を見つめる。  
初老の一人の男、すすみ出て、童子の眼を見すえる。

男 そのお前が、なぜ戻ってきた！？ え！？  
里人らも、じっと見つめつつける。  
遠くに雷鳴。

童子 (遠くを見やるように) 何度も、一揆  
が通りすぎた……  
里人ら ……(警戒の色)

稲光。雷鳴。

童子 山城の衆は、斬り殺され、犯され……  
だが、わしは、ただ立ちつくし、ありのままを見ておっただけ……

里人ら ありのままを？

童子 いや、それどころか、わしは！ (眼  
にあふれる涙を落すまいと上をむく)

稲光。雷鳴。

童子 丹波の百姓が京へ立った！  
里人ら おう！ (互いに顔を見合せ、低い  
よめき)

童子は一人一人の眼を見つめる。  
はげしい稲光と雷鳴。  
里人ら、それぞれの筵の前にもどり、  
重く静かに歌う。童子の心を探るよ  
うに。

百姓が  
命かけ 立つときは  
心の底まで 割る！

童子 (その歌をかみしめて) 里の衆……わ  
しも心を割ろうぞ……たのむ……今一度。  
わしを百姓にもどしてくれ……立百姓に！

百姓らは、さらにきびしく、童子の心  
を問いつめるように歌う。

百姓が  
お上に手むかえするとき  
心は しのんだ末！

童子 (うなずいて) そうじゃ、しのびきれ  
ず、力をためることも知らずに、のぼせて  
里をとび出した、この童子のおるかさよ……  
けど、これからは、なんであるうと忍  
ぼう！  
たのむ！ わしをこの里の土くれ石くれに  
してくれ！

里人ら、童子に近ずき、はげますよう  
に歌う。

百姓が  
ありのままを変えるとき  
心  
は一枚の 岩！

童子 (感動する) おう！

里人の一人、ゆつくりと童子に近づく。

里人らの藁笠のふれあう音。稲光。雷鳴。

里人の一人 童子！ 丹波の衆と、つながりはつくか！  
童子 (じつと見つめかえし、やがて大きくうなづく) うむ……京の……羅生門!!

でんでら でんでら でんでらでん  
茨木立つときゃ 楓も燃えて  
鬼の眼にも 露ひかる

里人の一人 (同じく見つめかえし、うなずき) 走れるか！  
童子 ……!! (大きくうなづく)

でんでら でんでら でんでらでん  
でんでら でんでら でんでらでん  
……………

雷鳴。

童子 (両親の側に寄り、里人らに) お父う

里人らの踊り、きびしく。  
静かに幕。

おっ母おをよろしゅうに。

(おわり)

里人ら ……!! (うなづく)

童子の父 童子！

あとがき

童子の母 もうはや、いくのかえ！

童子 (大きくうなずいて) ひとときも早よう。これからが、わしの、まことの業！

この「茨木童子考」より前に、私は歌舞団「若駒」のために、小歌舞劇「茨木童子」を書き、約半年前に、地元茨木を含めた大阪北摂地域で上演されました。

☆編集部より

(作者)

里人の一人歩み寄り、童子に藁笠をつける。娘が一人かけ寄り、楓の小枝をわたす。思い出深い、楓！

童子は感慨深く見つめ、受けとる。

やがて、童子は話しながら、花道を退場。

里人ら、手をふり、踊りながら見送る

その時の脚本は、かなり茨木童子説話に寄り添って書いたものでしたが、童子を百姓出身と置いた点だけは、説話から離れようとしたところでした。けれども、ストウリイは貧しさゆえの子捨て話からはじまり、やがて長じた童子は説話通り、単騎独行の鬼になって

作者のあとがきは初演の記録などもあわせて可成長いものでしたが、整理させていたいただきました。なお、この戯曲には歌舞の曲譜もあるのですが、これも掲載できません。上演などの場合は直接作者よりそれらについて指示をえて下さい。

きのくに民話集

河童 証文

栗原省

第一場 牛の牛太郎

きのくには日高川を奥へ奥へと選ったところに竜神村という僻村がある。峻嶺峻嶺嶺嶺たる護摩壇山の山麓は大能部落。

川に沿って、わずかな田圃が拓けている。庄ノ右衛門の作男、作市が牛をつかって田植えをやっている。この牛は庄ノ右衛門自慢の牡で近在に一頭しかない。

更に説明すれば、作市ほどの牛使いもまた近在にいないと評判である。

折々作市の掛声がきこえる以外物音一つもない。

作市は舞台の上手から下手へ、下手から上手へと自信に満ちた足どりで牛を追っている。舞台奥は、日高川。川岸の岩から河童がひよこり顔を出す。若い女河童である。彼女はどうやら牛の尻をねらっているらしい。

出合の河童  
竜神村大熊の出合の淵に河童があった。あの時、この里の湯の倉という処の田圃の中へ牛を放しておいたところ、河童が上がって来て尻を抜こうとした。牛は驚いて河童を引きずりながら一生懸命に大熊平という処まで逃げ出した。騒ぎを聞きつけた村人が飛んで行って、やっと危いところを助け河童を引捕えた上、さんざん打ちすえ、田の草取りなどにこぎつかった。辛抱しきれなくなった河童はどうとう「この後、天に星がなくなり、河に真砂が消え、竜蔵寺に小松が生えるまでこの地の湯野から上の人に手出しをしません」と約束して放してもらった。後に竜蔵寺に荆山という僧が住んで庭の前へ二本の小松を植えた所、たちまち湯野野の人が二人この

川へ夜釣に出かけたまま行方不明になった。これはてっきり竜蔵寺へ松を植えたため河童が災したのに違いないと、村人達が坊さんに掛けあって松を伐った。それから先ず格別の変ったこともないということだ。河童を捕えて、もうこの里へは上がって来ないからと誓わせた上、放してやったという伝説は中津村田尻にもある。(森彦太郎氏編「南紀土俗資料」)

時 是昔  
処 是きのくに山中

大物

長者屋敷の庄ノ右衛門

娘 たね

作男 作市

河童の川子

河童の川子 えい／＼歯がユイ、もう／＼こが

いに毎日毎日牛の尻狙たんのに、あの働きもんの作市め、牛のはたに付きつきりて手綱どこか尻尾をつかむすきも見せくさら

心。仕事も一緒、飯くうんも一緒、ねるんも牛小屋で一緒やったら手えも足も出やんのーラ。ああ、うち、だんだん自信無いまになつて来たわア。やっぱり女らあかんねやのーラ。いやいや。あかん。今からそがいな弱氣出いたら男勝りの川子さんの名アすたる。やつたる。やつたるでエ。必ず作市の油断みすまし、牛太郎の尻尾をぎゅうと擽えて……

川子 ええ尻したるなあ、男前やし、力はあるし氣立も優しそやし、……一そのこと牛の尻やめて、作市の尻コ玉抜いたるかいな。のーラ。もし、……もしもやでエ。もしうちが人間の女子やったとしたら……うわあ、恥かしよオ。胸こがいにどきどきしてきたよオノ。何とオしよオノ。ああ。作市や……

作市が牛を追って出てくる。牛が河童の氣配を感じてか、じりじり後ずさりを始める。

川子、あわてて頭をかくす。作市、牛を追って出、すぐ通りすぎる。

川子 ほやけど、作市の奴。なぜあがいに仕事するんないのオ？ 別にあがの田雨でもなし、余計かせいだとこで、あがはいつも真黒な粟粥しか食わせて貰えんとからに。……稼ぐんもちつとはええかげんにせんか阿茶んだらが！

作市、牛を追って出る。川子あわてて引っこむ。川子、作市の後姿にみとれて……

作市 しいっノチ、チチ……左せ左せ左せ。おっノ。へいしよへいしよノ。(と掛声) あね？ 牛太郎。何よオ。そがいにあとじさりしてよオ？ へいノ。

たね あれエ。そがいにびこついたりして、何ぞ恐ろしいもんでもあるんかア？ ははあ。今朝暗がりから働きつづけたんで流石の牛太郎もこたえたんやな？ ほうかア。ほや仕様ない。一寸だけ休むかア。何せ今日中に七枚仕上げなんだから、旦那様におこられるさかよオ。つい無理さいてしめてのーラ氣張つてくれよな。さあ。賢に土手の草

食て休め。土手へ上つても川の方へ下りたらあかんでエ。もし河童にでも引っこまればたえらいことになるさか氣いつけエよ。わしはお前が休んだるまにあに、隅の方ならしとくさかのーラ。

牛を土手に上げ草を食べさせる。そして自分は汗も拭わず、すぐ鎌で田雨の角の方の土を堀り、こまかくくたく仕事に熱中する。

川子がそつと出てきて、機を窺い牛の尻尾をつかまえようとすが、牛は蠅でも追うのか、びしと尻尾をはね、川子の面をうつ。二度、三度覗うがうまくゆかない。そこへ、長者の娘たねが遠く土手を走ってくる。十七才の娘盛りである。川子あわてて、引っこまざるを得ない。

たね (声) 作市イノ  
作市 (氣づかない)  
たね (声) 作市イノ。どこよオっノ！  
作市 あれいッノ。あの声は？ 嫌！ おたねさまや！

たね (息をはずませ走ってきたので、顔は上気し美しい。) やあ。作市。弁当持っ

きたげたでエ。

作市 ええッノ。嫌がノ。そりやアおおきに何故よオ。お勝ッあん。どうぞしたんか？ たね いん。病氣や。腰いたやとオ。ほやさか、うち作つたげたんよオ。

作市 (さりげなく) ほらア、どうも。すまんけど、そこへおいといて……氣いつけて去ぬんやでえ！

たね 作市。折角うちがおにぎりもつてきたのに、仕事やめて早オ食べよしよオ。

作市 へエ。おおきに、ほやけどまたア(と、空をみて) ま一寸早いさかい……

たね 仕事ら放つときつちゆうたら……早う上つといでよオ。茶、冷めるでエノ。

作市 ええッ、茶までもつてきてくれたんかい？ 勿体ないよオ。わしら日高川の水で結構やのによオ。

たね 何しやんのよオ。えーい歯がゆいよ、もうノ！

(と着物の襟をめぐり上げ、田圃の中へ足を入れる。)

作市 (みてびっくりあわて) い、嫌ノ。あかんあかん。田圃へら入って何すんのよオきたらあかんでよオ。着物わやにならいてよオ。

たね かまんノ。

作市 そんがな無茶して、第一わしが旦那さまにえらいお目玉くらうやないかア。

たね そんなら早よこつちへおいでよオ。うちもお前と一緒に食べるんやでエ。

作市 ええッ？

作市仕方なく、「へい」と仕事の手を止めて田圃から上ろうとする。たね「作市ノ手エ」と身動きならぬまま、甘えるので作市は弱り切りながら、たねの手をとって土手へ上げてやる。

たね (勝ち誇って) ようようちのいうこときいた。さ、ごはんにしよう。早よ手エと足、洗いでノ。早う。そら。

作市 へエ。

作市川へおる。その間、たねは浮々と弁当をひるげる。最前より川子、牛の尻尾をねらうのも忘れ、たねの挙動に吸付けられている。作市が戻ってくる。桶に汲んできた水を牛太郎にもつてゆき。

作市 ほう、のどかわいたる。今日は嫌はん

の氣まぐれで、仕様ない。早びるや。

たね 作市。何ぞ言うたア？

作市 いや。ほほう。ごつつオやな。嫌ノ。こがいな白飯のおにぎりからお役人にみつかりでもしたら平入りやでエ。

たね ふん。入れられたらええやないかノ。さ一緒にたべよオ。あつ作市ちよつと待ってノ。顔に泥ついたア……

たね。作市の顔の泥を拭こうとする。作市 びっくりとび下る。

たね 逃げたらあかんで、そうノ。じつとオして、そうノ。(とふく)

わア。汗くさノ。お前、あとでこれ脱ぎよし。休んでる間アにうち洗といたるさか。

作市 (どきまぎして) い、いや。ど、どうせ、又直に汗びしよになるんやし……もう……

片手でしっかり作市を押え、一心に汗を拭いているたね。作市、身の縮むおもいである。たねも流石に羞恥心にかられ、作市の胸から、つと眼をそらせると自分の足を見る。

たね 作市。水汲んできて！  
作市 へ？  
たね うちも足洗いたいんよオ。  
作市 (恐縮し切つて) あゝこらゝ氣いつかんと、のーラ……へい。じつきに。

作市、あわてて牛の水桶をとると川にかけ下りる。

たね 今日こそ作市の口からはつきり……作市の氣いさえ確めたら、うち、父さまの話なんか……

作市、水を汲んでくる。

作市 嬢。川の水は冷くて、氣持ええでエ。はい。

たね 洗うて！

作市 へっ？

たね 作市が洗うて！

作市 あの一オ。何を？

たね 何を？つて阿呆やな。足！

作市 そ、そりやあ……

たね 早よオ、何故うちのいうこときいてく

れんのよオ。

作市仕方なく。たねの足を洗う。白く美しい足である。

たね (足を洗わせ乍ら) 作市はうちのことどう思わ？

作市 えっ？

たね うちの顔みやんと!! 好き？ 嫌い？

作市 (途方にくれて) そ、そりや。

たね 作市。なぜ返事せんよオ。

作市 そがいなこと言うても……

たね うん。もうノはがいよオ。うちのこと好き？

作市 そりやア……

たね 嫌い？

作市 いや。そりやア……

たね 好きやね？

作市 う、う、う

たね どっちよオ!

作市 そ、そがに御奉行さまみたいに問いつ

められても、のーラ……

たね 早よ、そう!

作市 ……い、嬢はん……わしの心んなか、

どうしてもいわなあかんかア?

たね いわなあかん! はつきり作市 お前様も忙しい人やなあ。まあおにぎりでも一つ食べさせてよオ。

たね あかん! そう!

作市 嬢、何ちゆうたらええんやう。

たね たねのこと好きやつて言うたらええんやらよオ。うん! 作市の意地わり!

そう言つてしまつて、たね、娘らしく羞じ入る。作市益々途方にくれ……

作市 難儀やなあ、牛太郎。旦那様との約束もあるし。こがいな時。何とうしたらええんや!

とその時、牛太郎。尻をねらうのも忘れ

呆然と二人のやりとりにつききいつていた

川子の顔へ、真正面に放尿する。川子思

わず。

川子 うわア。いやーん。このど阿呆! ば

ばいやらよオ。ほんまに好かんやっちゃ

な!

作市、たねびっくりし、顔を見合せる。

たね 作市、お前、今なんぞ言うたア。

作市 いいやア。何も。ほやけど誰ぞいます

カンちゆうたわなあ。(はっとして) 好か

ん? ととんでない! わしやわがの命よ

りもいとしと思ふ嬢に、何でこの口から好

かんなどと……

たね (一途に) 作市! うちを好きやつて

言うて!

作市 嬢! あー地獄や! 嬢! わしや嬢

が好きやーウ、ウ、ウ、好きーやない!

わしや嬢を好かん!

たね (愕然として) 何てエ?

作市 わしや、嬢を好かん!

たね (顔色かえて) 何よ、そんな大声で!

作市! よう言うて呉れたよオ。(どっと

泣き出す) 何よ! こんなん、こんなもん

一生懸命つくつたげたのに! 作市! 奉

公人のくせして、ようも、うちに恥かがせ

てくれたなア。あ……

せつ角持ってきた弁当を手当次第川へ投

げこみ泣き乍ら走り去る。作市内心の苦

しみを押えて押えていたがへなノと座

りこみ泣くに泣けない。うめく。

作市 あゝもうしまいやア。もう、まああか

ん! 何もかも。あゝわしは大事なもんを

失うてしもうた。あゝ嬢! 嬢! わしの

嬢! 旦那様! うらみませくくくく

ぞ、旦那様……

いえわかつてます。ようわかっています。奉

公人の分際があろうことか御主人の嬢はん

にほれてはあかんことぐらい、ようわかっ

ています。わかっています、旦那様!

わしのこの口から嬢はん「好かん」「嫌

いや」とちかに愛想つかしを言わせるとは

……余り余り酷な仕打やございませんか?

のーラ。河口の町方のお大尺から嬢はんを

嫁にと結構な話。わしがおつて御縁談にひ

びが入るちゆうんなら旦那様! どうかど

うかわしに暇を出しておくれ。わしや、そ

の方がどれほど助かるか! 七つの時から

育てていただいた旦那様に、わしやうらみ

ごと一つ言えた義理でなし、ただ護摩壇山

の空を仰いで、泣くだけのこの作市になぜ

一言「お前がいては、娘の婚礼の邪魔にな

る。出ていけ、去せろ」と言うては下さい

ませぬかア! うらみませくくく旦那様。

とかきくどいている。突然、庄ノ右衛門

の声。

庄ノ右衛門 ようやつた作市! よう嬢に嫌

いじゃと言うてくれた。これで嬢も思い切

るやろ。

作市 旦那様!

庄ノ右衛門 お前には少し気の毒やつた。し

かし、たねは、わしの一人娘、作男のお前

と添わすわけには行かんのじゃ。もしたね

が、傷ものにもされたらと思ふわしの氣

もわかつてくれ。作市! わしはお前に出

ていけなどとはいわぬぞ。お前はわしの大

事な働き人やお前以外にはこの牛を上手に

使いこなす者はおらん。作市! お前は、

このお牛様がいる限り、わしとこの作男と

して働らせてやる。安心せい。ええか、

氣儘はゆるさんぞ。

作市 旦那様!

作市、うらめしく牛を見る。牛は高く啼

く。川子、じつと優しく作市をみつめ

る。

——暗転——

第二場

第一景 夜

前夜と同じ舞台。田圃に苗が植えそろうところ。ところがちがうだけ。遠く長持唄がきこえる。笑声も高い。たねの結婚の日らしい。提灯の灯の行列がつづき、人々のざわめきと共に「長者屋敷のおむこ殿が上つてみえたよ」「おたねさまの婿はんがみえたで」「町のお大尽の息子やとよ」「みにいこら／＼」の声。ざわめき。

つづいて提灯の列と、提灯の動きがとまり、やがて闇を貫いて魂消えるような声「うわァーっ」しばらく静寂の後、大騒動。

「花婿さんが淵にはまりこんだぞう」「河童じゃ。河童に引きこまれたんじや」「お前らむこうへまわれノ早よせんかァ」「えらいこっちゃあ」「お前ら、むこうへまわれノ早よせんかァ」「えらいこっちゃあ」「河童やノ」「河童のたよりや」「出合が淵の河童様がおたねさまの花婿を引きこんでしもうたァノ」

提灯がはげしく動き、やがて消えてゆ

はないノ、のう牛太郎ノ

作市の心も知らず、牛太郎は高くのんびり、モオ〜となく。蛙の声高く。

川子顔を出す。

川子 やい。やい牛太郎。お前には一人で芝居して苦しんでいるあの作市の氣イがわからんのかァ。のんびり啼いたりしくさってよーし、さあノ。その尻コ玉、今からいよいよ引抜いたるでエ。

じりじりと牛の後にまわり、ヤァと尻尾つかむ。成功である。牛はびっくり仰天。ウ、ウ、ウと立上り足をふんばる。

川子は、必死。流石に河童娘、ジリッ／＼と牛は川へ引きこまれようとする。

作市はハッと氣付き。

作市 ありやァ、牛太郎。なぜそっちへ下らんよ。そっちには深い淵があつて危いから行つたらあかんでエ。バックしたら危いかちゅうのにノ。うーん。

手綱をつかみ引つぱると牛は川子を尻へぶら下げたまゝ、ジリッ／＼と土手へも

く。  
(この景はシェルエット、人形、スライドなどを使つてもよい。)

第二景 前景より二日後の昼

萱の束が畔に立っている。牛休みの日(六月の初丑の日のしきたりである)。川子が正面岩かげから顔を出す。土手に立って下手をうかがう——蛙の声のみ。

川子 今日わたしは牛休み。例年なら川で牛を洗い、小麦団子をつくり、竜蔵寺の松に願かける賑わいやのに、おとといの晩の騒動で、今年は村中、ひっそり閑と静かなこと。いやーあ。あの晩は、ほんまに驚いたわ。長者の娘の婿入りを見物しようかと岩陰から覗いた途端に「婿殿が河童に引込まれたァ」と怒鳴り声。やァ。こりや誰か河童仲間であつたらしくおつたなど、そのままとんでゆくと、……あははは、ああ面白／＼。婿の奴、たねみないな美しい女子と夫婦になれる嬉しさ、おしっこしに淵へおりた途端、足ふみはずしてドボンや。あはは……あはは、ええあんばいやのーラ。

どる。

川子 うーむ。

作市 やややァ。河童の仕わざかァ。

川子 作市ノ。その手綱をはなせエノ。

作市 なにイ。氣安く人の名呼びくさつて、お前こそ、その尻尾の手放せノ。

川子 いややァ。この牛はうちのえものや。作市こそ手綱放せエノ。

作市 なにおォ、この牛はわしの牛やぞノ。

川子 アハハハ、阿呆作ノこりや、お前の牛か。ハハハ、違おがよォ、この牛太郎は長者さんの持ち牛や。お前は、ただの作男ノ

それも少しばかり牛つかうのがうまいため、暇願うても、許されん。お前は、いわば牛の附人やないか。この牛さえなけりやお前が長者屋敷を逃げ出し、日高川を筏で下ろすが、護摩壇山の峠を越えようが、後追う者はなかるがよ。

作市 (びっくりして) 何故、お前はそがなことまでノ。

川子 (引つぱりながら) へっ。河童は何もかもみとおしや。

作市 ふん。えらそにノ。やい、その尻尾を放せつちめにノ。

なんぼお大尽の息子でも作市をさしおいておたねの婿におさまろうなんてどあつかましーラ。そやけど作市も可哀そな奴やノせめて牛さえなけりや作市も、もつと氣儘にできように、あれではまるで餓い殺し同然。

えーい。憎いののは牛の牛太郎。見て居よノ。今日こそこの川子さんが……あゝ作市が来た。あれあれ、げつそりやせこけて……  
作市、牛をひいてくる。牛は暗れがましく着かざっている。

作市 あゝえらいことになってしもうた。可哀そうによォ。なんぼ親のきめた相手でも、娘が一旦夫と心に定めた婿殿が、事もあるうに、婚礼の夜、河童に川へ引き込まれるとはノ。  
嬢ノ。早よ氣いとりなおしておくれ、元氣になつておくれ、このわしのためにも(ハッと氣づいて身悶える)

あゝわしの心は鬼じや。お前の婿が死んでわしやうれしいノ。河童よくぞ殺してくれたァノ……。あゝこの世の義理ほどつらい錠

川子 作市ノ決心するんやノ男は決心が肝心やでエ、お前の好きなおたねさまは奥の間でねている。お前、ほんまにおたね好いたらんなら、行つて連れ出し、二人して上方で氣儘に暮したらよかるがよ。

作市 えっ？ 嬢をつれて上方へ？ 町へか？

川子 そや、町へ出るんよォ。世間は広いでニ。

作市 うーん。ほやけどォ……や、やい河童ノ。お前わしをたぶらかすんか。えーい。

お前やな、嬢のむこさまを川へ引き込んだんはノ。

川子 違うノ。

作市 そがな見えすいた……

川子 (きつぱりと) 違うノ。河童はうそ言えへん。人間と違て、絶対、言うこととやること、違いへんノ。

作市 (感心して) ふーん？ ほうかァ？

川子 えーい。そりノ。牛の手綱はなせちゅうによォノ。この牛はうちのもんや……うーん(と力いっばいひく)

作市 あいたァ。(思わず手綱をはなし尻もちをつく。牛がモオ〜とないて川子に引つぱたかれてゆくのを見て) あゝ牛太郎ノえーい待てエノ。河童ノ

牛の尻ぬくんだけはやめてくれノ 代りに  
わしの尻ぬいてもかまんさか。  
牛太郎の尻だけは、緊張つたつてくれエノ

川子 (とりあわずぐん／＼引いてゆく)。

作市 待つてくれよノ。牛太郎はわしが小

さい時から共働きしてきた苦勞友達ヤノ

河童にわたすことはできんノ 待てエ。う

一む。こら河童ノ

川子 あっノ

作市、川子に追いつかりむんずと組みつ  
く。川子今はまけじと作市と四つに組み  
押しつ押されつの大相撲になるが、作市  
の力にかなわぬ。後から羽がい絞め  
ようとした作市。このとき始めて川子が  
女河童であることに気づき、思わず飛び  
さる。

作市 うはっノ お前は……お、おんな?

おんな河童か?

川子 (胸を抱いたままじつと動かない)。

作市 ほりか? 手荒なまねして済まなんだ

よ。

川子 (黙って首をふる)。

川子 はじめて強い男の力を感じたらし  
い。作市に絞められたあたりに手をふれ  
その感触をいとしんでいる。

作市 ——あのない。女河童はん。この牛の

尻ぬくんだけはやめてくれ。な。

わしとこの牛太郎は金で買われてきた同じ  
もん同志ヤ。

わしヤ、これまで一生懸命牛太郎の世話し  
てこらで一番の牛つかいになった。

そら、お前の理屈どおり、牛つこうてもう

けるんはわしヤない。持主の旦那様ヤ。そ

ヤけど、わしヤ、牛太郎と一緒に働くんが

好きなんヤ。のーラ。頼むさこの牛太郎

の尻だけはねらわんといってくれんか。

そこへあたふたと、庄ノ右衛門

庄ノ右衛門 ヤヤ。作市。河童を捕えたかノ

う一む、でかした。牛の尻は無事か、お

よかった、よかった。えーい作市。何をぐ

ず／＼しとる。早よ、マキ割りてぶち殺し

てしまわんかいノ。う一む。こやつやな

わしの婿を川へ引づりこんだのはノ。憎さ

も憎しノ。やい何を、ぐずぐずしとる?

作市 いえ。だんな様、この河童は、婿様を

引込んだ河童ではございません。はい。

庄ノ右衛門 阿呆たれノ お前に、そがなこ

と何わかる?

やい河童ノ。貴様ようもノ……(と差し

た刀引ぬいて川子を切らんとする)

作市 あっノ お待ち、お待ち下さい。旦那

様。この河童は、真正証明無実でございます

す。

庄ノ右衛門 何を証拠にノ

作市 いや。河童は昔から嘘言わんけだもん

ときいとります。どうか、コ奴の命だけは

……

庄ノ右衛門 お前、何でこがいな河童の肩持

つんなノ

作市 わしにも、わからんや。けども旦那

様ノ。どうか作市が一生の御願いです。

もし、かなわんなら代りにこの作市の生

命をノ

庄ノ右衛門 うーぬ。この一(考えて)よし

お前、せいほどたのむんなら生命だけは助

けてやるうが(考えて)そうじヤ。作市ノ

お前にそやつをあずける。(考えて)逃が

さず見張って、山仕事ヤ、田の草とりをや

らせるんじヤ、よいか。構えて逃がすでな

いぞ。

——暗転——

### 第三場

#### 第一景

前場より一ヶ月あまりたっている。同  
じ場所。但し稲は、四番草をとるまでに  
成育している。(昔の百姓は大方五番草  
までとった。)南紀特有の清澄な夏空が  
くっきり山を区切り、じりじりした日射  
しが田面に燃えている。一面輝時雨。  
作市と川子が、田の草とりをやっている  
が、稲がのびていて背中しか見えない。

作市 (仕事しながら)河童の川子ヤい。ど

うな? 一服するか?

川子 (返事なし)

作市 川子。どうなよ。えらけりヤ 一服

するで。

川子 (返事なし)

作市 のーラ?

作市 はれッ、本まにほやったんやなア。ほ

うか?ノ皿の水きたんか?ノえらいこと

川子 (やはり返事なし)

作市 (伸び上り)川子? 返事もせんとか

らに、どがイしたんな?のーラ?

川子 う、う、……み、水ノ

作市 おいノ 何とうした?

川子 う、う……(ぐら／＼ゆれ、伸び上っ

たかと思うと前のめりに倒れこむ)

作市 あノ 川子ノどげした?のーラノ

作市 慌てて走りより、抱きかかえると土  
手の木蔭へ運ぶ。

作市 川子ノ おい。

川子 う、う……作、作市さんノみ、水ノ

作市 水? よっしヤ。ちよっと待つとれエノ

じき汲んでくるさかな。

作市、竹の筒をもって川へはしりおり

る。川子が苦しげにうめいているうち、

忽ち作市が戻ってくる。川子「呑むので

はない。頭へ掛けるのだ」と動作で示

す。

川子 馴れやん仕事ヤもん、仕様ないわ。の

のーラ。

作市 大体から、お前には、こがな仕事、無

理なんやな。草とんのに、こう下向いた

ら皿の水は当然零れてしまし、上からは

カンカン照りのお日さんが射いて、直乾い

てしまし。のーラ——よし、お前日陰で

休んでよ。その間にわしは二人分やりあげてしまふさかな。お前、大分熱あつしいし日射病に罹りでもしたらわや。ええか。ここでじつと寝てよ。

作市 仕事にかかると。

川子 作市さんは、うちの生命たすけて呉れたばかりに、仕事は今までの二倍もせんなんようになつてしもうた。ほんまに、済まんこつちやな。そやのにあの人、一向も嫌な顔せんと、あがいに黙って働いてる。作市さんちゆう人はほんまに……(急に又苦しみ出す。)あ、辛ど辛どいよ。さ、作市さん。

とが気になる。

作市 川子どうかな？…… 気色悪くらいンとして……広い天地にわしと川子だけしかないみたいや……(ふっと)いや。わしの心の中のもう一人の方は……飯炊きのお勝の話だと、何でも山向うの大山持の息子と縁談まとまったとか……それでええわ……ああ、御主人の娘と夢のようなこと考えたんは遠い昔のようにおもえるな……川子どうなやろ？気分良なら直ゆくと言いやつたが……もしかして逃げたんでは……いやまっさら川子に限って……名呼んだるか？ おーい、川子！ あれい、返事ない。(土手にかけ上り)川子！ ない。あ奴病氣やなんてわしに嘘だまし、こりゃきりきつと逃げたに……くそ……川子まで……ああ、わしもう何もかもうたとなってきた……

作市、気ぬけたように土手へ、へたへたと坐りこむ。思いもかけぬところから川子ひょっこり出る。前より生き生きと美しい。

矢張こら、日射病あたりやな。ああ難儀やな。川子。おい。しつかりせいよ。

川子 作市さん。頼むさか日高川の淵にうち寝やいてよ。川の流れにちよつとの間身体ひやいたら、じき治るさか……

作市 (躊躇する。がすぐ) 旦那様に知れたらおこられるけど……

川子 ああ。頭痛ないな。辛どいよ。背中へおぶされ。ちゃんとせなあかんで、川子。

作市、川子を背負って川へ。「しつかりせんか？ 川子！」という声のみきこえる。——油蟬と川の音。

庄ノ右衛門。尻に鍋蓋をあてこうている。

庄ノ右衛門 作市ノやい作市ノ 妙なやあたしかに今日はこの田の四番草を云いつけたんじゃが……。のーラ。ない。河童めの変もない。まっさら河童に尻でも抜かれ殺されたんでは……ぶ。ぶ。ぶ。何しろ河童百姓に使うとるんはこのあたりでわし一人や、さすが庄ノ右衛門といやその評判の高いこと、そやけど村の者ら恐しがつ

川子 作市さん。

作市 (驚いて) ああ。川子ノ

作市 思わす立上り川子を抱く。川子感動し潤んだ目で作市をみつめる。作市照れあわてて……

作市 い、いや……どや？ もうええか？

川子 いん、もう、ま、氣遣いしないよ。な熱下つたやろ？

と作市の手をとって額へ。作市どきまきと手を離し……

作市 ああ。ほんに……

川子 作市さん？

作市 あ？

川子 うち逃げへんで。

作市 (あわてて) いや。ど、どうしてそんな……

川子 うち、逃げへん。

作市

川子 あんたはうちの生命の恩人……ちゆうりだけやない。

作市

て尻に鍋蓋かうやら瓦あてこうやら……(一寸てれ乍らぐるりとまわって) わしも一寸やつとるけど。尻あてせんのは作市一人やから……ひよつとかして河童に……いや。そうと違うて、河童に逃げられたんか？ うむ。そうかもしれんな。そうに違いない。うーん。作市奴。もしも河童を逃がしてもしやつたら…… うーむ。なつとしたもんか？

「あがいに固う云附けた河童、ようも逃がしくさつて、えーいわれどがして呉るんな？」とひしつたかそか？ それより「逃げた河童の分までわれ二人分仕事せい」と云いつけたるか？ うむ。こらわれながらよい思案や。作市なら、よう口返答せんや。のーラ。ははは……

庄ノ右衛門 去る。

作市一人 でてくる。

作市 川子にあのまま田圃させたら、とつても身体保たんや、可哀想に炎天下で馴れん仕事を一生懸命、義理固い河童や。旦那様もええかげん氣張たつて呉れたらええの……

もとの仕事にかかると。が、すぐ川子のこと

川子 (思い切つて) うち、あんたの側で居たいさか！

作市 (感動する)

川子 あんたがおたねさんちゆうお屋敷の御嬢さん好いでることよう知つとる。けどそがことうち関係ないワ。うち…… 知らん間にあんたが忘れん人になつてしまつた。ううん。うち一人勝手にそう思たるんやさか。あんたは何も氣にせんかてええんや。ふ、ふ、ふ、ふ、氣にする筈ないわな。のーラ。うち河童やもん。ほやけどうちにはそがなご、どうでもええんや。好きやつたら好き。そいだけ。河童らに好かれてごめんや。作市さん。作市 川子ノ

川子にっこり笑い、次第に涙ぐむ。蟬の声。暑い夏の河童の恋である。

第二景 月夜。同じ場所。

作市とたねの姿(実は川子が化した姿)闇の奥から食用蛙の鳴き声。かじかの声さえ混り青い天地に凄愴の氣を漲らせている。



川子 どうなの？ 作市さん。姿だけと違て、声も一語やろ？

作市 河童が化けるっちゅう話は聞いたことけど、何と正似やのうノ本当もんなやノ川子 作市さん。うちのこ、河童の川子やと思わんと、おたねさんと話するように話してみてもよ。うちもおたねさんになった気で話するさか……

作市 はいでもよう……  
川子 そうノ (と促す)  
作市 うん。

川子 —— 作市ノ (たねの声)  
作市 (びつくりして) へい。い、いと……  
川子 作市。お前、まだうちのこと嫌たんの？

作市 い、いや、嫌たるちゅうなこと……  
川子 ほやけど、前、うちのこと「好かん」ちゅうて、云うたらよノ。

作市 いや、あん時は、仕様なしに……  
お、おい。川子。妙な話すんなよ。殺生やらよ。

川子 あれ。悪。悪。ほな、もちよつとムードだよ。

作市 ムード？

川子 ねえ。作市。こがいに二人してお月さん見ると、自分ら小さかったころ想い出すな。

作市 小さかった頃をな。

川子 あの時、お前、いつともうちの側で、うちをみて呉れた……

作市 しまいかけた水呑百姓の子やった。御奉公してはじめの仕事が、嬢の子守りやった。こがに嬢をおっぱして、わしは悲しい歌うとうた。おねんね子守りに売られてきたがヨ。戻る家もなしヨ。歌唄い出すと嬢は直ねむる。ほいてるうちに、背筋のあたりが何とぞ温くッなって、嬢の美しいおしつこがわしの尻から足へシワツと伝わってゆく……あの温み、いまも、よう忘れなノ

川子 (呆れて) 憶えでもええこと、ようまあ忘れんとノ。のーラノ。

作市 わし、よう旦那様にムチでたたかれたい。そいをみて、お前様は可愛らしい声でケラノよう笑うた。嬢のその笑い声で、わしや、どがな痛さも辛棒することが出来た……

川子 (感動して) 辛かったんやろなア——  
作市 (その声に感動し) あー。嬢がそがいにやさしい言葉云うて呉れたんは始めてや

川子 えっ？ いや、そのオト。うちはなア——

作市 (気づき) そや、ほにノ。お前、川子やらよ……

作市 ほやけど妙なやのーラ。わし、今まで、こがに秘々心中、話したことなかったのーラ。河童のお前に、つい子供みたいに甘えとなつてきて……わがでも可笑うなつてくら……のーラ。(川子の様子がおかしい。気付き……) 川子ノ。何とうした？

川子 辛どいノ (胸をおさえ) ここたしが……気色わりんよ……

作市 やっぱ、身体弱り切ってるんやな……それにわしなぐさめようとして、こがなしめ馴れん帯らしめ、おたねの真似らさせたさか……

川子 ごめん。作市さん。せつかくあなたを喜ばそと思つたんやのに……あ。あ。辛どいノ

作市 川子。明日、わしから旦那様に話してお前をもとの淵に戻して貰たるさか……このままいたらお前死んでまワノあかなノ

川子 かまん。うち、あなたの側離れるんはいややノ。  
作ノ。阿呆ノ。死んで何とうすんなよノ。

意地はらんとわしの云うとおりしな。(考えて) うむ。昔から河童の詭状ちゅうことよりきく。わし文句考えて旦那様に頼んで上げるさか……ええなノ

川子 (苦しい) さ、作市さん。うち、死んでもかまんさか……あなたの側に……あなたの……

作市 (抱く) 川子ノ。こら。川子ノ。川子 あ、辛どいノ。もっと……き、強うに……抱いて……

月の下で激しく抱き合う二人(いや、一人と一匹と呼ぶべきか) 食用蛙の声凄じく——

——暗転——

第四場

(エピソードとでも名付けるべき二景)

第一景 中幕前

作市 (よむ) 差出申一札之事  
私事心得違ヲ以テ長者屋敷庄之右衛門様御

所有スル処ノ牛ノ尻引抜カント致セシ段誠ニ恐入候。以来天ニ星消ニ浜ノ真砂ノ尽キ去リ且ツハ竜藏寺ノ小松生ニル迄此地ヲ踏間敷候間、何卒一命御助被下、御放免賜レバ難有仕合奉存候。為念一札如件

出合ヶ淵 住 河童川子  
長者屋敷庄之右衛門様  
旦那様、これでどうやらに？

庄ノ右衛門 ふむ。仲々見事な文章やの。河童の証文は、わしも前々から欲しいとは思うとつた。この証文は、牛や馬の病氣は云うに及ばず、水饑饉や水難よけに、仲々良う効くと伝えもある。

作市 では、旦那様。これでこの河童めは、放つてやつて宜しうございますか？

庄ノ右衛門 一寸待て作市。わしやお前のたつての願いで、河童の生命だけ助けてあげた。河童も恩義を感じてか、よう働らいてくれ、わしも善いことをしたと喜んでた。

川子 いえ。それ皆、この作市さんが……  
作市 お前、黙つてノ。

庄ノ右衛門 (無視して) 河童め、仲々よう働いてくれた。今この証文うけとつて、放して上げてええが、わしは大事な働き

手を一人、いや一匹失うことになりがいな損失を罷る。のーラ。作市。そこや。相談ちゅうのは。お前、どがしてもこの河童放してやりたいか？

作市 へい。  
庄ノ右衛門 お前、そのかい云うんなら、それ相応の覚悟もあろうな？

作市 ——へっ？  
庄ノ右衛門 どな？ 今後ずつと、この河童と二人分の仕事、一人でやつてもらわなあかんが、それでも、この河童放してやるか？

川子 そ、そがな、無茶苦茶——  
作市 黙つとれちゅうんや。(きつぱり) へい。旦那様、そのかいのこと易いお約束、今からは、わし、この河童と二人分の分量必ず一生懸命稼がいでいただきますよつて、どうかこの河童だけはこらえて上げて下さい。へい。

庄ノ右衛門 ほりか。作市。お前、そのかい頼むんなら、餓鬼の頃から面倒みとるお前のこつちや。気張ちやろか。のーラ。

作市 へい。おおきに……  
庄ノ右衛門 河童の証文とは……珍妙な品……は、は、は……

これでわしの名は、また一段と高くなること  
つちやろりのーラ……は、は、は……

——暗転——

第二景 夕ぐれ。第三場と同じ場所。

夕日が空を美しく染めている。作市、川子を負って出る。

作市 さあ。ここで別れるぞ。

川子 (負われたまま) 作市さん。あんた本気で、長者とあの約束？

作市 何云うんよ。河童みたいに義理堅いけど、人疑うて何とオサラフ？

川子 (嘆く) あ、うちを助けたばかりに……

作市 (笑って) 何もお前の所為やないで。旦那様の最初からの計算づくよ……それがなことはわしにもわかつたが……のーラ

わしみたいたいな貧乏人は、人一倍稼がなあ

かんようになつたるんよ。働らいてさえいたら、いつか世も開けてくらよ。そのなもんやてよ。は、は、は……

くよくしても仕様あるかよ。は、は、は……

川子 (黙って作市の肩に頬をよせて泣く) 作市 こがいに、お前背負っていたら、小こい頃思い出してかなわんよ。 (わざと邪険に) そう、お前、いつまで背中にいてるんよ。早おらんかよ。 (やさしく)

川子。去んたら、きつちり養生して、早、元気になるんやて。——

と背中からそつと下す。川子、足許危く立ち、よろ／＼と作市にすがる。

川子 作市さん。うち身体良なら、絶対

作市 あんたんとこへ戻ってくるさけ——

川子 そやから、河童と違て……人間になつて……あんたの嫁さんに……

作市 「好きか」「嫌いか」ちゆうて、つめよるよりな女ごは、もう御免やて。は、は、は……

遠く牛の声——

作市 そう、牛太郎が夕食まだかとせがんだる。去んで銅葉食わせてやならな。川子。元氣になつても、もう牛太郎の尻、ね

川子 (感極まつて) 作市さん！

と、作市に抱きすがり、一瞬身を蹴して姿を消す。作市、呆然。

子守唄がかすかにきこえ——幕。

脱退勧誘

浅野良二

る。大きな黒い鞆をさげている。

中村 アレ、助役さんまだいたんですか？

助役 (と鞆を長椅子に置く) 何を言うとするんだ。君が帰らんと事務所しめられんのだよ。

中村 事務所なら僕がしめますよ。

助役 そうはいくもんか。マル生反対の超勤拒否は昨日から始まつてるんだ。超勤拒否の日は助役か職場長が戸締りをする事になつてるじゃアないか。それは君らの職場要求で決つたことなんだぞ。忘れたら困るなア。ところで残業もないのに君ひとりだけ今頃迄何をしとつたんだ？

中村 はははは。知つてるくせして助役さん……

助役 知つてるって……わしが何を……中村 とぼけたつてダメですよ。僕が組合に

いたことは労務課からちゃんと電話連絡があつたと思いますがね。

助役 労務課がなんでそんなことまで……中村 せんならんのかとはこつちが言いたいことですよ。どこで監視してるのかしりませんがね、組合へ出入りする人間をひとりも逃さずにキヤッチしてる話にはや公然の秘密ですよ。

助役 はははは。これは驚いた。元委員長には全くかなわんよ。ところで元委員長さん、その鞆には何が入つてるんです？

中村 おやおや。僕が官品の持出しでもやると思つてるんですか？ (と長椅子に掛けてひらき直る)

助役 どういたしまして……元委員長さんがそんなことをする筈はないさ。

中村 いやに元委員長にこだわりますね。はははは。これはね助役さん、組合の本棚に眠つていたのを借りてきたんですよ。裁判にでもなると一番にモノを言いますんでね。今は時が時ですから準備だけはしときませんとね。

助役 わかつた。六法全書だろう？しかし階

中村 そうでもないですよ。当局からは人並

以上にメツコを入れられてますからね。いつ何でひっかけられるかわかったもんじゃないありませんよ。近頃の当局ときたら法律に違反するのをまるで常識のように心得てるらしいですからね。

助役 おいおい。一方的に勝手なことを言うもんじゃないよ。君自身は一体どうなんだ？ たった今の時点でき。

中村 僕が何か法規に違反でもしていませんか？

助役 服務規程に違反しとるね。服務規程にはね仕事ですんだらすぐに退場せよと書いてある筈だよ。そんなことはね、誰でもが知ってるイロへのイじゃないか。

中村 それはうっかりしてしまいました。では、服務規程とやらに敬意を表しまして僕はこれ……(と立上る)

助役 待て待て。上司の命令があつた場合はその限りではないんだ。

中村 へえ……随分と身勝手なもんですね。そっちがそういう気なら……

助役 どうするとういんだ？

中村 至極簡単なことですよ。命令するんでしたら増務給を支払ってもらいませんと僕は残りませぬよ。社会奉仕にきてるわけ

はないんですからね。

助役 へらず口を叩くなア君は……増務給位出すさ。

中村 おやおや。超勤拒否の日に増務をでするか？……助役さんがそんなことをおっしゃるとは困つたもんですね。これは誰でも知ってるイロへのイだと思ひますがね。(と腰をおろす)

助役 まるでイバラのような男だな君は……どっちへでもひっかかつてきよる。人をなぶるのもほどほどにしたらどうだ。

中村 とところが助役さん、労働基準局は決してほどほどにはしてくれませぬよ。超勤拒否の日に増務をつけたりしますと違反ですよ。と言つて別の日に振替えたりしてもダメですよ。組合の電話一本で基準局飛んできますからね。その時は箇所長即ち工場長がいられるんです。氣をつけた方がよろしいですよ。

助役 これだから組合の古手は好かんというんだ。しかし君の方の違反は二件だから、こつちはブが悪いがまあ我慢するとして、二件ともマルにするから暫く坐つていてくれ。

中村 二件の違反とは何ですか？

助役 そうじゃない。元委員長でも当局に協力している人もある。マル生に献身的な努力をしている元委員長が現にいるじゃあないか。マル生推進委員長なんという役割を自分から買つて出たりしてね。彼の英雄的な行動に対しては工場長はじめ心ある人々はみな感激してよ。そうかと思つと、君のように指導掛のくせして組合の旗を振つて部下の組合員を煽動したり、マル生に反対したりする世渡りの下手な元委員長もいるがね。

中村 世渡りの下手なのは認めますが……煽動というのは認められませぬよ。たぶん非常識な当局用語だとは思いますがね。しかし、人それぞれのちがった生き方があるもんです。組合の元委員長のくせしてマル生に協力して当局の旗を振つたりする方がおかしいんですよ。しかもそれが英雄的な行動ですって……ははははは。あなたの話をきいてると何だか頭が変になりますよ。

助役 頭が変なのは君じゃないか。工業学校を出ている指導掛が年四十にもなつていまだに七職というのは一体どういふことなんだ？ どこか狂つてるとしか思えんじやない

か。精神病院へでも入つてとくと考えてみるか？

中村 その必要はありませんね。残念乍ら今の国鉄はまぎれもなく精神病院ですよ。あなた方のようなマル生という業病にとりつかれてお脳がいけなくなつた患者がウヨウヨいますからね。しかも患者御当人は国鉄を再建するお医者さんだと自認しているから助かりませぬよ。今の国鉄はね、マトモなのが氣違い扱いをされて、氣違いがマトモな顔してのさばつてるんですよ。これで

は国鉄もお先真ッ暗ですね。

助役 ははははは。怒る気にもなれんなア。君と話してるとこつちの方が頭がおかしくなつてくるよ。これでは奥さんや子供たちが氣の毒だなア。それをなんとかならんのかと思つてね、今日もいろいろ君のことを調べてみたんだが……君の同期生と一期後輩までが全部助役になつてるよ。しかも殆んどが十職だ。君の七職というのはね、中間管理者の中では最低職なんだぞ。最近では、現場のボーシンの中にだつて七職の人が随分いるんだ。君現場ナミということになるぞ。はずかしいとは思わんのかね？

中村 思いませぬね。冷飯も馴れっこになる

助役 氣がつかんとは困つたもんだな。たとえ時間外であつてもだよ、上司の許可なしに組合事務所へ出入りするの違反だ。

中村 へえ……それも服務規程ですか？

助役 服務規程じゃない。これは労務管理上の常識だ。

中村 常識ではないでしょう。そういうのを世間では非常識というんですよ。それでしよう。時間外の行動まで何故当局の許可があるんですか？

助役 わかつてないなア。君が委員長やつた時と今とでは労務管理もまるつきり変つてるんだぞ。組合事務所といえどもまぎれもなく当局の建物だ。したがつて上司の許可があれば執務時間中でも入れるよ。

中村 成程。マル生用の労務管理つてわけですか。じゃア僕がもし執務時間中に許可を求めたとしますと？

助役 それはたぶんダメだな。

中村 どうしてですか？

助役 君は当局からマークされてる国労の組合員だからさ。ははははは。こんなことは極めてハッキリしてるんだ。

中村 へえ……大変な差別があるもんですね。それは僕が元委員長だからですか？

とまた味のあるもんでしてね。はずかしいのはむしろあなた方当局の方でしょう。僕が七職でいるということはです、不当な差別人事をやつてる生きた証拠のようなもんですからね。

助役 そうはならんよ。君の七職は当り前だと国労さんでさえ認めてるんだからね。

中村 組合がどうしてですか？

助役 さあ……どうしてだろうね。そいつをうっかり喋ると職場長にお叱りをうけるかもしれないからね……しかし、元委員長の君にはかくしてもムダなような氣もするしね。いつそのことあつさり吐いてしまおうか……実はね、君の言つた通り工業学校出の指導掛が七職でいるというのは我々にもいささか恰好が悪いんだ。だから君の昇職については今迄に何度も上申し込んだ。イヤ本当だよ。せめて八職にしほしいとね。ところがその都度国労さんから横槍さ。あれは組合の中でも反主流派だし、当局のブラッターリストにも共産党の同調者となつてる筈だから、あんな者を当局が優遇するのはおかしいとね。これは勿論チャック(口を閉じる手真似)だよ。国労さんにきこえると困る話だからね。

中村 ハッははは。バカバカしいことを……

尤もマル生というトテツもないことをやっている当局ですからね。国労からの組合員離脱工作には手段を選ばんといいるところでしようが……しかしそんなでつちあげのつくり話に僕が乗るのも思っているんですか？

助役 乗る乗らんは君の勝手だが……じゃもう少し具体的に言おうかな。君がね組合の選挙だけではないにどの選挙の時にも共産党に入れておくと誰でも知ってることなんだこれは……つまり君は共産党を支持する統制違反の組合員というわけだ。だからことごと君の昇進昇職には国労さんからストップがかかるのさ。高い組合費をおさめて、その組合からケツチンを喰って。まだこりずに後生大事に組合を守ってるんだから……ハッははは。こんな割の合わないバカバカしい話はないよ。中村君。人のいいのも何とかとさうじゃやないか。全く正気の沙汰じゃないよ。

中村 助役さん。問題をすり替えたら困りますよ。組合の選挙で共産党に票が入ったらお叱りをうけるのはあんた方現場の当局じやありませんか。労務課長に呼出されて油を上げられてるのを僕は委員長やってる時

に何度もみましたよ。共産党を目的にしているのはあんた方当局ですよ。ちがっていますか？こちらは元委員長ですよ。

助役 元委員長ならそんなヤボなことを言うな。当局が共産党を嫌うのは当り前のことじゃないか。

中村 ところが日本国憲法にはですね、思想と宗教は自由だということになってるんですかね。

助役 憲法？……ハッははは。憲法ね。実のところあれには弱いんだ。第一君、憲法というのあんまり身近じゃないしね。あれはたぶん我々の理想とかいうもんじゃないのかな。あんなものを後生大事に守っているのはとても仕事にならんや。全く申しわけのない話だがね……

中村 それはそれでしょうね。憲法を守る心がカケラでもあるんでしたらマル生なんてできませんからね。それに僕はもう一つだけ不思議に思うことがあるんですよ。生産性向上運動というのはですね、一生懸命に仕事をせよ。そして生産をあげよということだとばかり思っていたんですよ。それだけでも結構問題はあるんですよ。ところが実際はそうではないに組合をひっくり返す

の目的みたいですからね。マル生というのは明らかに不当労働行為ってわけですよ。

助役 おいおい。黙ってきいていたら君は手放して何を言ってるんだ。わしは何も君にそんなことを言ってもらうために、わざわざ君の前に坐ってるんじゃないんだぜ。

中村 それではさっきとお帰りになったらどうですか？僕だって何も時間外にあんたの前で坐ってる義理なんかありませんよ。一体僕に何の用があるんですか？

助役 中村君。元委員長だからって当局を脅めてると手加減はせんよ。いいかね。誰がみても今は当局が攻勢だし、力関係では組合よりはるかに勝ってるんだ。こんな情勢の時に当局に権つづ者がどんな扱いをけるかは元委員長の君ならよくわかってる筈だ。これは上層部の声なんだがね、君に政治転換がないようならどこか北の方の遠い所へでも飛んでもらったらどうか、なんてね。北海道あたりの雪の中でしばらく頭を冷すのもいいんじゃないか。

中村 頭を冷すのは助役さんあんたの方かもしれませんよ。僕を北海道へ飛ばす前に助役さんの首の方が飛んでるかもしれませ

からね。夏とはいえ随分お寒い話ですよ。

助役 バカなことを言うな。首を飛ばされるようなヘマなことをわしがやると思っている。現に今夜だって今までのわしの発言は全部どこか消えてしまってるんだよ。あとで君が何と言おうとわしが知らんと言えばそれまでだ。君とわしとは信用の度合

がちがうからねそれに当局は権力を持っている。権力の前には民主主義なんてはかないもんだよ。だから物事のすべてが一方的に権力側にプがいは仕方がないのさ。したがってわしの発言は消えてしまつてこれはマル。君の発言の方はわしがちゃんとメモしてるからこれを上司に報告するとX。

政治転換なしではしょうがないアということとで何分の沙汰があるということになる北海道の苗穂工場勤務、なんてことになるかもしれないが……まあ、クビになるよりはましだらうからさ、当局の温情は感謝し乍ら、北海道へでも行くかね。ハッははは。とか何とかお固いことを言うとカドが立つんだよ。どうだい中村君。考え直してみる気はないかね？今だとまだ間に合うよ。

中村 ……恐れ入りました。助役さんは流石にベテランですよ。正直なところ北海道はイヤですね。

助役 誰だってイヤさ。中村 僕もいよいよ本気で考えてみないといけませんかねえ。

助役 当り前だ。合法的に事前通知が出たとしても一旦出してしまえば当局は絶対にひっこめることはないからね。困るのは君だよ。その時になって薄情だとか何とか言われてもどうすることもできんやないか。

わかるだらう？こっちの辛い気持が……

中村 助役さんノズバリと言いますが……国労を脱退せよ、ですか？

助役 いや、そうは言っていない。国労にいると損だと言ってる。さっきばらんな話、七職と十職とは貰う金が月に一万円近くはちがう筈だ。

中村 そんな札ビラで横っ面を撫でるような言い方ではダメですよ。僕だって元委員長ですからね、もっと腹を割ってハッキリ言ってもらわないと納得できませんよ。自分の腹の底はかくしておいて、こっちの腹の中だけさらけ出せとは虫がよすぎますよ。

助役 ジャアハッキリ言ったら考えるかね？

中村 考えるだけではすまん話でしょう。即座に決断を下さないとあんたの方もどうにもならんのとちがいますか？こっちはこっちで北海道もイヤですが、助役さんの話では、当局と組合と両方から睨まれてるんですよ。だからね、それではいくらなんでもたまりませんよ。

助役 ヤレヤレ。遂に結論が出たようだ。君は難物中の難物だから、君の説得に成功すると、わしも大いに自信がつくというもんだ。じゃアこっちもズバリ言おう。君と君の家族の幸せのために国労を脱退し給え。すぐに八職に昇進して来年三月には九職まちがいなしだ。君の場合は誰もがアッ

と驚くようなケースだから昇進もスピードアップしてとんとん拍子にいくと思うよ。中村助役の出現もそう遠くはないね。助役になつて十職になつて、何もかもがうまくいくさ。絶対に保証するから任してくれ。

中村 と、言うところで助役さん、どうやらテープが一巻の終りですわ。(と長椅子の鞆をテーブルの上へ移す)

助役 テープ？…君！それは一体何だ？(へと急にあわてる)

中村 これはね助役さん、テープレコーダー

というもんですよ。

助役 そ、そんなことはわかってるよ。何の真似だと言ってるんだ？

中村 真似とか冗談とかではありませんね。

正真正正の本番ですよ。助役さんの発言をテープにとらせてもらいました。

助役 そんなものを君……君はわしをだましたな？

中村 どうしてです？

助役 君はその鞆を六法全書だと言ったじゃないか！

中村 はッははは。それはあんたが言うたんですよ。僕は只裁判になると一番にモノを言いますよと言っただけですよ。全くこのテープはマル生の正体を収録した重要な証拠品だと思えますがね。しかし助役さんは証拠など残すようなマはやらんと自信たっぷりでしたし、第一助役さんの発言は全部どこかへ消えてしまおうですからね、別に気にすることないですよ。しかしそれにしてもいささか迂闊でしたね。僕が組合事務所に行ったことを知っていつらこの失態は一体どうしたんですか？今の国労はね、右も左もないんですよ。団結してマル生に対決してるんです。みんな必死なんです

よ。そこんところの情況判断を誤ったのちがいますか？助役さんの口真似をしますとね、精神病院へでも入ってとくと考えてみることでですよ。それとも北海道の雪の中でしばらく頭を冷しませぬかね。

助役 中村君！もういい加減にしないか！（立上ってくる）その鞆は没収だ！こっちはよこせ！上司の命令だ！よこせ！（と強引に手を出してくる）

中村 そんなところへ上司はつきませぬよ。（と振出し鞆をロッカーに入れて通勤服に着替え始める）これは組合の備品ですからね、あんたの自由にはなりませんよ。無理に取上げたりしますとたぶん民事ではすみませぬね。刑事訴訟法第何条かしりませんが、強盗の現行犯で訴えられますよ。

助役 強盗だと？……君は助役を泥棒扱いにするのか？

中村 腹を立てることないでしょう。あんたは国労から組合員をたくさん盗んだんですから泥棒でも相当いいことですよ。石川五三門や鼠小僧でも人間を盗んだりはしなかつたと思えますよ。

助役 畜生！テープをよこせ！

中村 テープも当然組合のものですからね。

助役 （ガタンとなる）……中村君。すまん。君を差別してながいこと冷飯を食わしたの悪かった。謝る。この通りだ。（と土下座して頭をさげる）

中村 そんなことだけはせんといて下さいよ助役さん。当局の威信にもかかりますからね。助役さんも職制としての信念で僕を差別したんでしょうから今更謝るのはおかしいですよ。それに、さっきのお話では助役さんの発言はあとで知らんと言ええばそれ迄なんでしょう？……それはとても信じられないわけにはいきませぬよ。しかし、冷飯というの随分値打があるもんですね。僕は今日ほど冷飯のうまい味をしみじみあじわったことはありませんね。

助役 ……悪かった。心から謝る。だからそのテープは返してくれ。新しいのをすぐ買ってきて入れるから……頼む。頼むよ。

中村 声の入ったテープでないでダメですよ。国労を脱退し給えというありがたい当局のお声が入ってりませんとね。そんなテープを売っていますかね？

助役 そんな意地の悪いことを言わずに……頼むよ。中村君。そのテープをわしに売っ

てくれ。増務給で払うよ。十時間でどうだ？何なら出張にしてもいい。三泊でも五泊でも君の好きなだけ出張命令簿を切るよ。

中村 ケチ臭いことを言いなさんな。国鉄総裁の首がかかっているんですよ。増務給十時間ではあんまり値が安すぎやしませんか？……尤も何億円積んでもらってもこのテープを手放す気はありませんがね。はッははは。そういう助役さんを見ているとね。マル生というのは全くナンセンスだと思えますよ。まるで茶番劇ですね。折角土下座までしてもらったのに御希望にそえず残念ですが、このテープレコーダーは組合へ返します。じゃあお先にごめん。（と鞆をさげてさっさと退場）

助役 中村君！おーい中村君——（と後を追う）

M— 歌謡曲「おーい中村君」を流して。

幕

劇団はぐるま15年の

あゆみ

☆☆☆☆ 岐阜に定着して20年地方演劇の花咲かせる劇団はぐるまの記録

刊行・劇団はぐるま・岐阜市西野町1・頒価¥100

助役 テープの中の声はわしのものだ！

中村 はッははは。これは御明答です。成程大変な声が入ってますね。憲法は身近じゃないとか、理想にすぎんとか、あんなものを後生大事に守っているのは仕事ならんとか、いろんなことをおっしゃいましたね。このテープが一般に公開されますと、国民は驚きますよ。国鉄の当局はみなこんな憲法否定の精神でマル生をやってるんだと気が付きますね。これはあんたひとりの責任ではすみませぬよ。あんたの上司はおるか国鉄総裁もやられますね。まあ自業自得というもんですよ。あんたはたくさんさんの組合員を脱退させたんですから、罪亡しに今度はあんたが当局から脱退するんですね。その資格は当局側から見ても充分にありすぎるんですよ。何故ならあんたは調子に乗りすぎてまるつきりルールをはずしましたからね。僕はみたわけではありませんが、当局のマル生の教科書には、脱退という言葉は絶対に使えない、昇給昇進の約束はするな、しっぽをつかまれずのらりくらりとやれ、と書いてあったのちがいますか？……はッはは。はなかなか詳しいでしょう。こちらは元委員長ですからね。

# DISCOVER KOKUTETSU

## 島 源 三

くるむ。

駅長

河合……首席助役

中野……運転助役

山本……本屋助役

馬淵……本屋、運転掛(助役)

酒井……分会執行委員長

安田…… // 副委員長

とき。

一九七一年十一月十八日。

沖繩返還協定批准反対、全国統一

行動を行う前日である。

と云ふ。

ある操車場の駅長室。

階下は本屋となっているが、本屋は作らなくてもよい。

暗転の中からテープの声。

途中から机の上に置かれたテープレ

コーダにのみライト落ちる。

次第にF・I。

駅幹部の洗い顔。それを見守る酒井と安

田。

駅長、時計を気にし、おちつきがな

い。

——テープの声は進行上、長ければ

切ってもよい。——

テープの声 「まあそんな訳でして、私の詰

所から和田、山口の二人がようやく意志表

示いたしました。むろんまだ、この二人に

つづく者が出てくると思うんですが、あまり一気にやり、かえって反感をかうようなことになってもまずいと思いますので、除々に工作していくつもりでおります。」

「ごくろうさん。ところで桑原君。君の所ね、あまりばつとしないが、君、本気でやっているのかね。駅ん中じゃね、君の詰所が一番ガンになつとるんだよ。」……もうし訳ありません。まあ、やってはいるんですが……」

「まあ、……一ばいあけたまえ。いいか君ね、組合のことなんかビクビクしてちゃあ、……むろん、こういう御時勢だ、あまり派手にやってもらっちゃあ困るが、全体の士気に影響するからねえ。どこの駅も一生懸命やってるんだよ、いいかあ何度も言うように、万一の場合は、わしたちが骨は捨てる。むろん、わしたちのうしろには局だつて、……ねえ駅長。」とかく、新聞テレビのマスコミで、当局はずいぶんたたかれ、君たちもふるえ上っているようだが、敵を恐れておつては何もできん。だからといって今、ここで我々がやめたらどうなる、今までのことが全部水の泡。それこそノタレジニも同様なんだ。初志貫徹。

最後までやりぬくんた。……いま我々は、

やっではないけないことでも承知でやらなければならぬ。そのどたんばまで追いこま

れてるんだ。ようするに、やり方に注意し

ておればなんとでもいいわけできる。それ

で死刑になった奴はいないんだから。……

さて、みんなもって飲んでくれ。もはやこ

の駅にも、「国鉄再建の会」が発足して良

議ある職員が我々の側にかなりついてき

た。チャンスなんだ。いま一歩、もうひと

おしで念願の新労結成が達成される、今そ

こまできているんだ。いつかは、きつと君

たちの苦勞が報われる時がくる。……」

酒井 駅長。どうなんですか。

駅長 (急に立ち上り) 列車が、……いや、

ちよっとトイレに。

安田 (いきりたち) 駅長ノ あんた逃げる

んじゃねえでしような。これからが問題の

核心にふれる重大な。

駅長 本場にトイレなんですよ。

酒井 どうぞ。(テープのスイッチを切る)

お待ちしておりますから。

駅長ふるえながら出ていく。が、また戻り中野を呼ぶ。中野も出ていく。

酒井 ほかにありませんかな。さっきから、

もそもそしておいでのようにだが皆さんも。

山本 それじゃあ私も。(出ていく)

安田 首席助役さん。

河合 はい。

安田 ……汗が流れてますよ。それほど暑く

ないですがなあ。(タオルを渡す)

河合 ……いや。持ってますから。(自分の

でふく)

酒井 お茶ぐらいでませんか助役さん。

河合 ええ? ……ああいや、こりゃあ気がつ

かなくつて。(下へ走り去る)

安田 委員長。駅長は聞いてるんだらうか

ね? ……なんか、チョロチョロしてて。

酒井 痛い所をつかまれ、グウの音も出ない

んさ。

列車通過音。

安田、壁にかかっている新聞を立ち読み

している。

安田 あしたは、また荒れそうだなあ。//霞

が関、銀座暴動を呼びかけか。

酒井 沖繩協定の統一行動か。

安田 ああ、渋谷の騒ぎでポリさんを殺したばかりなのに、あれでも学生なんだから。まったく奴らの行動は理解に苦しむ。

酒井 ふん尿や、とうがらしを投げてた頃は

まだ愛嬌つてもんがあつたが、今じゃ火炎

ビンだからなあ。

安田 おかげで俺たちの抗議ストまでが、お

かしな目で見られるんだから。

酒井 それはそりと安さんよ。あんな所へ置

いて大丈夫なんだろうな。(机の底に付け

てある隠しマイクを確認する)

安田 ああ、大丈夫、心配いらん。変な所へ

隠すより人目につく、ああいう所の方が安

全なんだから。

酒井 しかし、本屋の連中には気を許せんか

らな。

安田 そこがつけめさ。連中にしたってまさ

か、小荷物の中にダンボール積みにした、

隠しマイクの録音テープが混り込んでると

は思わんだらうし、(机の下からマイクを

はずし)このマイクはね、小さいがどんな

音でもひろうんだから。二時間もしたら、

またおもしろい会話が聞けるってすんばう

さ。それにもう夜中まで小荷物列車は来な

いんだし。

酒井 シーッ。

安田 (あわててマイクを机の底に付ける)

河合入ってくる。

河合 いま、すぐ持ってきますから。

パトカー、サイレンを鳴らし走り去る。

酒井 やけに今日は、パトカーが走りまわりますよ。

河合 ……ほんとですなあ。(不安な顔つきになりウロウロする)

酒井 どうかしたんですか?

河合 いや、別に……

安田 助役さん。読みましたかここ。(新聞を見せる)

河合 (目を向けるがすぐはずす)……

安田 (声を出して読みだす)「資財局長ら五人処分。マル生、勇み足、国鉄当局、動労にむきかぶり。……助役さんも危ないですよ。」「国鉄またカラ出張、マル生対策委員会が告発。」当局さんもこんなところ黒星がつづきますなあ。……これなんか笑っちゃいますよ。マル生の会合に出席して

て乗務旅費が支給されている。それもたかが三百三十九円。もらった奴もみみっつい

が、出す当局さんも尻の穴が小さいですよ。それで新聞に写真こそないが名前まで書かれてるんだから。まさか、首席助役さんたちはそんなことしてないでしょうけど、……ねえ助役さん。

河合 ……おそいですなあ助役さん。

鉄道電話なる。

河合 (救われたように受話器とる)「はい

こちら駅長室です。……ええ? 何番へか

けるの? ここは駅長室ですよ。本屋は

下です。……いや、四三二番です。」(切る)

酒井 しかし、いつ来てもこの駅長室という

所は、陰気な所ですなあ。

河合 酒井さん。……いや委員長さん。駅長

から、まだ何も聞いていませんか?

酒井 なにをですか?

河合 そのう……今日……いや。

酒井 このテープが、どうして組合の手に入

ったか、って御質問ですか?

河合 いや……ええ、そのまあ……

安田 そんなことは問題じゃないですよ。よ

うするにこの中身、あんた達がしゃべって

いる内容が問題なんだから。

酒井 残念ですが、それはお答えするわけに

はいかんですなあ。

安田 首席さんもなんですね、なんとか今回、

点数を上げておっしゃっていただけようがこ

すなあ。

河合 わたしはなにも。

安田 そうですか? 巷の噂じゃ来年はどっ

かの駅長に。

河合 そんな……

酒井 ところで、新労の結成はいつやるんで

す? もう下地は充分できるとするよう口ぶ

りでしたが、この駅でも「国鉄再建の会」

に三十六人が集ったとか。

河合 (きっぱりと)いえ、三十八人です。

(口をおさえるがもうおそい)

酒井 ほろ。そうですか、三十八人ね。いや

こりゃあどうも。(メモをとる)

河合 ……いや、それは……

安田 ねえ助役さん。さっきもこん中で(テ

ープを指し)餌はまんたいくらでもあ

っておっしゃっていただけ、抜てき、昇職、

様に)くわばら、くわばら。

安田 ねえ助役さん。俺はね、あんただけは

すくなくとも話しのわかってくれる、骨の

ある助役になるとばっか思っていたが、し

よせん、ムジナはムジナでしたなあ。

馬淵 ムジナ? わしが。

安田 がお。今から思やあ、甘つちよるいロマ

ンチンズムにまでわかされてたつてことで

すが、俺が鉄道に入ったばっかのこんなガ

キの頃、あんたにブレーキの取り方、ホー

スのつなぎ方、新米の俺たちにいろいろと

面倒みててくれた頃のあんたは、上役に

もヘイコラし、言いたいことを言つて、

なんかいきいきしてて、俺たちの憧れの的

じゃった。俺なんかもいつかはこんな人間

になりたいつてね。

馬淵 安さんよ。

安田 その頃のあんたにはそういう魅力があ

った。あつたかい、親父的なね、……とこ

ろが近頃のあんたを見てると、もつとも、

あと二年たらずで(首に手をやり)これに

なるんじゃあ、やむおえんかもしれんが。

馬淵 安さんよ、いいたいことがあつたらも

つとはつきり言えよ、そんな。

安田 だから言つてるでしょ、しよせんは、

昇給、昇格……ほかにまんだながあるん

やな?

河合 あれは私が言ったんじゃありません、

駅長が、……私も、やっぱり、トイレに行

つて来ます。(下へ走り去る)

酒井、安田、笑いだす。

電話(一般用)鳴る。

安田まよっていたが受話器をとる。

安田 (電話にて)「はい駅長室です。駅

長? 今、ジョンベンシに、いや……ちよっ

と席をはずしてありますが、福田? 私、安

田といいますが、いや助役じゃありません。

ええ? ケイサツ? (切れる)「

酒井 警察?

安田 チェノ切つちまいやがった。ばかやろ

うめ。(受話器をおろす)署長だつてさ。

酒井 ……

馬淵。ポット。湯のみを持って来る。

酒井 馬淵さん。駅長はまんだトイレから?

馬淵 トイレ? そりゃあ知らんが、さつき

から下で電話してましたよ。

馬淵 安さんよ、何の話かしらんが、あん

まり幹部連中をつるし上げるなよ。

安田 つるし上げ? そうされてもしかたの

ないことしとるんですよ。ちようどいいや

助役にも。

馬淵 ほっほ、こんどはこつちかい(逃げる

ただの人だった。出世からはずれた、あわれな管理者だと言ってますがね、なかなかどうして立派な当局さんの先兵ですよ。

馬淵 せんべい？

安田 「起て再建の先兵よ、艱難きたれ、歯をくいしばれ、明日の国鉄きずこうぜ」

馬淵 はあ？

安田 「われ再建の人柱、俺がやらねば誰れがやる。」……あんなたちの好きな国鉄再建の根性節ですよ。

馬淵 ……で、なぜ私がムジナなんじゃね？

安田 またまたとぼけて。何を狙っておるんです。今さら年がいてもなく。

馬淵 よう意味がわからんねえ。

安田 (じれったくなり) つまりですな、

あんな個人が再建の会に入ろうが、当局にどれだけおべんちやらを言おうが、そりやお勝手じゃが、本屋の連中にマル生をふき込んだり、再建の会へ強制的に入れりするのは、不当労働行為につながると言ってるんですよ。あんた、その張本人じゃねえですか。いいですか、国会でもマル生問題が取り上げられ、ありゃあ。いきすぎ、やりすぎってことで総裁ですら悪うございませ

た、って頭さげたんじゃんな。

馬淵 おかしなこと言うね、総裁が謝ったからってなんじゃね、頭さげたくらいで国鉄の赤字が消えるのかね。私ほね、これっぼ

っちも謝らなきゃあいかん事はしてませんよ、まして君たちからムジナ呼ばわりされるおぼえはないですよ、そりゃあ昔しはヤンチャも言いたいことも言った、若かったからね、だが一旦、管理者になれば国鉄経営のことを気にしたり考えたりするのは当然のことじゃないかね。国鉄の再建なくして、どうしてみんなの幸せがあるというんだね。偉い人たちは間違った方向に生産性を持っていくから誤解されたり謝ったりするんです。総裁も言ってるでしょ正しい生産性運動は続けていくってね。(安田なにか言おうとする) まあ、ついでだから私の話も聞きなさいよ私まで誤解されちゃあ困るから、私ほね、国鉄からたいへん貴重な時間をもらい、苦しい財政の中から東京で、一週間は勉強させていただいた。本当に実のある講義を聞きはじめて目がさめたんですよ、今までのように親方日の丸的な考えじゃだめだ、莫大な赤字をかかえ今にも倒れかかっているわが国鉄を、再建するのは

誰れでもない、わしであり、あんなんだ。

そうでしょ、国なんて口は出すが金はおさん、まして他の企業が助けてくれる道理がない。結局、職員が努力しあって赤字を無くする以外に道はない。そのためには生産性運動は必要なんです。必要あるからこそみんなにこの運動に協力して欲しいというのがどうして、その不当労働行為とかになるんですかね、いいと思うことはどしどし自発的にやるべきだと思ってるんですがね、みんなが。

安田 助役さん。あんならには二言目には赤字やで生産性運動はやるんだ、必要だというが、その国鉄が倒れかかるほどの赤字を作った本場の原因はなんや考えたことあるんかな。まあ、今あんなところで赤字論争をするつもりはないけど、食って寝て子供を育てるに充分なほど金をもらっているんかなあんなは、それとも俺たちが怠けているから赤字なんやいんかな？

馬淵 君たちはすぐそういう極論を言う。まあね、君が言わんとすることはわかっているよ、大企業が、大資本が国鉄を喰いものにしている。そう言いたいんじゃろうが？

安田 その通りです。赤字は国鉄職員が作っ

たんじやない、ましてや通勤、通学に鉄道を利用する国民が作ったもんでもない。国鉄当局が、いいですか、政府や政治家、一部の金持ちの言うなりになり、国鉄を喰いちらした結果、生れたもんなんです。こりゃあ極論でもない、事実ですよ。

馬淵 国鉄は公共企業体なんだから。

安田 だから、だったらなんですか？ その尻ぬぐいを俺たちがしなきゃあならんのですか、運賃の値上げをしてまで国民に負担をおわさなきゃああかんのかな。鉄道は国民の足だなんて立派なことを言うんやったら、国がその補償をすりゃあいいんです、赤字をつくった犯人を隠しておいて、職員がなんとかせいじゃあねえ俺たちがかわいそうですよ。あんなね、東京で何をふき込まれどう教育され、マル生のおさきぼうをかついでいるんか知らないが、マル生運動とは合理化を進めていく上での手段であって、たまたま国鉄の赤字と再建の問題とをうまく利用し、生産性運動、いわゆる思想運動に結びつけただけ、赤字解消のためなんてウソもいとこ、ようするに当局に逆らはない職員を作り、組合を分断させるための思想改造運動ですよ。

馬淵 (ムウッととして) 生産性運動はそんな性質のものじゃない。純粋な精神的なものです。

安田 なるほど、すると助役さんが一生懸命やっている「再建の会」とは、その純粋な精神的な。

馬淵 もちろんです。国鉄を愛し、職場倫理を学習し、職場での人間関係を良くしている、こうというのが、この会のモットーです。

安田 おそれいりました。でもね、そんなに結構な理念とやらを持った連中が、どうして俺たちの顔を見るとコンコン小さくなって、おまけに帽子のひさしで顔を隠して歩くんでしょうね、堂々と歩きゃあいいものを、ようするところうしろめたいところがあからじゃないですか？

馬淵 あんたたちが村八的なことをするからじゃないのかね。

安田 それをまた狙ってるんじやないですか？ 当局さんは、お互い合いがみ合せとして組合内に核分裂をおこさせる。そして次の手段は新労結成。

馬淵 それは組合さんの片寄った論法じゃよ。とにかく偉い人のことは知らんが私ほね、それを利用してどうこうするつもりは

酒井、駅長と口論しながら上ってくる。あとに幹部三人もつづく。

駅長 だから悪かったと謝っているじやないかね。

酒井 そりゃあ謝りじやない。このテープとおんなじで尻尾をつかまれ、どうにもならんようになると、すまん、悪かった。あんならやることは、まったく上が上なら下も下だ。団交の場をどう思っているんで



す。(どっかと座る)

駅長 (馬淵を見て) 何をしてるんだね、下へ行きたまえ。(馬淵去る)

安田 委員長?……

酒井 例のやつだよ。アメリカさんの基地へ行く。

安田 またですか、で、こんどは何です?

酒井 例によって例のごとく、まったく中身はわかりませんとき。

安田 それでか、警察からの電話は、

駅長 ケイ……きみ。で、なんて言ってきたのかね署長は、ええ?

酒井 へえ。現場の我々には話せないが、警察とは連絡を取っているんですか。

駅長 ……

中野 ……酒井さん。それにはいろいろと事情があったんですよ。

酒井 話してほしいですな。その事情とやらを。

中野 ……それは、(横目で駅長を見る)

酒井 隠さなきゃあならんようなことですか? 駅長。

駅長 ……隠すつもりはなかったんじゃが、……君たちも知ってるだろうが最近、暴力学生、いわゆる過激的な。

電話なる。(一般用) 河合でる。

河合 (受話器をとり) 「はい駅長室。ああ福田さん。」

駅長 (すばやく河合から受話器をとり)

「駅長でございます。さきほどは(周囲を気にして)はい、はい、ええ、そちらの方への手配はもう、はい、それにまもなく発車の時間でございますし、ええ? A T Sの順法闘争の影響? ええ、まあそれは……とにかくあの列車にしましては機関区の方とも……はい。そのようにええ? 公安。それももう、はい、いやそうですか沿道をパトカーで、はい、はい、わかりました。では、よろしくお願いいたします。はいまた連絡の方を。」(切る)

駅長の側へ幹部あつまり耳うちする。

酒井 何ですか、いったいどうしたんです。

駅長 酒井君。実は君たちの方へ連絡しなかったのは、時が時だけにね、そのう、あまり騒ぎたてて事を大きくしたくなかったんだ。なにしろ大勢の客もあることだし、乗

客に変な不安を与え、混乱でもおこしたら大変だしね。

酒井 さっきの話ですが、過激な学生がどうしたんです、駅の構内へでも入り込んでるんですか?

駅長 いやいや、そんなことは無いと思うよいや、あってもらっちゃあ困るが、なにしろ今はこんな時でもあるしね、東京あたりじゃ、毎日のように暴動やら爆発があったと聞くとね、それに情報によると君たちがやろうとしている。……いや、その、なんだ、全国的に行われるという、その、あすの統一行動にそなえて、学生やら、……いや学生が、かなりあちらこちらで集会を開いて氣勢を上げていっているというし、爆弾を使

うらしいんだねえこの頃の学生は。それがこんどはどうもこの駅を狙っているとか、駅前を解放区にするんだ、とまあそんな噂が入ってね。

酒井 警察からですか。それにしてもおかし

いじゃないですか、そんな重大な情報ならそれが本当なら大変なことですよ、どうして組合の方へは知らせないんです。……あなたは、この録音の中でも我々を暴力学生と似たりよったりだと言ってますな、まさ

打合せをしてからってことですか?

駅長 とにかく時間をください。

列車の通過音。

酒井 駅長。我々の話しを聞いているんですか。

駅長 うん? ……ああ、もちろん聞いていますよ。(中野に) 連絡しときたまえ。

中野 はあ?

駅長 局と署長、……福田さんだ。

中野 は、はい。(電話をダイヤルする)

酒井 じゃあ、さきほどの続きをはじめましょうかね。(テーブルコードのスイッチを入れにかかると)

駅長 酒井君。……とにかく、まあそれは。

酒井 心苦しいんですか? もっとも、これだけはっきりとした証拠を聞かされりや

あ、今さら知らん存ぜんも通りませんからな。(きっぱりと) それじゃあ駅長。不当労働行為を全面的に認めるんですね。

酒井 ……

駅長 どうなんです。……助役さんたちはどうなんですか? ……駅長さん。

酒井 ……これについてじゃあ、すこし時間をくれんかね。

安田 あんたは、この場におよんでまだ……

酒井 (怒る安田をおさえ) なるほどね、そうですね、ここであっさり認めてしまっ

は局の方からお叱りをうける。何事も局と

河合 新聞社?

酒井 総裁が公労委の救済命令に従い、陳謝文を出したにもかかわらず、末端現場ではまだこういう悪質な不当労働行為が堂々と行われているっていうことをね。

河合 酒井さん。その、もっと、おだやかに

中野 (受話器をとり) 「中野だ。藤本君か、うん、そうか、で何事もなかったんだな、異常なくおくれずに発車したんだな。ごくろうさん。」(切る) 駅長。一二二六、異常なく発車したそうです。

駅長 ……そうか。これでほんととしたよ、こ

こさえ無事に出て行ってくれれば……とにかく、よかったです。

話し合おうじゃないかね、とにかく、な、こりゃあ君。あくまでも内輪の問題じゃないかね。そうだろう、新聞社だなんてね、もう一度、もう一度ゆっくりと話し合ってね、駅長さんそうでしょ。……駅長さん、なんとかおっしゃって下さいよ。

河合 (おろおろになっている) 委員長。この通りだ。(机の上に頭をすりつけ) な、頼む。頼むからその、それだけは待ってくれ。……な。

酒井 だめですな。今さらみつともないですよ、組合をさんさんかきまわしといて、そっちのほうが悪くなつてくると待つてくれ、頼むですか? ……まあ、後のことは上部機関と局の間で、改めて交渉しましょう。じゃあ本日の団交は、……もつとも団交らしい団交じゃなかったようですがね。(安田をうながす) ああ、それからもう一つ、明日の順法闘争、指令の変更がないかぎり、今までより一段と強化しますから、念のために。

酒井、安田、録音テープ一式もって退場  
マイク、改札の案内をはじめ。無言の

間つづく。

河合 ……駅長さん。えらいことになりました。たなあ。

駅長 (目を伏せたまま無言) ……

中野 駅長さん、なんとか手を……あれが新聞社の手に渡る前に、……でない、私たちが……

駅長 ……

山本 しかし、どうしてあれが組合の手に。河合 わたしにも、それがわからないんだ。

それ十日も前のが……

山本 ねえ首席さん。あの席にいたのは、我々以外に、現場の管理者、それに田中君。

中野 そうだ。田中が?

河合 ばかなこと言いたまえ。田中君はね、新しい組合の委員長、……(声をおとし)

委員長になってくれる男だよ。「再建の会」だって彼が現場じゃ組織してくれ。

山本 シー。用心して下さいよ、奴ら、マイクを仕掛けてるかもしれないから。

(皆あたりを探す) ないようすな。

中野 ……じゃないとすると、いったい。

河合 ……わからん。まったくわからん。

山本 まさか現場の管理者の中に。

中野 それともですな、組合が事前に、あの会合の場所をキャッチして、隠しマイクを。

河合 駅長さんの自宅だよ。

駅長 うるさい。(立ち上り、机の中から葉を出す。河合すかさず湯のみに湯をつぎ駅長に渡す、駅長のむ、湯は熱かった。……) ……ばかもの!

河合 申し訳ありません。(ポケットを探す) すばやく中野が自分のハンカチで駅長の服をふく)

駅長 (中野のハンカチをもぎりとり、自分でふく。おもむろに助役を一人づつなめるように睨む。)

河合 (駅長と目が会う) な、何です駅長さん。……私たちがうたぐつて? ……冗、冗談はよして下さいよ。

中野 ……そんな目で見ないで下さいよ。私だって、私の得にならない事なんか、やりやしませんよ。なぜ私が組合なんぞに……

山本 (進んで駅長の前に出る) 私もまったく同じで、私ではありません。信じて下さい。私の声も、あのテープに入ってるんです、声を取られているんです、被害者なんです。だから私も。

駅長 うるさい。とにかく、スバイがいることは確かなんだ。局から注意されて来たばかりなのに、(泣きべそをかいている) テープにだけは取られるなって、こともあらうにそのテープに取られるなど言ってるわしの声をテープに取られてるじゃないか。……いいか、徹底的に草の根を分けても探しだしてやるからな。

河合 私たちを信用して下さいよ。駅長さんの不利になることは、私どもにも不利になるってことです。(新聞を持って来て) これを御覧ください。今日もこのように五人処分、こんなことにはなりたくありませんからね、私どもだって。

中野 その通りです。ですからあれが新聞社の手に……

駅長 もう遅い。新聞という新聞にデカデカと書かれ、あげくのはでは、……(受話器を取り、ダイヤルをまわす、途中で思いとどまりやめる) ……局へ、どう報告すりゃあいいんだ。なにもかも録音されてしまいました、……そんなことが言えるか。だいたい君たちが不用心だから、こんなことになつてしまったんだぞ。いいか、わしになんらかのことがおこった時は、君たちも同罪

だからな。

列車の通過音。

駅長 窓をしめたまえ。

間。

河合 うん。……駅長さんどうでしょう。

この際、その組合と、取り引きと言つてはなんですか、

駅長 取り引きだと?

河合 いえその、まあ聞こえはよくないんですけど、ギブ・アンド・テイクってやつで、

ほら、このあいだの現場協議の席で、組合がしつこく要求していた、例のあれと交換条件です、新聞社への発表を。

駅長 あれ? ……あれとはなんだ。

河合 あれですよ、組合側が最後の最後まで喰いさがり、駅長さんが今後いっさい認めないってつっぱねられました、従来どおりの慣行を認めるっていう。

駅長 あれか、……

河合 そうです、あれです。時間内の入浴、組合の専従、構内への増員、それから――

駅長 ばかなことを言うな。

河合 しかしてすね、新聞にデカデカと、(駅長 ……そんな、そんなことがわしに、……)

河合 この際です。駅長さん、多少のことは目をつむっていただかないと。

中野 なるほど、さすがは首席さんだ。いやこれなら奴ごさんたちも、かならず喰いついて来ますよ。けつして損になる交換条件じゃないですからな。

河合 新聞さえおさえてしまえば、あとは局と地本の話しあい。局だって、駅長さんを見殺しには出来んはずですよ、責任の一本は局にだってあるんですからね、それにマール生の問題も、ひとところに比べれば、一応いまはおさまっていることですから、そこはそのう。

鉄道電話なる。山本かかる。

山本 (受話器をとり) 「はい駅長室です。

君か、なに? 宛名の書いてない小荷物? それはどうしたんだね、ええ? 送人の名前もない。そんな品物をなぜ受けとったんだ。なんだって? ……」

河合 もうすこし小さい声で出来ないんかね。

山本 すみません。(再び電話口で)「君は本屋の助役じゃないか、今、それどころじゃない。」……(話しつづく)

中野 駅長さん。私もいま、首席さんのおっしゃった、ギブ・アンド……その方法が一番いいんじゃないかと思いますが、なんでしたら組合の方へ私が。

河合 うん、酒井君にもう一度、来るようにって、いいんですね駅長さん。

駅長 ……

河合 駅長さん、……おねがいました。

駅長 ……君たちにまかせろ。

中野 はい。(下へかけ去る)

山本 (電話つづいて)「……ええい。こっちへ持って来たまえ。」(切る)

河合 どうしたんだね?

山本 まったくわけのわからんことを、停年近くなるとモオロクするんでしょかねえ馬淵君。(駅長に頭をさげ)どうも。

河合 馬淵君といえは駅長、彼にはちよっと、私もこのごろ手をやいているんですがね。

まあ一生懸命に生産性向上運動を拡げてくれること自体は結構なことなんですが、こ

ういっちゃあなんですが、彼は実に純粋というか誠実といった方がいいのか、要するに情勢に対しての適応性が無いんですな。あれじゃあ組合の、攻撃のいいのですからね。駅長さんの方からもひとこと。

山本 そうなんです、私なんか年中一緒にいるもんでよく言うんですが、先日、(ノックの音)馬淵君かね?

馬淵 (外で)はい私です。

山本 あのう、ちよいといいでしょうか?

(駅長うなずく)入りたまえ。

馬淵 (ダンボール箱を持って入ってくる)すみません。(山本に)これなんです、

いくら送り状を探しても記帳されてないんです。それに担当者に加納君も、まったく覚えがないと言ってます、ですから一応、助役さんに立合っていたいた上です。すね。

山本 わかったから開けてみたまえ、外でだよ。

馬淵 はい。

駅長 どうしたんだ。

山本 はい。本屋の小荷物の中に、あの箱が入っていたと言ってます。

駅長 うむ?

山本 それがまた妙なんです、發送人も宛名も住所も何も書いてないというんですからね。

馬淵 どうも気持ちが悪くなって、こんな荷物を扱ったのはじめてですから。

山本 いいから、いいから、開けたまえ。駅長 待て。……いつからあったんだ?

馬淵 はい。はつきりとは覚えておりませんが、午前中に小荷物の仕訳をした時には無かったと言っていましたから、おそらく午後からだろうと、それが他の小荷物と一緒に受付けの窓口の所に置かれていたんです。

駅長 誰れも扱った者はいないんか?

馬淵 はい。皆もそう言いますし、私もまったく心当りが無いんで。

河合 おかしいじゃないかね、誰れも知らないものが、ひとりで小荷物の中に混り込んでるなんて、まさか天から落ちて来たわけでもあるまいに、乗客の忘れ物を一緒にしたのと違うかね。

馬淵 そんなことは、

河合 そうに決つるとよ、交番へでも持って行きたまえ。

駅長 じつと何かを考えている。

山本 しかし、小荷物の中にあつたという以上は、駅としましても一応、……

河合 好きなようにしたまえ。

馬淵 ……(迷っていたが)それじゃ。(開けようとする)

駅長 待て。馬淵君、本当に誰れも知らないんだな。

馬淵 ……はい。

駅長 本屋を空にしたことはなかったらうな。

馬淵 ……はい。

駅長 うーん。箱の中、なにか音がしないかね。

馬淵 はあ?(箱に耳を近づける)いいえ、何も聞えませんが。

駅長 もっと、しっかりと聞いてみる、耳をつけて。(馬淵、箱を振る)ばか、振るやつがあるか、もっと静かに振らんだ。……

そうだ、静かあに、心をおちつけてえ、呼吸を乱すなよ、……どうだ。音がするだらう?

……するだらう音が、よく聞くんだぞ……

馬淵 (一生懸命に聞いている)はい。……そう言われれば、なんか、人の声のような、

駅長 ばか、もっとしっかりと聞いてみる。……どうだ。

馬淵 ……そうです、音がしているような、そんな気がします。

駅長 そうだらう。それで重さは?

馬淵 やや重いです。

駅長 うん。……間違いない。

馬淵 はあ?

駅長 (大声で)時限爆弾だ。

馬淵 ばくだん? ……(持っていた箱を投げだし室の隅に小さくなる)

全員ふるえあがってしまい、腰がぬけた様。静かな間。

駅長 過激派の奴らが仕組んだ、ば、ばくだんだ。

河合 ……駅長さん。……(言葉にならない)

馬淵 ……いつ、……いつ、ドカンといくんです。……

山本 私はないにも、……殺されるようなことはやらないのに、……

だ。公安を呼べ。……警察だ。……自衛隊を呼ぶんだ。

河合 ナンマンガブ、ナンマンガブ、……

駅長 はやく、早く電話をしないか、いつ、いつ爆発するか、わからんのだぞ。

河合 私はだめです。あ、足が動かないんです。

中野、息をきらして入ってくる。

中野 駅長さん。組合の事務所には誰れもいません。ひよっとするともう新聞社の方へ……どかしさんですか駅長さん。

……首席さん?

駅長 (口だけ動き、声が出ない)……

中野 はあ? なんですか?

河合 ば、ばくだん。

駅長 公安だ、警察だ、自衛隊を呼べ。

中野 自衛隊? ちがうですよ、新聞社ですよ。もうあのテープを持って行ったかもしれんのですよ。どおしまししょうそんなことにもなつたら。

駅長 テ、テープどころじゃない。

河合 こ、腰がたたん、手を。

山本 は、はこ、箱。

中野 箱？この箱がどおしたんだ。(乱暴に拾い上げる)

四人とも奇声を発し、床にふせる。

中野 (箱を見て) ああ？……これは……

河合 さわっちゃいかん。あっちへ持って行くんだ。

中野 ……この箱がどうしたというんです？

河合 爆弾が仕掛けられているんだ、早く外へ持って行くんだ。

中野 爆弾？……いやこれは。

駅長 ばか者。いつ爆発するかわからんのだぞ、早く、早く外へするんだ。

中野 冗談いってる場合じゃないですよ駅長さん。あのタイプ(皆まだふるえている)

この箱は爆弾なんかじゃないです、私の私物入れですよ。

皆の目が箱を持っている中野に集中する。

駅長 なに？……私物入れたと。

山本 助役さん。……それ本当に爆発しないんですか？ 本当に助役さんのもんなん

すか。

中野 あたりまえだ。どうしてこれがこんな所にあるんだ。

鉄道電話なる。誰れも出ない。

河合 爆弾じゃなかったのか。(おもむろに受話器を取る)「はい駅長室です。ええ

局？はい、駅長さん。局の能力開発課からです。」

駅長 (聞こえない) それじゃあ、いったい君の私物入れがどうして小荷物の中に入っているんだ。

河合 駅長さん。局の能力開発課から。

駅長 それどころじゃない。

中野 小荷物の中？ そんなはずはありません。私はちゃんと下の自分のロッカーの上に置いてあったんですから。……小荷物の中ですって？(もう一度箱を見る) それじゃあ私のと違うんかな？……それにしても良く似ている箱だ。

河合 駅長さん。

駅長 うるさいな。(中野に) そんなライメンの箱、どこにでもゴロゴロしてるんだぞ。

中野 それじゃあ中を調べてみましょか。

駅長 ばか、よさんか。(河合から受話器をひたくり自分がでる)「今ですわ駅に爆弾が持ち込まれてるんです。マル生、いや再建の会のことでしたら、あとに。はい(切る)。(中野に)これがお前のだという証拠はあるのか、もし、もしお前のでなかつたらどうするわしの言うように本当に爆弾だったら開けたとたんにおしまいだぞ。奴らは巧妙な手を使うんだ、なんでもないようなものにみせかけて、それが実はい

山本 そうだ、きつとそうだ。どこにでもあ

る箱を、わざと使ってるんだ。

中野 そういわれれば、……なんとなく騒ぎるようですね。……不安になってくる)

駅長 それみる。(外へ出ようとするが河合につかまり出られない)はなせ。はなさんか、客を、乗客を安全な所へ、こら、はなせというのに。

河合 駅長さん、私もつれていって下さい、腰が。……

我れ先にと押し問答がつづく。

中野、箱を持ったままウロウロしている。

あわてて箱を窓から外へ投げようとするが、下には乗客が列車を待っている。

中野 (外へ向って) みなさんどいて下さい。そこをどくんだ。ホームから離れる、離れるんだ。爆弾なんだぞ！

マイクの声 「おまたせいたしました。まもなく下り線に列車が入ります。列車が入りますから御注意ください。」

中野 ああ？……列車が入る。どおすりゃあいいんだ、……ああ？……もうだめだ。

駅長、河合、山本、もうそこにはいない。片隅に放心状態の馬淵が足を投げだし座っている。

中野 (箱を持ったまま机の側へくずれるようにすくむ、……と、机の底のマイクが目に入る)……ああ？……なんだこりゃあ？……こりゃあ？……(マイクをもぎとる)……なんだこりゃあ？……まてよ。……こりゃあひよっとすると、いま流行の小型マイク？……それがどうしてこんな所に、……そうか、らん。そうだ、きつとそうだ。そ

れにこの訳のわからん箱、つじつまがあうぞ、よし。(箱のヒモをとく)

マイクの声 (早口で駅長の声)「お客様にお知らせします。当、当駅にたいたいま、マル生が持ち込まれました。……いや失礼いたしました。爆弾が持ち込まれました。ど、どうか早く、ホームから遠くへ逃げて下さい。まもなく爆発するおそれがあります」

中野 (箱を開けると中からインスタントラーメンが出てくる)ああ？……(全部ラーメンばかり)

外 騒がしくなる。

マイクの声くり返す。

中野 (笑い出す)……これが爆弾。は、はは、これが爆弾。(笑いこける)さんさん

気をもませやがって、爆弾がインスタントラーメン。まさにこりゃあ原子爆弾だ。は、は、は……

馬淵 (気がつき)なに？ 原子爆弾(こ

んどは本当に気を失う)

外、いちだんと騒がしくなる。中野の笑い、マイクの声、交叉するなかでF・O。

——この作品は国鉄短篇ドラマ集に発表したものに手を加え、国鉄劇作グループに了解を得て再発表いたします。

(作者)

千代ヶ崎海岸・埋め立て反対のための詩劇

# 潮風が吹きあげて (二幕)

小鹿利四郎

意工夫する

構成 —— 二幕・四場

第一幕

序曲 // 鉄柵のある所 //

第一場 // 行きつくまで //

第二場 // 少年群像 //

第二幕

第三場 // 人間対話 //

第四場 // そこにはあった //

終曲 // 汐風が吹きあげて //

第一幕

序曲 // 鉄柵のある所 //

少年院の裏門の鉄柵を背景にした岩壁の上に、暮明の光りの中に作者の立ち姿、スポットの中に浮かびでてくる。

暮れかかる残照。眼前(観客席)に砕けちる汐の飛沫、海面を吹き渡ってくる風の音。

—— たっぶり間——暮れてゆく時の経過

作者の声 「わたしは、……なぜ、こんな所

## 序言

私にこの創作を為さしめた要素が三つあります。先ず、神奈川県立青少年センターホールの、田村倫彦・作——潮風が吹きあげて——(アマチュア・高校演劇脚本集・第二集・加藤衛篤)を読ませていただいたこと。次に、地方新聞・新かながわの紙上(一九七二・一・二日付)で立教大学の岡本勇先生の投稿記事を拝見したこと。最後に、九里浜少年院の藤正健先生から、ご懇切なる御案内とお話を給われたこと。ここに心からの御礼を申しあげます。

——一九七二・二・二九・作者敬白——

## 人物

効果 スライド(少年院と千代ヶ崎に関するもののみをカラーにするもよい)は、極わめてリアルな実在感を持てるよう創

音楽 主題のメロデーとそのアレンジ曲  
装置 (スライド映写用のホリゾン幕を考慮して)  
少年院・裏門の鉄柵  
少年院・本館の応接間

に立っているのか……。なぜ、こんな所に

作者 (独白) ……寒いノ(襟を立てる)

……水平線は、風の中に消えようとしている……。(われにかえって辺りをうかがう) さっきまでの、深い紺碧の水の面は、白い飛沫だけを残して……闇の深みに消えかかりはじめた……。

海だ。……この地球の大半を被っている厚いペール……。水と大気と……、いま、それがひとつになって、わたしを包みこもうとしている……。

若者の声「知らねえよノ……関係ねえよノ」

作者、声の方へ視線をさぐる——風・波の怒号——

なおも声「知らねえよノ ハッハ、おれたちにや関係ねえよノ」

作者 ……かんけないない……ノ(ことばを吟味するように)かんけないない……!?

主題のメロデーが、かすかに咽ぶように

海面を伝わって——

作者 ……あの歌だ……聞こえるノ あんた……

作者、懸命に聞きとろうとする——をさへざるように、ある無数の声々のエコー「かんけないないノ!」が、急激に高まって、——すべての音が急速に停止する。深い寂間。

作者 ……(つぶやき)わたしだっただけかんけいはないんだノ(辺りを見まわし、全くの空間に絶え入るように、だがはつきりと)わたしだっただけ関係はない……だが……ノ

淡いとぼりの中に、鋏鋏を持って仕事をしている三人の少年群の影が、鉄柵の向うに浮かびでる。

作者、おすおす鉄柵に寄ろうとしてひるむが——

作者 こんなには……君たち……こんなに

ふりむきもせずに仕事を続ける少年像に主題のメロデーが重なって——対置する

作者 ……その歌だノ その歌なんだよ。君たち、聞こえるだろう、ほら……ノ

かすかに汐風が音とともに吹きあげてくる。鋏鋏を投げ捨て、それぞれに腰をおろす少年像に——やや力を得て——

作者 ……そうだ、汐風の音だよ……聞こえるね。その君の坐っている大地の上を、被い寄せてくる水の音だよ、聞こえるねノ

沈思しているそれぞれの少年像——

作者 ……(何者かに向けて)わたしはここまで歩いてきた……なんのためにでもないノ たしかになんの関係もない……君たちともだ……ノ

……なるほど……(鉄柵を仰いで)「少年院ノ」……この鉄柵というやつの前に立つと……、ここは、わたしの過ぎこし歩きつづけてきた——地の果てのような

気がする……。すべての関係から離れてしまつた……。文字どおりかんけない——はっは、わたしはむしろそれを求めに来たのかもしれない、ここまで……

……そして、その向うに君らを見たんだ……地の果て、海の果て、山の果て……ここはそういう所かも……

……（あることに気付いて）そうだよ、だからわたしは、ここまで来たんだ——見知らぬ君らと見知らぬわたしと——きつとあるほんとうの話ができないものかと……

主題のメロデーが高まつてくる——間——

作者 ……よかつた！……（歌いあげるように）わたしの行きつく所、そこにはきつと柵がある。入ることの許されない柵がある。だから、わたしは、その柵を越えてしまった君ら……（と切れて一息に）そうそこに住む君らと……そうなんだよ君ら君らでなければいけないんだよ……

また風と波の音がひととき強まる。

作者 ……わたしは、少し歩き疲れたようだ

文化財の宝庫「千代ヶ崎海岸」と、説明がきかしてあります。

……まあ、いわば、近ごろ毎日のように新聞紙上に見られる——自然環境と文化財保護に関する——大学の考古学教授の紹介記事です……。もちろん、わたしは、ご覧のとおり、この道の学識経験者でもなければマニアでもありません。ただ、こんなわたしをして……（と切れて）いや、その前に、わたしの説明をさせていただきますと……、（ふと自失してつぶやく）「じりつしんけい失調症」って、病名をご存じですか？ノイローゼ……の一種らしく……家内も同僚も……どうも、こういうわたしを特別視しているらしく……、とにかくわたしは今年で、停年間ぎわの五十七才、大正四年生まれ——人並に軍隊の体験もあり、肺をわずらったおかげで、死なずに内地に送られて、傷痍軍人の身分で片肺を除去し、敗戦後、どうやらやっつと、区役所の戸籍係りの身分で生きながらえてきた——国民のひとりです……。

……かたわら、へたな詩の創作などをかきちらしたりして……、（また、ふと自失して）……いやなことばです——いい年をし

……。（明るげに）だってそうだろう。君らより、ここにくるまで大分遠廻りしてきたからさ。はっは、しかし君らは少し早過ぎたぞ——年が若いくせに、横着だぞ君らは！

……そう、だれが君らをここに追いやったのか？（じつと耳をすまして風と波の音に聞き入る）……それを問うのは、今は、……、そう、この天地に響き合う風と波……、そして、ここに住む君たち自身だけだ……。（と切れて）……しかし……、この響き合う——土と水の——この問いかけを、失ってしまったわたしたちのすべてなんだ……

激しい自然の怒号——

ひとりの少年は、ごろりと仰臥し、ひとりの少年は鍼を思い切り打ちこみ、ひとりの少年は足下の小石を思い切り海に投げる。

一瞬の間をおいて、ある無数の声々のエコー「かんけいなくくく」が高まり、作者だけを残して暗転——すべての音も消える。

て、ノイローゼだなんて……

……（新聞紙に気づき、力を得て）ともかく、こんなわたしをして、はるばる、それこそはるばるといった気持で、ここまですべて動かしてくれたものは、この記事の中のこんなひとことと文章だったので——読みあげます——

（あせりを押さえて）  
「しかし、この千代ヶ崎の問題は、たんに文化財の破壊や保存といったことがらのみに終始する単純なものではない。……この海域埋め立て計画が、表面化した時、まず最初に……（思わず力を込めて）そして強硬に反対の態度をつらぬいたのは、そこにある千代ヶ崎少年院の職員たちであった……」（——やや間——）……（つぶやく）「千代ヶ崎少年院……」

作者、むしろ嬉しげな表情で立っておられ、それにかぶせて、作者の朗読する声が効果で流される。

作者の声 「かれらにとって、緑の山が削られ、美しい海が失われるということは、過ちを犯した少年たちを、健全な人間として

作者 ……（茫然と）わたしは……、なぜこんな所に立っているのか……、（と切れて怒ったように）……そうだよ、関係はないんだ……、だから、わたしはここへ来たんだよ……（静かに溶融）

第一場 // 行きつくまで //

舞台の袖から作者登場、観客への語りかけ。

作者 ……（一片の新聞紙を手に、おずおずと、しかし、ひたむきに）あの……、……ひと月程前でした。わたしは、この新聞を手にしたんです。よく地方にある小さな政治新聞です——「新かながわ」。時々わたしに送ってよこすんです。日付は……千九百七十二年一月二日づけ——何気なく開いたトップの見出し——にさされて、目を通した記事の一部が、わたしを、今日、ここに歩を運ばせることになったのです。……（紙上の見出し文を読みあげる）「保護運動に新たな発展——千代ヶ崎遺跡と開発」ノ……そして一葉の海浜の写真が添えてあって、「破壊されようとしている

更生させる教育施設の、その教育環境が破壊されることであり、自分たちの任務に任せて絶対許すことができなかったからである……」

暗転——間——千代ヶ崎海岸の位置を明示した三浦半島のスライド。

作者 「……（電話器を耳にして、平身低頭の態で）はいはい。見ず知らずの、わたしの様な突然のお願いをお聞き入れくださいまして、まことに申しわけありません……はいはい……二月一日、火曜日がよろしいですね。はいはい、午後一時から……はあ、けっこうでございます。それでは院内を見せていただきます。それから……、海岸の方を……はあ、ありがとうございます。……はい、その節は、なにぶんともよろしく……ごめんくださいまし……」（緊張のあと茫然として）わたしは飛び立つ思いでした。……その日……わたしは、勤務先の上司に、休暇願いを出したんです……

スポットが消えて地図のスライドのみ。

作者の声 「……一月の気温は低かった

が、幸いにも小春の空ともいえる日和だった——わたしは、遠足に行く小学生のように、横浜駅で、買った弁当をショールダーバックにつめた。

(駅構内のスピーカーなどの交錯音の流れ——)

……毎朝毎夕の、わたしの通勤で見馴れたラッシュの駅構内は、心なしか閑散としていて……

(スライドの前を、上手よりゆっくりと作者の黒い姿が歩を進めて、作者の効果の音が生まれる)

作者 ……わたしに、ふと、うしろめたい影がよぎった……  
……わたしが、……この三百六十五日、毎日の定められた勤務の以外に……、今、わたしは……ある何かをしかそうとして……  
……それはなんだ……

ある無数の声々のニコ！。

作者 ……そうだ。……かんけいの無いこと、少くとも、わたしにとっても、まったく関係のないことに向かって……わたしは

……

やや間——駅の雑踏音——。舞台の一隅にサスが一条たつ——同時にすべての音が消える——ゆっくりと、サスの前に立つ作者のうしろ姿——

作者 ……九里浜駅ノ……(再び言う)九里浜駅ですノ

やや間——きつぷを手にして、サスの中に、立ちすくむ作者……

作者の声 「……これは、わたしの幻覚であつたのかもしれないノ わたしに、このきつぷをぬくとつき出した——その手の持ち主の、小さな窓の向う側の、制服の人の姿が……ノ それからのしばらくの間、わたしの胸中にひっかかっていた……」

やや間。——車の走るリズムミカルな響き——に合わせて

作者 ……(吐きだすようなつぶやきで)……やりきれない顔ノ

……生きていけない顔ノ  
……仕事がいやでしようがない顔ノ

やや間——リズム音が、徐々に消えて

作者の声 「わたしは、久里浜駅に降り立つた……」

作者、ゆっくりと去る。急激な駅前の雑音——コーンシヤルなどのごっちゃな狂奏曲など——

作者の声 「駅前広場……ノ 原色と不協和音が身勝手にがりたてている——そのくせ、妙に白けた風光の中で——わたしの神経は硬直しはじめる……。……どうしよう？ ……わたしがノイローゼノパス……それともタクシ……ノ

着飾った若者——擁する男女の二人——スポットに出る。

若者の男 (突然の見幕で)おろノ おれたちのいるのがわかんねえのかようノ まごまごするない——乗るのか乗らねえのかいノ

……なあに、少年院？ ……へっ、そんなの知らねえな……(女に笑いかけて)はっは、おれたちにゃ関係ねえよノ(消えて、ボタンと車のドアのしまる音で走り去る)

やや間——狂躁音

作者の声 「いつの間にか、わたしはふらふらと歩きはじめていた——それこそあてどなく——きつぷと行きつくであるう——その見知らぬ所を、漠然と期待しながら……」

スライド——駅前の掲示板(市内案内図)

作者の声 「広い堀り割り河に突き当たった。動ずんだキョウチクトウの植えこみが続いて——バス停のポールには、自衛隊前と書いてあった——その間から、釣り用の貸し舟が密集している河の面が見えた……。それこそ関係ないと私は思っていた。

その植えこみに添って、河口の方向にバス道をたどっていた。  
……わたしの行きつく所——それはわ

たしの見知らぬ所——わたしは追われるように……わたしの前方の空の明るさに……海をまさぐっていた……。  
……海は、たしかにあった……。  
(スライド——工場群で囲まれた九里浜海岸。)  
……その河口の橋のたもとで、わたしはしばらく立っていた……。  
……道をたずねなければならぬ……だれに……？」

スポットに、腰のまがった昔風の老婆。

老婆 ……ほら、左の方の岬が千代ヶ崎だねノ 工場の建物で、こっからは見えないがね……はあ？少年院かねノ 少年院はその入口にあつけど……そっからは海岸には入られねえだよ……。  
……はえノ あの出っぱりは、千代ヶ崎だがね、もう海岸はあんめえよ——見なせえ、いっぺえ煙突が立って、発電所の工場だと……ともかくよ、今日見てえな空の見える日は珍しだな。

……ノ(じつと海を凝視している)まったく、もう、これは海じゃねえな、……な

あ、だんなさん、とめられねえもんかね、もうノ……ほんのこの四、五年で……この先はいったいどうなることやら……ノ どっこいしょ。(腰をおろす)  
はえ、あの白いつけえのかね、カンズメ工場——ほらこの匂い、馴れちゃうとわかんねえけど……。……もう、この海は死んでるだよ……ノ

……お客さんは、なんでまた千代ヶ崎へ……この冬空に……？ あそこは、昔はいい海だっただよノ 獲ってもとつても貝がいなくならねえ……汐が特別なんだよ……久しく行つてねえが……、この四月にヤ埋め立てられるって話だけ……。おらあ、もう、この世にヤ未練はねえすよ、生きてりやあ、いやなこと、また聞かなくちゃなんめえし……ノ

……(腰をあげて)はえ、少年院にも行きなざるだかノ(さり気なく)……やれやれ、そんじゃあ……ノ……歩いておいでかね、男衆の足じゃ三十分はかかるめえよ——この道を、まっすぐに行きなさればいいだよ。……お気をつけなすって、ジャリトラックが激しいでな、あの少年院の入口の海岸に、ジャリ船のおろし場が出来た

ってな……まったく、わしらの歩く道は、もうねえだよ……はい、ごめんなすって……ノ（しばらく見送っていたがとことと消え去る）

スライド消えて、老婆の去った跡の光の輪のみ空白——間——しばらく、車の通過音が激しく拡大されて——

作者の声 「……見知らぬ、ひとりの老婆のことばの数々は、いったいなんであつたらう……わたしの歩く平坦な道路にはもうここには人の姿はなかった。両側にはただ白っぽいコンクリートの工場の塀がつづいて……その空白の数十分……」

間断ない車の通過音が単調に連続して——作者が光の中に歩み出る——

作者 ……わたしの視界は閉ざされていた——頭上に被う灰色の空間と、幾何線上に続く白っぽい空間の果てに、かすかに望めるむき肌の山の背……ノ（歩き出そうとして）

あげる。

作者 ……ノ（にんげは……！）……おい、どこにいる？ ……どこにもいないのか……ノ

押しつぶすように激しいトラックの通過音——突如として

若者の声 「知らねえね！ ハッハ関係ねえよ！」

以後、間断なき車の通過音、一段と激しく——作者、よろめき、避け——

作者 ……ノ（避けつつ）き、きさまら……おれを殺さなかったただけだぞ……（やっと立ち直ったの呻きで）……きさまら……気違いのように走りまわる鉄のかたまりめノきさまらの正体は……いったい何者だノ

通過音とある声々のエコーの激しい高まりの中の——作者の抗う立ち姿——固定して、消えて……やや間の闇の空間、音も消えて……

わたしは呼吸してはいけなかったノ……たたく受身だった。ほんちうされていたら……すべての思考が、きれぎれに叩きつけられていた——わたしはくたきた。……唯、わたしに残されていた感覚は、……ここまで人間をして、ほかあつかいにされてしまったという怒りかすが——わたしの頭のずいを、きりきりとしめつけていただけだ……ノ

（激しい通過音——咳き込むように跣まる——あえぎで）……わたしを……今……ささえているものは……この怒りだけだ……ノ

作者の声 「……これは、限らない時間の無視だノ……限らない空間の無視だ……ノ（うつろに）ハッハ……なるほど……とうとう人間どもは、自らその手で、マンガの世界に……入りこんでしまつたらしい……ハッハノハッハ……（笑いがエコーになって——）」

ある声々のエコー「かんげえないくくく」と重なる——高潮して——すべての音、ピタリと止まる。

スライド——千代ヶ崎少年院・職員寮の入口の門札——

作者の声 「……ノ、やっと、わたしの前に……人間の住む家があった……。それはある意志を持った集団の家並みだった……ノ」

（スライド——職員寮の全景・その（一）——道順に添って以下は移動する）  
わびしい……ノ、むかし、少年の頃に見たことのある——それは、わたしにとつて非常に身近で、……遠い……ある部落の絵葉がきに似ていた……  
（スライド——全景・その（二）・その（三）へゆっくりと移動——）

……ノ（頷うように）負しく、……古びて……質実で、……風化して、寄り合つて……冬、冬のやわらかい日射した溶けて、しっとりした古い土肌の上に……、明るい日溜りの雑木を背負つて……ノ、まるで置き忘れた里のようにひっそりと静まっていた……。」

……やや間。ゆっくりと、スライド——少年院の正門の大写し——にかわる。

作者、頭を垂れたまま時の経過に堪えているノ……

作者の声 （思索の中で）「……わたしの

足の下に……長い下水溝がつづいている……音なく流れている水——沈殿物——その色は、全く見知らない色だノ

……わたしは、やがて、ここに落ちるかもしれない……いや、これは水ではない——ある液体——液体づけ……ノ、わたしの死骸は、プラスチックの裸人形のようになり、もう、腐ることができない——眼玉は眼玉、皮膚は皮膚、髪の毛、骨——ばらばらな物体となつて……そのまま、永遠に、すべての時間と意味を失つて……

……そうだ……だからわたしの死骸は焼かねばならない、塵芥処理場で焼かねばならない……そう……人間はやっぱり焼かねばいけないのだ。業火の焔をくぐらなければ……人間だけは……も早生物であることを拒絶したノ、失格したノ……そう、生死の倫理を……安息を喪失したのだ……ノ——

——深い音のない世界——気づいて頭を

……やや間。主題のメロデーがかすかに流れて、スライド——正門から見た少年院の全景（カラー）になる。

作者、登場。

作者 ……わたしは行きついたようだ……ノ……そこにはあった——隔絶された世界がノ、だが、わたしの無断で入ることの出来ない世界が……。しかし、それが故に——この社会の破壊と邪悪から、厳しく保護されていた——たしかに、わたしの望む、行きつく所……ノ（とぎれて、やや間）……「千代ヶ崎・少年院……ノ」

……わたしは初めて見る——この見知らぬ世界と——、なんとしても関係づけねばならなかった……。

スライド——正面玄関前の前庭  
スライド——高い段を持つ正面玄関  
作者 ……ノ（はつきりと）それは、今のわたしの、唯ひとつの意志であったから……

作者、しっかりした足どりで去る。かわ



って少年院の指導員、スライドの絵の前に立つ——スポット——（黒子を現代風にした服装）

指導員 ……お待ちしていました。（静かに観客に向かって頭をさげる。）

指導員のみ残して、スライド、ゆっくりと溶暗。

## 第二場 // 少年群像 //

指導員、舞台前方に歩み出て停止。同時に、後方に、各三人・三グループの少年像のシルネットが浮かび出る——立ち姿で、出来るだけ影のみで容貌を見せない。

メロデー（主題曲をアレンジしたもの）が小さく揺曳して、それにつれて、少年像が、以後の——「少年院の生活を表徴した」——意味のある群像に移り変わってゆく。

背景のスライド——「少年院・各所の部分」が、群像の移り変わりを指示する。（註）スライドの内容は、大別して三つ

のパート。  
指導員は、群像の中を、自由に動きながらシユプレッヒ用の語りをする。

### || 指導員のシユプレッヒ ||

（スライドその(一)——生活と作業

この子たちも、わたしも、生きていますから……  
だから、わたしたちは、ここに住んでいます……  
窓のある居間と、花のある庭と……

ここには、わたしたちのための、くらしがあります……  
炊事場、洗濯場、食堂、便所……  
だから、わたしたちのための、しごとがあります……

各種の作業場、農園と畜舎と……  
だから、ここには、わたしたちのための余暇があります……  
集会場と、図書室と、そして丘と海のある大地と……

それは、わたしたちのための時間であり……、月日であり……、朝のつどい、夜のいこいであり……

ここは、そのための、わたしたちの、くらしの場所であり……  
（スライドその(二)——資料・統計表のある部分——）

時にわたしたちは、猛烈に憎み合います……  
……  
そしてまた、執ように愛し合います……

それは、わたしたちの、生きた歴史があるからです……  
その歴史を失くしたら、わたしたちは、明日を望めないからです……  
それは、消し去ることのできない、今日歴史でもあるからです……

……だから、憎み、愛すのです……  
（スライドその(三)風土と自然環境——）  
大気の日射しは、わたしたちを包みま……  
……  
風雪の怒りは、わたしたちを目醒ませます……

みどりの、四季のよそおいは、わたしたちの歌声を、要求します……  
ここに住む、無数の小動物は、わたしたちの話しかけを、強請します……  
そして、この土は、わたしたちと共に、

思考してくれます……

……ここに……、生きるということ……

そして……海と、波は……この現実を問いかけます……  
……否定か……肯定か……

そして……山と、風は……、未来を、問いかけます……  
……希望か……絶望か……

そして……、それらの……、そのすべてが……、今、わたしたちの……、ここに、生きるということ……

スライド——「裏岩壁の鉄柵の門」で終る（そのまま固定）

同時に、指導員・少年群像も固定——  
作者、登場して——凝視——。

メロデーが、風と波の音に変わり——少年群像の各自の音が、風に飛び散るように響いてくる。だが、まだその声は、作者——われわれ——に向けての、生まの声にはなっていない（録音による）

### 少年群像（九人）の各自の声

『……おれたちは、』

……ここに追いこまれた！

……ここより逃げられない！

……ここで、生きねばならない！

……生きるしかない！

……生きる！

……生きる！

……ここで！

……ここですか！

波と風の音のみ——間——

作者 ……（自問自答に似てのつぶやき）……

……たしかにそうだ……  
……君らは、……君

……だが……、君が、今、ここに居るといふこと——そこから、君の主張は、あつて

いいはずだ——。そうだよ、そうなんだよ！  
この山はおれのものだ、この海はおれのものだ——それ以外にはないんだよ、何もないんだよ……

波と風の音、強まり——作者を残して、——スライド消え、——幕——。

## 第二幕

### 第三景 // 人間対話 //

舞台の三分の一の広さに、下手——少年院本館内の応接間。

上手の、残りの広さに——視聴覚教室風の暗室——部屋中央には、スライド用のスクリーンが掲げられてある。

つまり、舞台は、明治風の天井の高い白壁に囲まれた木造の応接間と、暗幕に囲まれた視聴覚室とで、白と黒の空間に二分されている。

応接間——正面の壁面に、全景地図と少年院を中心とした航空写真（あるいは地図）が掲げられてあり、古風な卓を囲んで、これも古風な長椅子と一人用の椅子が置かれてある。下手の奥まった一隅には、がっしりした木製の彫り飾りのついた両開きの大きな扉。

それら、室内のふん囲気に包まれて、緊張とあるくつろぎで、作者がひとりぼつ

んと長椅子にかけている——待っている風——卓上に、茶卓と湯のみ茶わん二組作者、手の中の名札を再度ながめ、読みあげる「法務官——教務主任……」。

ノックの音と、扉の把手を廻らす音で、主任教官が入ってくる——りっばな風格を備えて——たえず微笑をふくみ、なおかつ礼節がある。

以降、ふたりの会話の進行内容にしたがい、隣室のスクリーンには、無表情にスライドが映写される。

主任 ……(扉をしめながら) どうもお待たせしました。職員の手合わせが長びいたもので……

作者 いいえ……、(立ちあがって) あまりに静かなもので、すっかり……

主任 はっは、古いがりっばな建物でしよう……(いたすらっぽく見まわして) この本館の部屋は、將軍の部屋だったのです。

作者 將軍?  
主任 (故意に大仰に) 大日本帝國海軍、對潛学校々長……はっは、閣下と称ばれる方

ですな!  
作者 はあ、……道理で、天井も高く……なにか威厳があります。……(心からの感慨で) なるほど……

主任 ……(相手の反応をそれとなく吟味しながら) かつての、軍国日本の、歴史の跡です。ここは……

作者 ……(自分の感慨のただけで) それ、今は……少年たちの……

主任 はっは、こういう史実は、案外知られておりませんです。……現在、ご存じの方は、ほとんどおられないでしょう。

作者 ……! あの、ここに入っている玄関口の巾広い階段……

主任 (相手人物の識見に、安堵の微笑で) お気づきになられましたか……

作者 え、何か妙な……

主任 (嬉し気に) わたくしは、今もって、毎朝出勤するたびに……それを知らされるんです……

作者 はあ?  
主任 (無邪気に) いや、……その……、軍国日本をです……

外して椅子に寄る)……腰にかけた軍刀と、……あの長靴とか言いましたね、歩足正しい靴音の響きが聞こえるようです、はっは……!

作者 ……なるほど……!(感慨をもって相手を視ている——やや間——)

主任 ……!(気づいて) とんでもないことをお聞かせしまして、はっは、……でも……(やや改まって) わたくしは、ここにおいでなられた方——子供たちにもそうですが——、先ずこの、話からいたしますので……(くつろいで) とにかく、ここが昔、なんであったにせよ、今はわたくしたちの住家なのですから……。(相手の立っているのに気づき) まあ、どうぞ! ……(改まって、立って座をすする)

作者 はあ……(受けて座す)

主任 ……いかがでしたか? 何か得ることもございましたか。

作者 (改まって) いろいろと見せていただいてありがとうございます!

主任 もっとごゆっくり、ご覧いただきたかったですか……

作者 いいえ、もう……(口ごもって)……教われたような気持です……

主任 ……ほう?(興味を持って)

作者 ……いい顔をしてますね!

主任 ……?

作者 この少年たちの顔つきです……。先程、自習室で挨拶されました……

主任 そうですか……(ほほえむ)

作者 こんなことを申しあげてよいかどうか……とにかくほっとしました……

主任 はあ?

作者 ……(ややあせって) わたしの予期していたとおりでした。だからわたしは……

主任 (ある納得で) はっはそうでしょう。こういう所は暗いものだと思われていたのでは……どなたもそう言われます。それが案外の期待はずれで……

作者 ……(訥々と) いいえ、わたしは、わたしの場合は、むしろ……

主任 ほう……?

作者 どう申したらよいか、失礼かも知れませんが……(あとは一氣に) わたしはここに求めにきたのです……。そして予期したとおりでしたので……(嬉しげに頭をさげら) どうも……

主任 ……はあ、  
作者 ……なぜ、もっと早く来なかったもの

かと……(上気している) 残念なくらいです! ここには、少くともわたしに感えてくれる世界がありました——そうですね……(ことばを探して) ひとの住むことのできる社会とでも……

主任 (おおらかに) はあ、……それは、またどうも……(嬉し気に頭をさげる)

作者 はい……!

主任 (改めて興味に索かれ) ……ですが、……なんでまた、こんな、よりによって……?

作者 はい。ですが……、今のわたしにとっ

ては、そうとしか言えませんので……

主任 ……ふむ!

作者 ……!

スライド——少年院の内門——

主任 ……(思考をめぐらして、ゆったりりと) あの子らにとって……ここは、……仮りすまいです……それも……、一年という区切りつぎの——長期の子もいますけど——彼らの、これからの長い人生のうちの僅かなものです。

作者 ……かきのすまい!

主任 ……!

主任 ……!

しかし、わたくしの申しあげる「仮りのすまい」とは、たとえ僅かな仮りのものでもありまして、彼らの、そのすまいであるということに、この経営の基本が置かれていふこと……

むろん、ご覧になりましたように、ここを出てからの更生のための訓練をいたしますが……(とぎれて) しかし、それよりも大切なことは、いうなれば、今のあの子たちにとっては、たとえ一年間でも、——ここにしか生きる場所がない——ということ……

とですな……!

作者 ……はい……。そのとおりでしよう!

やや間——スライド消える。

主任 ……!(立ちあがって、壁面の航空写真を視) お気づきになりましたでしょうね?

作者 はあ?

主任 この少年院には、コンクリートの扉がございませ……

作者 はあ? (あいまいに) ああ、そう言

えば

主任 刑務所当時の名残りですわね!

作者 ……？

主任 終戦直後は…海軍の学校から、南方引揚げ者の寮に使用されました…、それから米軍の接収—解除されましたから、一時期、刑務所になっておりました—敷地の表側の—裏側は山と海ですから—あの高い塀は、そのためなのです…

スライド—少年院のコンクリート塀のつづく風景(カラー)

主任 ……(微笑して)さようですね…全国の少年院で、こんな塀を持っているのはここだけです…

作者 ……あつては、いけないのですか？

主任 ……ないことが、たまえなのです…ここは刑務所—いわゆる、罪のつくないをする所ではないわけですから—

…よそから移送されてきた子は、先ずこれに魂げますよ…(微笑)

作者 ……移送といますと？

主任 (おだやかに)他の少年院から、更に移されてくることです…まあ、歴史の重い子たち…とでも言いますか…

作者 よそのところでは、更生できなかった

…子たち

主任 そうですね…その少年院の指導に、適応できなかった…ですから…(力を込めて)彼らにとっては、ここが最後の住み家ということですよ。

主任、ファイルから、資料統計表の小冊子を持ち出す。

主任 これをさしあげます…。昨年度までのものです…

スライド—統計表の表紙—

主任 この少年院には、現在は、百二十七名の少年が住んでおります。この冊子をご覧くだされば、およそお察しのことと思えますが、ここには、移送措置をうけた子が多いということですよ…

…ですから、わたくしどもは、文字どおり、ここが彼らにとつての、最後の更生の地であることを望んでおります—ここが最後の地であつてほしい—そのためのすべての努力が、わたくしどもの勤めでござります…。

やや間—作者冊子をめくる—スライド、ゆっくりと、冊子の中の「非行名の種類」の拡大部分に移る。

主任 ……ですから…！(つまづいて一言ごとに慎重に)…わたくしは、彼らに、この塀の外に出ることをすすめています…

作者 ……はあ？(冊子を見、傾倒して聴いている)

主任 ……(微笑)去年の暮れに街の映画館にまいりましたね、…みんなで、ちょうど彼らの好きな—例のやくざ映画の—は、は、タカクラ・ケンですか…

作者 はあ…？…そうしたこと

主任 逃げてしまうような子はおられません。この二年來、まったくありません…。そうことしからは、居室の壁にですね、写真を貼ることも自由にいたしました。

作者 写真…？

主任 (微笑)女の子の写真ですよ—歌手だとか、中には裸体など—雑誌の口絵を切りぬきましてね、はっは！

作者 なるほど…！

主任 職員間でも、ずい分もめました—これらの問題は—

作者 そうでしょうね…

主任 不思議なくらいです—仲間同志のけんか沙汰も、なくなりすからね！

作者 ……！(冊子を置く)

主任 ……たとえ、どんなひどい歴史を負った子供でも、この人間の住む社会から隔離しては、ほんとうの教育はできないのではないでしょうか…？ これは、どうやらやっとたどりついた—わたくしどもの自覚であるわけですが—少年院教育の基本としまして…

作者 「少年院教育…」

主任 (微笑して)そうですね、「少年院教育」—このことばも、おそらく初耳でしょうね—少年院という名の学校といつてはいけませんかな、

作者 そうですね、ほんとうに！(名札を見て)…でも先生のご身分は、法務省の

主任 法務省ですか、はっは、おかしな身分

作者 ……地域、教育委員会とは

主任 それが全くの没交渉でして…、私どもからは、お話をしかけるのですが、どうも

ね…！(唐突の強さで)この国の教育行政はだめです。やれ文部省の、厚生省の…、そして法務省の—ですか、お互い、固い塀をめぐらしているのですから！、こんな小さな国内で、なんで協力できないんですよ！

主任 ……どうしても、そこからはみ出さざるを得ない—そういう底辺から、徐々にでも変わっていくと思えます…。(微笑して)たとえは、こういう所から…！

今、少年院は、その限界にぶつかっているのですね…！こと、これは、今のこの国の青少年教育全般の課題とも言えますね！

作者 ……はあ、…(机上の冊子に茫然と手を出す)

スライド—ゆっくりと、もうひとつのコンクリート塀のつづく道の風景にかわる。

主任 わたくしの前任地は、関西のある小さな少年院でしたが、そこでは、近在の中学校と一緒に、運動会や学芸会をいたしました。ところが、この地に来てみて、全くの

閉鎖状態で…、それこそ厚いコンクリートに囲まれてしまっているようにして…

主任の話の後半から、作者を残して落暗—同時に、無数の声々のエコー『かんけないく』がことばを打ち消す—作者、冊子を手にしたまま、自失の態でそれに堪えて—空白。

主任 ……どうなさいました？ ご気分でも…？(以下しばらくは声のみ)

作者 ……(自問自答風に)…コンクリートの塀…？…ここに、コンクリートの…？(異様に、記憶をたぐろろと)…はっは！眼に入らなかつたんですね、きつと！…そういうえば、ここにくるまでに…わたくしは、余りに沢山のコンクリート塀を、見過ぎてしまったから

主任 ほう…？

作者 ……実を言いますと—このコンクリートの塀を、わたしは気付きませんでした！(苦笑の口辺)はっは、麻痺してしまつたんです、却つてわたくしの方が、…！、そうなんです、おかしいですね！

はっは、だから、わたしは逃げてきたんですね、……ここへ……」

主任 ……なるほど、（観察している）

作者 （異常な情熱で）……先生が、今、いろいろとお話しされましたように、このコングラートの塀について、わたしたちは、考えることを失くしてしまっただけです……は、そうですね……

主任 ……？ ふむ……

作者 勝手なことを申しあげてすみません。でも、たしかにそうなんです……ここの中では、先生方も、あの子たちも、いつも考えておられる——人間が、生きるためには……、どうしたらよいかということ——ですね……

主任 ……（威儀を正して）……はい、（やや間）

作者 ……実を申しあげますと、……わたしは……（改まって）お許しください、こんなお頼みをして……

主任 どうぞ、ご遠慮なく……

作者 ……（鞆の中から、大事そうに新聞紙をとりだす）……わたしが、どうしても、

ここへお伺いしたかったのは……この記事のことなんです……（卓上の冊子と名札を押しただいてしまい、新聞紙を開いて置く）

主任 ……（新聞を手にする——黙然）

スライド——記事の、朱線に囲まれた一部の拡大——

作者 ……（興奮の気味で）……中でも、この部分なんです！

記事文——「しかし、この千代ヶ崎の問題は、たんに文化財の破壊や保存といったことがらのみに終始する単純なものではない。海域埋め立て計画が表面化したとき、まず最初に、そして強硬に反対の態度をつらぬいたのは、千代ヶ崎少年院の職員たちであった。」

主任 ……（読みつづけて）「かれらにとつて、緑の山が削られ美しい海が失われると

いうことは、過ちを犯した少年たちを健全な人間として更生させる教育施設の、その教育環境を破壊されることであり、自分たちの任務にたつていて絶対に許すことができなかったからである」……

やや間——二人の沈思。

作者 ……この記事の書かれた学者とはご留意で？

主任 ……（微笑して）はい。

作者 おそらく、このことがなかったら、わたしは、こうして、お目にかかれなかったことでしょう。

主任 ……（記事を置いて、相手を見る）

作者 ……でも、わたしは、ここにくるまで……（微笑して）こわかったです。ここに書かれてあることが、真実であるのかどうか……それを確かめることが……

主任 はっは、どうしてですか？

作者 ……（吻として）正直のところ、わたしは役人を信用していないんで、はっは、わたしもそのひとりなんです……

主任 はっは、おたがいさまですな！

作者 でも安心しました。先生のお話を伺っ

ているうちに……（真剣に）……この記事の内容は、全部がほんとうですね？

主任 ……その通りです。……全国にも、これだけの海と緑の山を持つ、少年院は他にありません！

……（ぎっばりと）わたくしどもが、この子たちを、人格ある人間として、このコングラートの塀の外に出せますものからです……人間は、豊かな自然の中にある時は、不思議に信頼を取り戻しますね……わたくしはここに来ましてから、初めてそれが実感としてつかめました。

作者 わたしも来たかがありました……

……不思議なものですね、昨日まで……ここが……全然、わたしと無縁であったことが……

やや間——

主任 ……（茶わんをとり）さめてしまいましたが、かえってきましたよ……（立ちかけるを——）

作者 （制して）いいえ結構です。どうぞ、かまわないでください！

主任 ……そうですか！ はっは、どうも、ここは女手がないものですから……

——それぞれの思念の中に、とぎれて、やや間——遠くより波の音が——

スライド——以降、少年院の屋根棟のある風景（その（一）から、ゆっくりとその（二）に移る）

作者 ……波の音ですね……

主任 ほう、聞こえますね……夜は、もっと大きく響きます。……風の強い日などは……子供たちには、なおさら……

作者 あの音と、何を話すのでしょうか……

主任 ……（微笑して）作文・日記などが、好きになりましたね……

作者 でしょうね！……わたしも、へたなもの書きなどやってみよう……

主任 ……多分、そんなお方と……（ほほえむ）

作者 ……見たいものですな、その子供たちの……

主任 よろしかったら……ただ、本人の承諾を得ないと、こんな所ですから、はっは

作者 （あわてて）いえ、けっこうです！……そっとしておきましょう、はっは！

——やや間——波の音に、風がまじって

主任 ……あなたのおっしゃるとおりです。かえって、ここは「人の住める所」かも知れません、現代は、はっは……

作者 ……ことばを失った子供たちが……ここで、現に、ことばを取り戻している……

主任 おっしゃるとおりですな……（微笑）

作者 大げさな言い方ですが……今日、わたしは、ここへお伺いするまで、いいえ、昨日まではひとりきりで悩んでいました——公害・自然破壊の問題——どんなく人間

の、限りのない諸行……毎日の新聞の論説や投書欄など手当りしたい……はっは、家内からもあきらまれるほど、血まなこで読み漁って……（卓上の新聞を手）この記事の、この部分を読んで思ったのです！ わたしが、この長い間、うつうつと思い悩んでいたことが、決してわたしひとりの思いすごしでもなければ、病弱であるわたし個人だけの問題ではないという

ことです……

主任 ……はい……

作者 ……とても嬉しいんです……なんと言  
ったら……？ そう、ほんとうに慣ること  
ができた喜びです。もう、わたしは  
遠慮なく堂々とおこなうことができるので  
す……

主任 ……

作者 「少年院」ノ わたしが、ついぞ考え  
てもみなかった……、そして、ここに住む  
逃げ場のないこうした少年にまで、……彼  
らの手が伸びてきた……

主任 ……（おだやかに）世間の方には  
このコンクリートの塀しか見えませんか  
ね……（微笑）。しかも、この子たちは、  
自ら好んで、ここを住み家としたのではあ  
りません……ですから、それだけに、わた  
くしどもが守らなければと思うわけです  
な……

主任、立ちあがって、表面の航空写真を  
とりおろす。

主任 ……この地域附近は……ここに来られ  
る時にもお気づきでしょうが、工場と自衛

魯漁業をはじめとする工場群——おいでの  
時、ご覧になられたと思います——これら  
の排水からの汚染度の高い臭気が、もろに  
少年院を被うことが、しばしばあります。  
昨年でした……あの農耕地に植えました  
ラジオオラスの群衆が、この対岸に見える  
東京電力の排煙で、全滅したことがありま  
した……。子供たちは黙っていました……

主任 ……わたしはそれが辛いのです……黙  
っているあの子たちの習性が……

主任 こちら東の反対側が浦賀湾ですね。後  
程、千代ヶ崎海岸へ行かれる時に、見られ  
ると思います。ここは浦賀造船所——そ  
れがつい鼻の先の、もうここまで迫ってき  
ています……

この入江のこの沿岸一帯には、幾つかの  
工場——フランス資本の極東マックとかい  
う重工場なども、大型機械製品の輸送など  
の必要上、海岸埋め立ての進出を計ってい  
るようであります。それと並んで、それこ  
その海岸線を埋めつくしているのが、こ  
れが巨大な——住友重工——昔からの浦賀

隊と、それに米軍の基地と……。ご存じ  
のように、もともと明治この方、海軍の要  
塞地で、住民の少かった地域でした……。  
この千代ヶ崎海岸の埋め立てに、わたくし  
どもが、まっ先に反対せざるを得なかった  
のも、まことに残念ですが、そのためでご  
ざいます。

この地を、この子らの最後の住み家とす  
るためには、この海と緑の丘が、どうして  
も……この子たちの必要な条件なので——  
コンクリートの塀よりも、どんな施設より  
も——。……当然の要求ではないでしょう  
か、わたくしどもの任務といたしましては  
……。

作者 そうですよ、

主任 ……はっは、わたくしも、ついつい、  
法務官という身分や年を忘れましてね、  
（しみじみと）……人間を更生させるとい  
うこんな職業は、人間の思いあがりかもし  
れません……。……わたくしも、……あ  
の敗戦の時——ちょうど、学徒徴兵から内  
地に帰えさせられて……。自分から、こ  
の道に生涯を捧げようなどと、選んだもの  
の……、はっは、……罪深い人間が、人間  
だけの力では、到底及べるものではありません

ドック——です。  
やや間——主任、スライドと共に消えて  
——下手の応接間で、写真に見入る二人  
にスポットの輪。

作者 ……（溜息に似た嘆声）はあ……

主任 ……いかがです？

作者 ……（ぼそりと）ほんとうに残ってい  
るのは……ここだけですね……。（つぶ  
やく）——千代ヶ崎海岸——

主任 ……その新聞の記事ですがね、（お  
だやかにほえんで）あなたは……、その  
……（指して）こうした文化財については  
どうお考えですか？

作者 この遺跡のことですか、いくつか書い  
てありますね、

主任 ええ、（記事を読みあげる）「九千年  
前の、縄文時代初頭の平根山遺跡……」

スライド——現地の写真

主任 ちょうど、この裏山の海に面した中腹  
どころにあります。

……この記事を書かれた方は、考古学の

せん。四年前、ここに赴任して、この自  
然と共存してみても、なおさら感じます。  
……はっは、この埋め立て反対のおかげで、  
植物生態学の学者先生をお呼びしたりしま  
して、ずいぶん勉強をさせていただきまし  
た……。

……ここを、ご覧下さい！（写真の一  
部を指す）

スライド——少年院を中心とした航空写  
真（あるいは地図）——舞台、暗転。

主任、視聴覚室で、スライドの説明

主任 ……（スライド前で）これが、少年院  
の敷地ですね。そしてここが正門です。こ  
れが海岸線。これが院の背後を囲む丘陵地  
帯ですね。ちょうどこの岬の突端が、この  
附近で唯ひとつ残された自然海岸——千代  
ヶ崎の海——です。ですから少年院は、こ  
の浜辺の西角の入り口に位置していること  
になります。

この西のこちら側——久里浜湾の海岸線  
を見てください。  
この細かく区画されたこの大部分が、日

先生ですが……、こんどのことで、わたく  
しも呢懇になりました、ほんとうに勉強に  
もなりました！

作者 ……どうも、この年をして恥ずかしい  
のですが、その方面はさっぱりなんです。

……唯、わたしの直感に過ぎないのです  
が、こうした自然の破壊と同時に、遺跡破  
壊が行われるという全国的な類似形がある  
ことなんですね——どちらが先ということ  
でなく——自然であろうと、文化財であろ  
うと、わたしたち人間にとって、それこそ  
肉体と精神の結びつく……人間の生きてい  
くいのちとしての……欠かせないものだ  
と……

主任 どうも、わたくしたちの受けた日本の  
教育は、大事なものが欠けていたのですね  
作者 ……そうしたおとなたちが、こんな世  
の中にしてしまった……

主任 それから、もうひとつは、このどちら  
も、ひとたび破壊し失われてしまったら、  
二度と再現できないという……

作者 恐ろしいことです……昔の人が、その  
知識はなくとも、自然物や遺跡地を、ひと  
つのその地域の信仰文化の対象にしてタブ  
ー化していたというの、やはり保存のた

めの一形態とも考えられないでしょうか……これは、全くのわたしの独断ですが……主任 なるほど、おそらく、この裏山の緑地帯が、ここ一帯にだけ原生林の姿に留まっているというところは……やはり、ここに実在する、この多くの遺跡群とは無関係ではなかったのでしょうか。なるほど……よい景色——とは、いったいどういうこと——なんでしょうね。はっは、わたくしは、近頃そんなことも考えるようになりまして。

作者 古代の人の文化——ことにわが国の文化は、今とは違う、自然物との共存にあった……

主任 ……（記事を、順次に読みあげ）  
「縄文式土器と須恵器の散布地」——（スライド——土器の出土品の写真）  
「海蝕同穴」——（スライド——現地）  
「弥生式土器と土師器の散布地——浜辺に在った弥生時代の古い漁村跡」——（スライド——現地）  
「古代の墓地である——横穴古墳群」——（スライド——現地）

小鳥の声——二人、聞き耳をたてて……

作者 ……こうした緑の中に、文化財があった……わからないうちが、カブト虫や小鳥たちと同じように、何か、いのちあるものとして、子どもたちは受けとるでしょうね！

主任 彼らにとつては、人間の歴史を知るということは一番難問です……わたくしはもし機会が許されるのでしたら、こうした遺跡の調査に、直接、あの子たちの手で、土に触れさせてやりたいと思っております……

作者 ……（指して）ああ、海が少し見えませんね……対岸は房総半島ですね！  
主任 この先の方が、例の千代ヶ崎海岸——浦賀水道ですが……一服しましょ。浦賀水道を出す……いかがですか！  
作者 わたしはいけません、ぜんそく持ちで……どうも！  
主任 ……そりゃ、おこまりですね！

二人の、いこいの姿——やや間……

作者 すい分、沢山あるようですね！  
主任 縄文から古墳にかけての非常に長い時代の貴重なものらしいです……  
作者 しかも、よくも、これだけのものが、この一ヶ所に……緑の中に抱かれていたんですね……

主任 お送りがてら、裏山をご案内しましょう……  
暗転。舞台全体が緑の丘陵地（照明）となる手前から、主任を先に作者が登ってくる——小鳥の声など……

主任 （いそいそと）……少年たちの山です！これを登り切ると海が望めるのです……わたくしは、こういうのです——「おれたちの山」——はっは、彼らはなかなかそう呼んでくれないのです……しかし自然の緑とは何かということだけは、理屈ぬきに、少年の感覚でつかまえていってくれます……わたくしにとつては唯一の救いなのです……

作者 どういうことですか？ その——自然の緑——とは？  
主任 はっは、学者先生からの聞き囁じりなの……

作者 ……歴史というのは、人間を考える入り口でしょうね！  
主任 ……一番の苦手なんです。あの子たちには……  
作者 現実が重すぎて、それだけでも……  
主任 でも、ここなら出来そうですよ。ある子が、わたくしにこう言いました……  
「先生！自然というのは、昔から自然にあるものだよ……」……こんなことを言った子もいました——「おれが、一年半住んでいたこの土の上で、大昔に、やっばり住んでいたそいつらとは、きつと何かのかかわりがあるんだろうなあ……」……そこで拾ってきた土器の破片を見ての述懐でしたが……はっは彼にとつては、重大な悟りであったわけですね……

作者 どういう子だったのですか？  
主任 幼い時からの孤児でした——テキ屋の組員で殺人をした子です！ちょうど二十才になって、到々、ここが最後でなかった数少ない一人でした……別れがたい子供でした……  
作者 ……更生は……？  
主任 ……無理でしょうね、組織に入っていく

のですがね……（辺り一帯を指し示して）先ず……下草！ここは珍らしくした類が豊富です……そうして中間の高さには常緑の灌木類……

作者 なるほど……これはモクコクのたぐいでしょうか……  
主任 だろうと思います——そして更に上空を被うさまざまな喬木——はっは、そんなわけです……この辺一帯は広葉樹が多いらしいです……（だんだんと無邪気な少年のように）……そして、子供らが、一番敏感に嗅ぎつけるのは、こうした状態の中には、最も多数の小動物、生物が共存できるということだそうです。

作者 やはりカブト虫など……  
主任 ええ、最高の人気者でしてね！はっは、どこには何が——実によく知っております。身をもって学ばんですな！  
作者 持って帰っていいんですか？  
主任 話し合いで禁じられました。生命尊重です、はっは！  
作者 ……だいぶ、小鳥の種類が……！  
主任 そうそう、この冬の初め、この森にはどれだけ集まるか、共同調査をしました——まず、スケッチして図鑑と首っ引きで

いる子は十中八九……先ず、のがられません……  
作者 そうですか！  
主任 ……そう！（ポケットを探し、やっど見つけ出し）はあ、ありました……ええと、汚い字で読めますか……（紙片を作者に渡す）。この海にいる魚の名前で……これも自由学習のひとつでしてね！それを書いた子は入院したばかりの、他のことはさっぱりだめなのですが、こと海に關しては、夢中でしてね……

作者 ……（拾い読む）「きしの、ちかくに見えるのは、ウミタナゴ、メジナ、チャガラのむれ……これは、ハセのなかまでです……」……  
主任 函館在の漁師の子です。やはり埋め立てで海を追われて、多額の代償金をもらったものの、その為に家庭が破壊されて……近ごろよくある典型ですね。  
作者 （紙片を見て）……知能が低いんですか？  
主任 ええ、中程度の精薄児ですね。I・Q……五十代でしたな……

作者 そんな！  
主任 大分おりますよ！……そう、（厳し

い表情で)ひとつ、この少年院という所の一面の実体を、お知らせしましょう。

……というのは、度々申しあげましたように、子供らは、ここに追いこまれてきたのだという証拠でもあるわけです……。

作者 ……はあ?

主任 先程、差しあげました統計表に書いてありますが——I・Q——知能指数七十代以下、いわゆる精薄ラインが五十名ほどおります。一番多いのが八十代、これが六十名近く——境界線児・中間児とも学校で称ばれた子供たちです。……入院者の八十パーセントが、知恵おくれが、その非行の、ひとつの要素とも言えるのです!

作者 ……と言いますと……?

主任 ……くれぐれも誤解なされないようにお願いします……。わたくしの申しあげたことは、この子らの非行の起因は、社会環境——その境遇にあった——ということになりますね……!

……幼時期から、中学卒業の義務教育完了までの、長い生活の中で、どれだけこの子たちが大事にされていたか——差別でなしに——!

作者 ……まさに追いこまれたわけです!

主任 この子たちには、主に、農耕作業をやらせておりますが……! この山も、その海も……、より、この子らの住み家にして……!

作者 ……! (紙片をしめして) このノートをいただけませんか?

主任 (笑って) ……どうぞ、そんなもので……

作者 いいえ、りっぱな、記念作品です。

主任 はっは、……あとで本人に話しておきましょう、喜ぶでしょう!

作者 ……どうも! (大事にたたんでしまおう)

——やや間——

主任 ……(腰をあげて) そう言えば、極めて新しい遺跡があります。お気がつきましたか? この登り口の、裏庭の柵越しに……

……ちょうど新しい農耕地のそばですが、石の墓碑がありましたでしょう! ……(木立ちの間を探るように望み見て、指し示し) ……あ、あれです!

作者 はあ! ……お墓ですね!

主任 そうです。供養塔なのです……!

わたくしは、あれも大事な文化財にしておるのです。

……この初代の院長が建立したものでして……

作者 どなたのお墓ですか?

主任 ……敗戦直後のことですが……。南方引き揚げ部隊の船が、ちょうど……(指して)この沖合いで、コレラの病人を出しまして——上陸禁止ですね! ……みすみす懐かしい、この、祖国の緑を望みながら、

一歩も、この土を踏めずに、そのほとんど——幾千人とかが、死亡なされたとか——の、実話です。そのなきがらを、この海岸で、鉄板を並べて焼いたそうです——パーペーキュウのようだって子供らがいましたたが——、カンカン照りの真夏だったそうです……!

作者 ……はあ!

主任 子供たちは、あの墓を、絶えず身近に見ているわけです。——この国の隠された近代史をですね……

作者 まさに、悲惨な戦争の実証ですね!

……なぜ、こうした真相を……学校では大切に……

主任 はっは、どうも、長々とおしゃべりを

して……

作者 ……いいえ、(沈潜した感動の中で)

主任 こんな話を、聴いてくれる方が、どんなもおられないのですから、つい……

作者 あるだけ聴かしてください! どれも関係があるんです……!

主任 ……ここを埋め立てるということは、こうしたことにも

作者 (非常な熱意で) そうです。そうなんです! ……

——立ちすくむ二人——やや間——それぞれ  
れの思考の中で、以降は単々とした会話  
中で歩を進める二人……

主任 ……風が出てきたようすな! これ

からでは、少し寒いでしょう、海岸は……

作者 ええ、でも、千代ヶ崎海岸は、この眼

で確かめたいと思います。

……「江戸時代の灯明堂趾」というのは?

主任 この山の裏をまわって……大分、遠廻

りになりますが、ごくろうさまで……

作者 はい、でもその方が

主任 この先の切り通しをぬけますと、浦賀  
造船所のまん前に出ます。大きなクレーン

が林立していますから、驚かれますよ!

かまいませんから、その中を、山すそに添って右回して、この方角に戻ると……

……道は一本です……。今頃は、山の肌  
に椿の花が見えますよ、野生のものです  
が、それを楽しみながら、ゆっくりお  
歩き下さい……。五六百メートルほど  
で、すぐ岬の東の角に出ます——そこが  
千代ヶ崎です——波打ちわに出ますと、草  
むらのちよっと高まった中に、灯明堂趾が  
あります……。(暗転)

スライド——「灯明堂趾と古松」(以降の  
二人の会話は声のみ)

主任の声 『江戸の前期につくられたものと  
言われております——一本の古い松が哀れ  
です。』

作者の声 『幕末のお台場というのは?』

主任の声 『ちょうど、この千代ヶ崎の沖合  
に、あのペルリーの黒船が停泊したわけ  
ですね……。まあ、それらに備えてのお台場  
だったでしょう!』

スライド——「お台場趾」

スライド——「お台場趾」

作者の声 『……それから、明治になってか  
らの陸軍砲台……』

スライド——「砲台とその周辺」

主任の声 『この先の海岸側の山頂にありま  
す。時間がいまさら、ご覧くださ  
い。』

舞台の上手、下手の、それぞれに、主任  
と作者がスポットの中に浮かび出る。

主任 このせまい地域に、こんなにも数多い  
遺蹟や史実の趾——重要な文化財が隣席し  
ているということを、世間の方は、ほとん  
ど知らされていないのですね!

作者 いったい、それは、どういうことなん  
でしょう! わたしも、昨日まで、まった  
く知りませんでした……!

……そして、これらを、闇から闇に、葬り  
去ってしまうというとは……?

主任 ……! (新聞記事を読みあげる)

「横須賀市当局は、この千代ヶ崎の、緑の  
丘陵を切りくずし、海岸前面の海域、約三

十三万平方メートルを埋め立て、工事地帯ならびに、塵芥処理場を建設する計画を着々と進め、本年四月には着工を予定している。この工事の開始によって、以上の文化遺産が、壊滅的な打撃をうけることは明らかである」

……！ (回想をたどり動きながら) ……おそらく、この話を、一番最初に知ったのは、ここに住むわたくしどもでもあったと思うのです……！

(作者、消える)

……昭和四十三年……二年前の、ある肌寒い秋の午後でした……。わたくしは、新しい農耕地で土をふるい分ける少年たちと、あの知られざる歴史の墓のあたりに、たたずんでいた時でした。

下手より、二人の中年の男、ゆっくりとあたりの地形を物色しながら登場、近づいてくる。

主任 ……もしもし、なにか、ご用ですか？

男・A ……いや！ 別に……。 (何気ない風で) ……この土地も、少年院の敷地に入っているわけですか？

主任 ……なにか……？

男・A いやね、……このあたりに、市営の塵芥処理場が……。できたらと思うのでね！ ちょうど人家からも離れておるし……

男・B …… (地図を手にしている) 適地ですね！ 手ごろな

主任 あなた方は、市役所の方ですか？

男・B ……いえ…… (口ごもって)

男・A ははあ、いや、……市から頼まれましてなあ、

主任 どちらの方ですか？

男・B ……！ (上司らしきAを伺う)

男・A いや……。なにね！ ……その……。住友重工の者です。……下見にきたものでね、非公式ですが、調査のためのものです。……いや、失礼しました！ (会釈して、Bに) おい君！ 山の方に、ついでに行ってみるかな……

二人、去る——見送る主任。

主任 ……それから半年たった翌年の——

四十四年の春でございました——市当局から、塵芥処理場のための、土地の移譲の話がありましたのは——！ もちろん、わた

くしどもは、……承諾のご返事を申しあげられませんでした。

この際、はっきりご説明いたしますと——、あの住友重工とのいきさつは、いっさい、役所は、ほおかわりできて、……浦賀ドックの事業拡張に伴う海岸埋め立ての許可を、この塵芥処理場の建設と、交換条件にしたのでございましょう——たしかに、そうとしか考えられません。

……まだ、ございます……。この緑の丘陵一帯は、風致指定地区などによる、宅地開発禁止の区域として、ここに僅かに遺されていた自然の保護地でもあったはずでございます……。それを、塵芥処理場設置という公益の名目で、こともあろうに、大企業の工場街にするという——これは、明らかに、市側と企業者との結託で、盗みとったものと、解釈せざるを得ないのでございます！

作者の声 『……しかし、市当局では、まさ

か、この丘と海浜に、これだけの遺蹟や史実の貴重な文化財が、集結されていることを、知らないはずはないでしょう！』

主任 ……わたくしも、そう思いたいのですが……！

主任 ……ですから、わたくしの恐れること

は……？ わたくしが一番、恐れること

は、……あなたも、もうすでにお解りの通り……！ 『関係ない！』——ということ

です！

——深い沈黙の二人——

作者 …… (つぶやく) 『関係ねえや！』

主任 そうです！ ……ここに入ってきた

時の、この子たちの共通の合言葉です！

「おれたちは、おれたちには関係ない」——

「海も、山も……、社会も、そして人間

も……！」

作者 …… 「かんけいない」……

主任 そう、まさに、全くの関係ねえやで

す。彼らは、腹の底から、も早、二度と、

すべてのものから背を向けるでしょう。関

係づけようとはしないでしよう！ ……そ

れが、彼らの、最後の追いつめられた自衛

の武器なのです……。

少年院のベルの音。

主任 (おだやかな微笑で) ああ、三時の時

作者の声 『…… (怒りを押さえて) いった

い……役所の、文化財保護関係の、学者、

役人は、……この事実をどう考えているの

でしょう！』

やや間——ある声々のエコー『かんけい

ないくく』が響いて——

スライド——二枚の写真がうつされる——

——その(一)、廃棄物の山で汚染されている

海浜、その(二)、同じく汚染されている山

の斜面。

主任 …… (怒りを押さえて) 「千代ヶ崎工

業団地……！」。この海岸の！ いいえ、

この少年たちの住む所の、眼の前で……、

「おれたちの山が」削られ、「おれたちの

海」が埋められる……！ わたくしは、もう

なんたびも申しあげておりますように、一

度、失われた自然は！ 遺蹟は、……二

度とは戻ってこないのです！ この美しい

ことばを持つ山と海が消されて…… (絶

句) ……三十三万平方メートルの——ばい

煙霧液の工場群が立ちならぶ——「住友重

工、極東マツク」とやらのほか、そのいう

ところの塵芥処理場……！



間でございます——今日は、子供らとお茶を飲む当番に当っておりますので……  
……お気をつけて！ お話を聴きたくだされて、ありがとうございます……

主任、消えて——作者のみ、茫然と立つ。

作者の声 『……わたしは、少年院の門を出た……。そのわたしの背中には、痛いように、今、わたしを見送ってくださった……  
りっぱな方の——頭をさげた姿が、焼きついていて……』（消える）

第四場 //そこにはあった

作者の声 『……わたしは、また歩き出した……まぼろしの海に向かって……』

作者、登場——。

作者 ……わたしの胸のポケットには、あの頭の弱い、一少年の記した——北国の漁師の子の——メモが、秘められていた。

……わたしは途中で、また何回か咳きこ

離の所で……、ぬけるような藍色の水の帯と、明確な一線を画していた……』

(やや間)

老婆の声 『……あそこは、昔は、いい海だっただよ。髪ももともとも貝がなくならねえ……汐が特別なんだよ！』

主任の声 『……ここは、特別な汐の流れが、きつとあるに違いありません。浦賀水道に、直接面しているからでしょう！』

——やや間。作者、ゆっくりと歩を進ぶ  
作者、もも色の貝を拾う。

主任の声 『もも色の、きれいな貝ですね！……それは、——ナミマガシワ——というそうです。』

——作者、もう一個を拾う。

ははあ！ その赤いすじのついたやつですね……、アスマニシキ、はっは、すもうとりのような名だと、子どもらが言っていました……。みんな教わったのです、子どもたちにも……！

んだ……（立ちどまって）……見上げた先に、椿の赤い花が、ほほえんでいた……。  
……わたしは……呼吸が止まるのではないかと思つた……

(ポケットを、苦しげにさぐり、紙片を取り出して読みあげる——半ばより、主題のメロデーが徐々に高まる)

作者 「岸のちかくに見えるのは……、ウミタナゴ、メジナ、そして茶ガラのむれ……！ これは、ハゼのなかまです……。釣れるのは……、カワハギ、ベラ……カサゴ……！

ふゆは、カレイ、アイナメノ、なつは、ハゼ、フッコ、キスノ、貝は、イタヤガイ、アサリノ、カニは、イソガニ、ショウジンガニノ、沖に出ると、アジ、サバのむれノ、ときどき、カマスや、ハマチノ、おれのすきな貝は、ハナイタヤ……これは、死んだ親じが、とてもすきだったです……！

急激に暗転——作者が消えると同時に、スライド、(舞台一面に大きく)——千

——作者、もう一枚を拾う。

……そう！ その小さな、ムラサキ貝といえは、去年の夏の終り……ここを退院した無口な子でしたね！……非行名は窃盗でした。十八才の、まだかわいいほおをしていました。多分、母親へのおみやげでもあったのでしょうか……！

布袋に、いっぱい蒐集してありましてね！ 東京の下町の貧しい家の子でしたよ。わたくしが尋ねましたら、例の通り……、「関係ねえやノ」って、笑ってましたがね！

(やや間。)

作者 (きわめて明確に)……今、わたしの歩む道は！……右手のなだらかな丘の裾と……、左手の海の広がる……、それは、全き、土と水との接する——自然の世界——！

……この滑つたいに、西に向かって……すなわち、さっき別れたばかりの、少年たちの住む方向に向けて……

やや間——ゆっくりとした波のざわめきに消えようとしている。

代ヶ崎海岸の全景——(カラリ・または照明でその感じを出す)  
メロデー、高まる。

作者の声 『……わたしは、息を呑んだ！……しばらく立っていた……！

……灯明堂社のまわりには、しゃくなげの葉に似た灌木の群棲と、水仙の白い花が点在して……、わたしはゆっくりと波の寄せる……白砂の上に立った……。』

作者 ……「千代ヶ崎・海岸」ノ

——間——メロデー消えて

作者 ……わたしの前には、海の水があつた……！ たしかに海の水だった……！

作者の声 『……それは、とても、やさしく、やわらかく小春の日射しに溶けこんでいた！……とどこどころ、黒い岩の背が、まるで、すなおな少年の頭のように……、波の愛撫にまかせていた！

……わたしの足の下の……、ピンク色に染まった砂の肌が、静かに、透明な水と重なって……、いつの間にか、緑の敷物となり……、やがて、沖合の……、ある一定の距

——作者、思念の中で、歩む——

作者の声 『……自然とは、なんだらう……！ /平和とはなんだらう！……とにかく、わたしは、今は、全き人間の思考の中にいる……！……少年院の裏の海が……もう近い……！ 冬の日、短い！』(静かに溶暗——風の音、ややして)

終曲 //汐風が吹きあげて

——前場からつづく波の音の高まりにつれて、風が強く鳴りはじむ——。

作者の声 『……わたしは、なぜ、こんな所に立っているのか……！ なぜ、こんな所に！』

序曲と同じ場面——少年院の鉄冊を背景にした岩壁の上——暮明の光の中に、浮かび出る作者の立ち姿。

作者 ……(燃を立てる) 水平線は、風の中に消えようとしている。

は、……白い飛沫だけを残して……淵の中  
に消えようとしている。  
……海だ。この地球の大半を被っている  
厚いペール……水と大気と。今、それ  
らが、ひとつになつて、わたしを包みこも  
としている……。

若者の声「知らねえな。関係ねえよ！」

作者、声の方に視線を向ける。鉄冊の向  
うに、三人の少年像が、沈思した姿のシ  
ルエットで浮かび出る——主題のメロデ  
ーが、かすかに——。

作者 (一語ごと、じつくりとした思念の中  
で)……わたしは、ここで見た。ここに  
はあった……。

……この残された僅かな——丘と海の自  
然の中に——。

その美しきが故に、ここに生き、ここで  
果てた、幾多の人のいのちの跡と、そうし  
た君たちの、そのいとなみとを……。

……たしかに、その多くは、この国の歴  
史の中で、この人の世から——この地に追  
われたものではあつたらう……、わたしも

同じだ！

……しかし、今、それは、それが故に……  
……自然と人との、いのちの奏でるデュー  
ット——腹の底から突きあげる、たし  
かな歌であつたのだ！

メロデーと共に、徐々に風波が激しくな  
つてくる。

作者 ……ほら、汐風が吹きあげてきた……  
……今、それらの歌声が、それらの歴史  
の、それらの実在のすべてが、わたしたち  
の眼前から、姿を消そうとしている——そ  
の存在——がだ！

(大きく、双手をあげて叫ぶ)  
……マッサッ！……そうだ。まさに、  
関係ないと……。

……わたしたちを、ここに追いやった！  
同じ、その何者かの手で……。

メロディーがかき消えて、高まる風波——  
——頭をあげる少年の像……

作者 ……そう……聞こえるね、君たち！  
汐風が、今、吹きあげてきたのだ……。

君たちの歌だよ！……ここ千代ヶ崎の海

と丘に……、……今、その風としぶきに、  
全身をさらして、君らは立っている。生き  
ている！

……君たちが、その手で、その足で……  
、カッターのオールを、力いっぱい握った  
という——海！

……君たちが、その腕で、その腰で、鋏  
をぶちこんだという——土！

……千代ヶ崎少年院！  
……(とぎれて)……ほら、汐風が、吹き  
あげているんだ——聞こえるね……。

ある無数の声々のエコー「かんけいなし  
……」

作者 ……だれが逃げるものか！逃げては  
だめだ！

立ちあがる少年像——

作者 ……(風波に抗して)そうだ、聞かし  
てくれ、君たちの歌声を！この水と土に  
生きている——君の、その屈辱の息吹を！  
君のその若い全身を、腹の底から歌って

れ……。

——深い間。風波の怒号——三人の立ち  
姿が、静かに近寄ってくる(舞台前方)

——作者の姿が徐々に消えて——少年た  
ち、柵の所でびたりと止まる。それぞれ  
にスポットが静かに当り、少年三人の各  
自の面貌が、初めて明らかに……。  
同時に、すべての音、最高潮に達して、  
と絶える——沈い寂問——。

柵の向う、舞台の奥の一隅に、主任が登  
場する……。

主任 ……。(呻きに近く)……わたくし  
の……、いちばん……おそれることは……  
……。(つまって、前方をにらむ)

少年たち——こぶしを固め、怒りを込め  
て、各自に一気に——叫ぶ！

少年・A ……海なんか、なくなってしまえ  
ばいいんだ！

少年・B ……山なんか、なくなってしまえ

少年・C おれたちにな、関係ねえよ！

そのままの——四人の立像——。  
噴出するように、主題のメロディーが大  
きく鳴り響く中を……

幕

(作者あとがき)

◎この作中の登場人物に関する、言動  
の内容と挿話は、すべてフィクシ  
ョンです。

◎この作の題名「潮風が吹きあげて」  
は、序言のとおり、田村倫彦氏の同  
名の作品から拝借したものです。拝  
借と申しましても、永遠にお返しで  
きるに足る秀題は、見つからないか  
もしれませんが。

八 田 元 夫 著

## からだ文化の出発点だ (労働者との対話)

「演劇との対話」について大胆に提起する働くものの文化の本質

- 第1話 働く人々の中の文化
- 第2話 四半世紀の自己総括
- 第3話 余暇と創造
- 第4話 からだが文化の出発点だ

民衆社刊・¥900

上演のために

■ 作者の住所

中村おがわ 市川市国府台五―六―一 武本方  
大橋 喜一 川崎市幸区小向野町三―二号―三二  
須間 一 和歌山市湊二一九三別院清  
かたおかしろう 大阪市岸田堂西二―六七  
栗原 省 和歌山県有田郡湯浅町島ノ内  
浅野 良二 神戸市兵庫区石井町一―二五  
島 源三 岐阜市長住町八―五  
小鹿利四郎 横滨市中区滝ノ上二―九宇都宮襄治

■ 上演の場合のおねがい

掲載作品を上演する場合には、必ず次のことを守ってください。  
第一に、作者の許可を得て上演することです。無断上演はもろん札を欠くこととなりますが、作者はできるかぎり上演舞台をみて自分の勉強もしたいし、上演の成功のためにできる協力を望んでいます。その協力関係から、お互いの成長を上げていきたいのです。その意味で作者への連絡をキチンとつけてから稽古にかかってください。

第二は上演料のことです。お金のことをいうときたないような感覚が、私たちに共通してありますが、上演会場に使用料を払うように、作品にも使用料が必要です。それが乏しいとしても、作者の再生産を保證する力になります。

東西リ演では、日本演劇協会の規定に準じて、次のように上演料をきめていきます。

- A 無料公演のとき(一回につき)
    - 一幕物 一〇〇〇円以上・多幕物 二〇〇〇円以上
    - B 有料公演のとき
      - 一幕物 二五〇〇円以上・多幕物 一〇〇〇〇円以上
- 以上のことを尊重しあって、この掲載作品が全国各地で舞台化されることを期待します。

既刊号掲載戯曲

九号 島 源三	九〇〇一列車接近	150円
一〇号 岡崎 繁	テントからの報告	〃
一二号 土屋 清	星をみつめて	〃
別冊(1) 栗木英章	署名	品切
〃 黒沢参吉	夜	〃
〃 小島真木	片隅から	〃
〃 島 源三	小さな駅のある物語	〃
〃 〃	オキナワ	〃
〃 〃	事前協議	〃
〃 〃	通話停止執行	〃
〃 〃	ひろしま一九六九	〃
〃 〃	傷	150円
一四号 黒沢参吉	白い鴉あるいはころもがえ	200円
一七号 小坂 忠	鉛筆	180円
一八号 柴崎卓三	とろいめらい	250円
別冊(2) 黒沢参吉	兄妹	〃
〃 小島真木	お出かけ前	〃
〃 栗木英章	喪の季節	〃
〃 〃	川向う	〃
〃 〃	あの世はこの世のあの世である	〃
〃 〃	こばやしひろし	220円
〃 〃	まつきなかし	〃
二二号	四(とりこ)	〃

■ あとがき ■

◇お年玉に戯曲集と心づもりだったのですが、遅れてしまいました。すでに、活潑に七三年のスケジュールに入られている集団も多いことと思います。お年玉ではなく、今や、たかひの武器として活用して下さるようおねがひいたします。

◇内容では、予告した土屋清さんのが出来上らず、代りに老練な浅野良二氏の小品が登場しました。小鹿利氏の「潮風」は、すでに決っていたもので、予告洩れのものです。不手際をお詫び致します。

◇この戯曲集のために、大橋喜一、中村おがわ両氏共作の、佳品をいただきましたことを心から御礼申し上げます。

◇東西リ演のなかまたちの熱烈な支持によって実現したこの戯曲集を、さらに充実したものにするために、いっそうの東西リ演作家諸氏のご協力をお願いいたします。

◇新しい年の新しいたたかひに向けて、固い握手！

(もも)

演劇会議 別冊3号 一九七三年二月一五日発行

定価 三〇〇円(送料七〇円)

編集委員

萩坂桃彦・塚越松雄・黒沢参吉

こばやしひろし・久保孝志

藤沢 薫・猿渡公一・栗原 省

発行所

演劇会議 発行所

川崎市川崎区小田四―二八―一七

萩坂方

電話 〇四四 〇七七五